

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（170）

中小河川改修事業（万之瀬川）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書（X）

しば はら
芝原遺跡 3

（南さつま市金峰町）

古代・中世・近世編

2012年3月

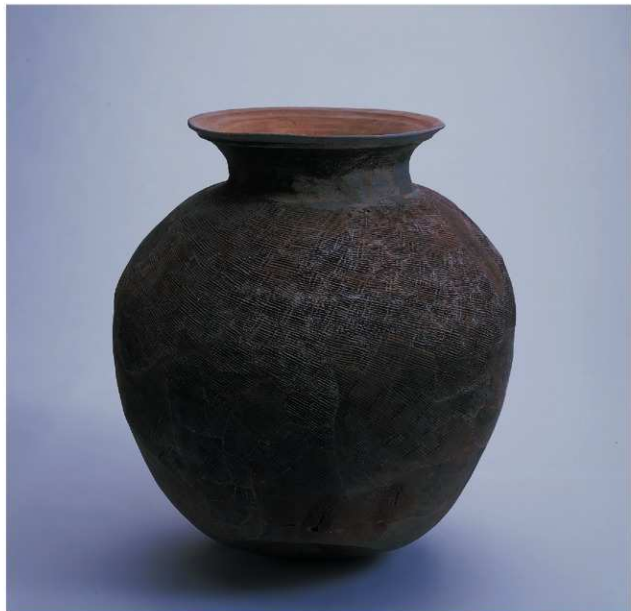
鹿児島県立埋蔵文化財センター



上空から見た芝原遺跡（南から北を望む）



芝原遺跡出土「多口瓶」(古代)



須恵器大甕244 244底部の凹み

芝原遺跡出土「須恵器大甕」(古代)



大量に出土した中世陶磁器

序 文

この報告書は、万之瀬川の河川改修事業に伴って、平成11年度から平成16年度にかけて実施した、南さつま市金峰町に所在する芝原遺跡の発掘調査の記録(古代から近世編)です。

芝原遺跡では、縄文時代中・後期の遺構・遺物をはじめ、近世まで連続とした生活跡が発見されました。中でも、本報告書に掲載されている古代の土器集中箇所から発見された墨書土器、中世の多彩な貿易陶磁器、中世から近世の製鉄に関連する遺構・遺物などは、今後、万之瀬川周辺地域の調査・研究に大いに貢献するものと思われます。

また、本改修事業に伴って調査された持鉢松遺跡や上水流遺跡、波畑遺跡の報告書が既に刊行され、多くの重要な情報を私たちにもたらしてくれました。さらに、当遺跡の周辺には、縄文時代から古代・中世の遺跡が数多く所在しており、この地域は考古学的にも注目を集めている地域でもあります。

本報告書を、県民をはじめ多くの方々に御覧いただき、地域に所在する埋蔵文化財の持つ多様な価値を御理解いただくことにより、国民の共有財産として文化財が保護・活用されることを祈念しております。

なお、弥生・古墳時代編については、今後計画的に報告書を刊行する予定です。

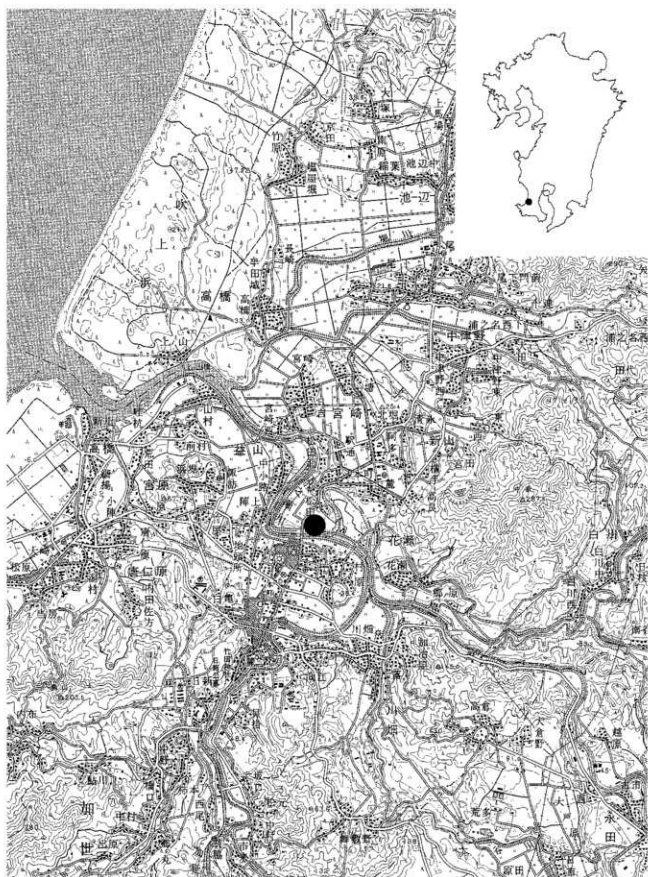
最後に、調査に当たり、ご協力いただいた南薩地域振興局建設部(旧伊集院土木事務所)、南さつま市教育委員会、関係各機関及び発掘調査に従事された地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成24年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長 寺田 仁志

報告書抄録

ふりがな	しばはら いせき							
書名	芝原遺跡3							
副書名	中小河川改修事業（万之瀬川）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	X							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第170集							
編著者名	関明恵・長崎慎太郎・有馬孝一・上床真・平屋大介・大久保浩二							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL 0995-48-5811							
発行年月日	2012年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	面積 (㎡)	調査起因
		市町村	遺跡番号					
しばはら いせき 芝原遺跡	みなみ 南さつ しんぼん ま市金峰 ちようおお 町大字 みやざきはまき 宮崎濱崎	46220	35-81	31° 25' 40"	130° 19' 37"	1999.10.15～ 2000.3.22 2000.4.24～ 2001.1.25 2001.5.7～ 2002.3.19 2002.5.7～ 2003.3.20 2003.5.6～ 2004.3.22 2004.5.14～ 2004.7.21	49,600	中小河川改修（万之瀬川）
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
芝原遺跡	集落跡	古代	溝状遺構 方形竪穴建物跡 掘立柱建物跡 土坑 ビット 土坑墓		土師器・黒色土器・赤色土器・須恵器・多口瓶・墨書土器・ヘラ書き土器・紡錘車・石帯・古銭			
		中世	溝状遺構 方形竪穴建物跡 掘立柱建物跡 製鉄関連遺構 土坑墓（木棺墓） 土坑 ビット カマド		土師器・青磁・白磁・青白磁 青花・中国陶器・朝鮮陶器 ベトナム陶器・瓦器・中世須恵器（東播系・カムイヤキ・樺万丈産）・国産陶器（瀬戸・美濃・常滑・備前）・瓦質土器・土師質土器・中国瓦・滑石製品・砥石・古銭・人骨			
		近世	畠跡跡広域 溝状遺構 掘立柱建物跡 製鉄関連遺構 カマド 土坑墓（木棺墓）土坑 ビット 焼土 古道		肥前陶磁器・薩摩焼 鍛冶滓・轆の羽口 古銭・煙管・人骨			
遺跡の概要	<p>芝原遺跡は、縄文時代中期から近世までの遺構・遺物が発見されている複合遺跡である。今回の報告は、古代から近世の遺構・遺物編である。</p> <p>本遺跡では、古代の方形竪穴建物跡や中世・近世の掘立柱建物跡、土坑墓や木棺墓、鍛冶炉跡など、当時の生活様式を知る上で貴重な遺構が検出された。</p> <p>また、古代の遺物として多量の土師器や須恵器、中世の輸入陶磁器や国内産陶器、近世の薩摩焼や肥前陶器などが出土した。特に、古代の土器集中箇所から発見された墨書土器やヘラ書き土器、中世の多彩な貿易陶磁器、中世から近世の製鉄に関する遺物などは、当時の国内外と交流や生活の様子の解明につながるものである。</p>							



芝原遺跡の位置図 (1/50,000)

例 言

- 1 本書は、中小河川改修事業（万之瀬川）に伴う芝原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県南さつま市金峰町（旧日置郡金峰町）宮崎に所在する。
- 3 発掘調査及び報告書作成（整理作業）は、県土木部河川課から鹿児島県教育委員会が依頼を受け、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査は、平成11年10月15日～平成12年3月22日、平成12年4月24日～平成13年1月25日、平成13年5月7日～平成14年3月19日、平成14年5月7日～平成15年3月20日、平成15年5月6日～平成16年3月22日、平成16年5月14日～平成16年7月21日にかけて実施し、整理作業・報告書作成は平成17年度から平成23年度に実施した。
- 5 遺物番号は、通し番号とした。本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
- 6 遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する予定である。なお、芝原遺跡の遺物注記の略号は「SHB」である。
- 7 挿図の縮尺は、各図面に示した。
- 8 本書で用いたレベル数値は、県土木部が提示した工事計画図面に基づく海拔絶対高である。
- 9 発掘調査における図面の作成、写真の撮影は、各年度の調査担当者が行った。空中写真撮影は、有限会社ふじた、有限会社スカイサーベイ九州に委託した。
- 10 土器の実測・トレースは、大久保浩二・関明恵・長崎慎太郎が行った。
- 11 陶磁器の実測・トレースは平屋大介・関が行い、一部は株式会社大成エンジニアリングに委託し、監修は関が行った。
- 12 鉄器の実測・トレースは上床真・有馬孝一が行い、分析については株式会社九州テクノ・リサーチに委託し、監修は上床が行った。
- 13 自然科学分析は、株式会社バリノ・サーヴェイ、株式会社古環境研究所に委託した。
- 14 遺物の写真撮影は、吉岡康弘・西園勝彦・辻明啓が行った。
- 15 本書の執筆並びに編集は関が担当し、執筆の分担は次のとおりである。

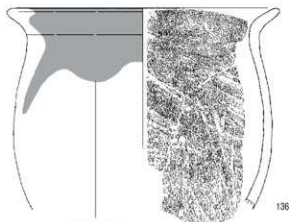
第1章～第2章	大久保・平屋
第3章 第1節～第2節	大久保・平屋
第3節	大久保・有馬・平屋
1	長崎・有馬
2	関・有馬・平屋
3	関・有馬
第4章	各文頭に記載
第5章 総括 第1節	有馬
第2節	長崎
第3節	関・平屋
第4節	関
補遺	大久保

凡

- 1 本書で用いるかまど遺構の表現については、次のとおりである。(下図参照)



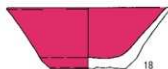
- 2 本書で用いる土器の表現は、次のとおりである。



煤付着範囲



黒色土器 黒色部分



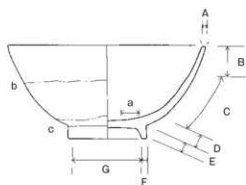
赤色土器 丹塗り部分

例

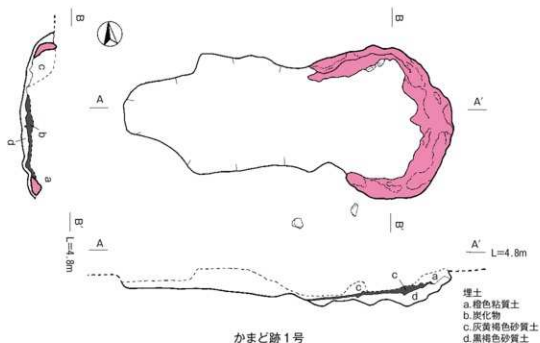
- 3 本書で用いる中・近世の陶磁器の名称、表現方法については、以下のとおりである。

- 【名称】 A 口唇部
B 口縁部
C 体部
D 腰部
E 高台脇
F 畳付
G 高台内面

- 【表現】 a 見込みの軸測ぎ
b 一次施軸ライン
c 二次施軸ライン



陶磁器の名称



かまど跡1号

目 次

巻頭図版	
序文	
報告書抄録	
例言	
凡例	
目次	
第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 事前調査	1
第3節 本調査	2
第4節 整理・報告書作成	6
第2章 遺跡の位置と環境	9
第1節 地理的環境	9
第2節 歴史的環境	9
第3章 調査の方法と成果	15
第1節 調査の方法	15
第2節 層序	16
第3節 調査の成果	18
1 古代の調査	18
(1) 調査の概要	18
(2) 出土遺物の分類方法	18
(3) 遺構	18
(4) 遺物	92
2 中世の調査	119
(1) 調査の概要	119
(2) 出土遺物の分類方法	119
(3) 遺構	119
(4) 遺物	238
3 近世の調査	327
(1) 調査の概要	327
(2) 出土遺物の分類方法	327
(3) 遺構	327
(4) 遺物	389
第4章 自然科学分析	427
第5章 総括	481
補遺	495
図版	

挿図目次

芝原遺跡の位置図 (1/50,000)	第47図	土坑墓2、3号・3号出土遺物	63
第1図 遺跡周辺の旧地形	第48図	ビット・ビット内出土遺物 (1)	64
第2図 周辺遺跡位置図	第49図	ビット内出土遺物 (2)	65
第3図 芝原遺跡の基本土層図	第50図	溝1～4号	66
第4図 芝原遺跡の調査範囲とグリッド図	第51図	溝4号出土遺物	68
第5図 古代全体遺構図1	第52図	溝5～8号・溝5～7号出土遺物	69
第6図 古代全体遺構図2	第53図	溝8号(東)出土遺物 (1)	70
第7図 古代遺構配置図1	第54図	溝8号(東)出土遺物 (2)	71
第8図 古代遺構配置図2	第55図	溝8号(北)出土遺物 (1)	72
第9図 古代遺構配置図3	第56図	溝8号(北)出土遺物 (2)	73
第10図 古代遺構配置図4	第57図	溝8号(北)出土遺物 (3)	74
第11図 古代遺構配置図5	第58図	溝8号(北)出土遺物 (4)	75
第12図 古代遺構配置図6	第59図	溝8号(北)出土遺物 (5)	76
第13図 古代遺構配置図7	第60図	溝8号(北)出土遺物 (6)	77
第14図 古代遺構配置図8	第61図	溝8号(西)出土遺物 (1)	78
第15図 古代遺構配置図9	第62図	溝8号(西)出土遺物 (2)	79
第16図 古代遺構配置図10	第63図	溝8号(西)出土遺物 (3)	80
第17図 古代遺構配置図11	第64図	溝8号(西)出土遺物 (4)	81
第18図 古代遺構配置図12	第65図	溝8号(西)出土遺物 (5)	82
第19図 古代遺構配置図13	第66図	溝8号(西)出土遺物 (6)	83
第20図 古代遺構配置図14	第67図	溝8号(西)出土遺物 (7)	84
第21図 古代遺構配置図15	第68図	溝8号(西)出土遺物 (8)	85
第22図 古代遺構配置図16	第69図	溝8号(西)出土遺物 (9)	86
第23図 古代遺構配置図17	第70図	溝8号(西)出土遺物 (10)	87
第24図 古代遺構配置図18	第71図	溝9～17号	88
第25図 古代遺構配置図19	第72図	土師器 椀	92
第26図 古代遺構配置図20	第73図	土師器 坏 (1)	93
第27図 古代遺構配置図21	第74図	土師器 坏 (2)	94
第28図 古代遺構配置図22	第75図	土師器 皿ほか・黒色土器	95
第29図 古代遺構配置図23	第76図	赤色土器	96
第30図 古代遺構配置図24	第77図	須恵器 蓋	97
第31図 掘立柱建物跡1、2号	第78図	須恵器 椀・坏・皿	98
第32図 掘立柱建物跡3、4号・3号出土遺物	第79図	須恵器 甕	99
第33図 掘立柱建物跡5、6号	第80図	須恵器 甕・鉢・壺	100
第34図 掘立柱建物跡7、8号	第81図	須恵器 壺・椀ほか	101
第35図 掘立柱建物跡9、10号	第82図	土製品1	102
第36図 掘立柱建物跡11、12号	第83図	土製品2	103
第37図 掘立柱建物跡13、14号	第84図	墨書土器1	104
第38図 掘立柱建物跡15号・竪穴建物状遺構・ 竪穴建物状遺構出土遺物・炉跡	第85図	墨書土器2	105
第39図 土坑1号遺物出土状況	第86図	墨書・「宅」の分類	106
第40図 土坑1号完掘状況	第87図	墨書土器3	106
第41図 土坑1号出土遺物 (1)	第88図	ヘラ書き土器1	107
第42図 土坑1号出土遺物 (2)	第89図	ヘラ書き土器2	108
第43図 土坑1号出土遺物 (3)	第90図	ヘラ書き土器3	109
第44図 土坑2～5号・出土遺物	第91図	ヘラ書き土器4	110
第45図 土坑6、7号・出土遺物	第92図	ヘラ書き土器5	111
第46図 土坑墓1号・出土遺物	第93図	ヘラ書き土器6	112
	第94図	ヘラ書き土器7	113

第95区	中世全体遺構図1	120	第145区	竪穴建物跡3, 4号・4号出土遺物	170
第96区	中世全体遺構図2	121	第146区	竪穴建物跡5号	171
第97区	中世遺構配置図1	122	第147区	竪穴建物跡6号遺物出土状況	172
第98区	中世遺構配置図2	123	第148区	竪穴建物跡6号完掘状況・出土遺物	173
第99区	中世遺構配置図3	124	第149区	竪穴建物跡7, 8号・7号出土遺物	174
第100区	中世遺構配置図4	125	第150区	竪穴建物跡9, 10号・出土遺物	175
第101区	中世遺構配置図5	126	第151区	竪穴建物跡11号	176
第102区	中世遺構配置図6	127	第152区	かまと跡1, 2号	177
第103区	中世遺構配置図7	128	第153区	かまと跡3号・出土遺物	178
第104区	中世遺構配置図8	129	第154区	かまと跡4～6号配置・かまと跡4号・ 出土遺物	179
第105区	中世遺構配置図9	130	第155区	かまと跡5号	180
第106区	中世遺構配置図10	131	第156区	かまと跡6, 7号・出土遺物	182
第107区	中世遺構配置図11	132	第157区	かまと跡8号	183
第108区	中世遺構配置図12	133	第158区	かまと跡9, 10号	184
第109区	中世遺構配置図13	134	第159区	かまと跡11号・出土遺物	185
第110区	中世遺構配置図14	135	第160区	かまと跡12, 13号	186
第111区	中世遺構配置図15	136	第161区	かまと跡14号	187
第112区	中世遺構配置図16	137	第162区	かまと跡15号	188
第113区	中世遺構配置図17	138	第163区	かまと跡16号	189
第114区	中世遺構配置図18	139	第164区	かまと跡17, 18号	190
第115区	中世遺構配置図19	140	第165区	かまと跡19号	191
第116区	中世遺構配置図20	141	第166区	かまと跡20, 21号・出土遺物	192
第117区	中世遺構配置図21	142	第167区	かまと跡22号	193
第118区	中世遺構配置図22	143	第168区	かまと跡23号	194
第119区	中世遺構配置図23	144	第169区	かまと跡24～26号	195
第120区	中世遺構配置図24	145	第170区	かまと跡27号	196
第121区	掘立柱建物跡1, 2号	146	第171区	かまと跡28, 29号・28号出土遺物	197
第122区	掘立柱建物跡3, 4号	147	第172区	製鉄関連遺構1, 2号	198
第123区	掘立柱建物跡5, 6号	148	第173区	製鉄関連遺構3～5号・3号出土遺物	199
第124区	掘立柱建物跡7号	149	第174区	製鉄関連遺構6号・出土遺物	200
第125区	掘立柱建物跡8, 9号	150	第175区	土坑1～4号・3, 4号出土遺物	202
第126区	掘立柱建物跡10, 11号	151	第176区	土坑5～8号・6, 7, 8号出土遺物	203
第127区	掘立柱建物跡12号・出土遺物	152	第177区	土坑9～11号・10, 11号出土遺物	204
第128区	掘立柱建物跡13, 14号	153	第178区	土坑12, 13号・出土遺物	205
第129区	掘立柱建物跡15, 16号・15号出土遺物	154	第179区	土坑14, 15号・15号出土遺物	206
第130区	掘立柱建物跡17号	155	第180区	土坑16～18号・出土遺物	207
第131区	掘立柱建物跡18号・出土遺物	156	第181区	土坑19, 20号・出土遺物	208
第132区	掘立柱建物跡19号	157	第182区	土坑21～23号・22, 23号出土遺物	210
第133区	掘立柱建物跡20号	158	第183区	土坑墓1～3号・出土遺物	211
第134区	掘立柱建物跡21号	159	第184区	土坑墓4号・出土遺物	212
第135区	掘立柱建物跡22号	160	第185区	土坑墓5号・出土遺物	213
第136区	掘立柱建物跡23, 24号	161	第186区	土坑墓6号	214
第137区	掘立柱建物跡25, 26号	162	第187区	土坑墓7号・出土遺物	215
第138区	掘立柱建物跡27, 28号	163	第188区	土坑墓8号・出土遺物	216
第139区	掘立柱建物跡29, 30号・30号出土遺物	164	第189区	土坑墓9号・出土遺物	217
第140区	掘立柱建物跡31号・出土遺物	165	第190区	土坑墓10号・出土遺物	218
第141区	掘立柱建物跡32, 33号	166	第191区	土坑墓11号・出土遺物	219
第142区	竪穴建物跡1号・出土遺物	167	第192区	土坑墓12, 13号・出土遺物	220
第143区	竪穴建物跡2号遺物出土状況	168	第193区	土坑墓14, 15号・14号出土遺物	221
第144区	竪穴建物跡2号完掘状況・出土遺物	169			

第194図	土坑墓16号・出土遺物	222	第244図	中国陶器6	274
第195図	土坑墓17号・出土遺物	223	第245図	中国陶器7	275
第196図	土坑墓18号・出土遺物	224	第246図	中国陶器8	276
第197図	裸, 土器集積遺構・出土遺物	225	第247図	中国陶器9	277
第198図	ピット1～5号	227	第248図	朝鮮陶器・ベトナム陶器	278
第199図	ピット内出土遺物(1)	228	第249図	瓦器	279
第200図	ピット内出土遺物(2)	229	第250図	中世須恵器1	280
第201図	ピット内出土遺物(3)	230	第251図	中世須恵器2	281
第202図	古道, 溝1～6・溝4出土遺物	231	第252図	中世須恵器3	282
第203図	溝7・出土遺物	232	第253図	中世須恵器4	283
第204図	溝8～12・溝10, 11出土遺物	234	第254図	中世陶器1	284
第205図	溝13～16・溝13, 14出土遺物	235	第255図	中世陶器2	285
第206図	溝17～21・溝19, 20出土遺物	236	第256図	中世陶器3	286
第207図	溝22～24・溝21, 23出土遺物	237	第257図	中世陶器4	287
第208図	土師器1	238	第258図	中世陶器5	288
第209図	土師器2	239	第259図	中世陶器6	289
第210図	土玉・土鐘1	240	第260図	瓦質土器1	290
第211図	土鐘2	241	第261図	瓦質土器2	291
第212図	青磁1	242	第262図	瓦質土器3	292
第213図	青磁2	243	第263図	瓦質土器4	293
第214図	青磁3	244	第264図	瓦質土器5	294
第215図	青磁4	245	第265図	瓦質土器6	295
第216図	青磁5	246	第266図	土師質土器1	296
第217図	青磁6	247	第267図	土師質土器2・その他	297
第218図	青磁7	248	第268図	瓦	298
第219図	青磁8	249	第269図	滑石製石鍋	299
第220図	青磁9	250	第270図	滑石製石鍋・滑石製品	300
第221図	青磁10	251	第271図	滑石製品・石製品	301
第222図	青磁11	252	第272図	砥石	302
第223図	青磁12	253	第273図	古銭1	304
第224図	青磁13	254	第274図	古銭2	305
第225図	白磁1	255	第275図	古銭3	306
第226図	白磁2	256	第276図	古銭4	307
第227図	白磁3	257	第277図	古銭5	308
第228図	白磁4	258	第278図	近世全体遺構図1	328
第229図	白磁5	259	第279図	近世全体遺構図2	329
第230図	青磁・白磁	260	第280図	近世遺構配置図1	330
第231図	青磁・白磁・青白磁	261	第281図	近世遺構配置図2	331
第232図	青花1	262	第282図	近世遺構配置図3	332
第233図	青花2	263	第283図	近世遺構配置図4	333
第234図	青花3	264	第284図	近世遺構配置図5	334
第235図	青花4	265	第285図	近世遺構配置図6	335
第236図	青花5	266	第286図	近世遺構配置図7	336
第237図	青花6	267	第287図	近世遺構配置図8	337
第238図	青花・赤絵	268	第288図	近世遺構配置図9	338
第239図	中国陶器1	269	第289図	近世遺構配置図10	339
第240図	中国陶器2	270	第290図	近世遺構配置図11	340
第241図	中国陶器3	271	第291図	近世遺構配置図12	341
第242図	中国陶器4	272	第292図	近世遺構配置図13	342
第243図	中国陶器5	273	第293図	近世遺構配置図14	343

第294図	近世遺構配置図15	344	断面3付近、自然流路2出土遺物	388	
第295図	近世遺構配置図16	345	第336図	磁器1 碗	389
第296図	近世遺構配置図17	346	第337図	磁器2 碗	390
第297図	近世遺構配置図18	347	第338図	磁器3 碗	391
第298図	近世遺構配置図19	348	第339図	磁器4 碗・小坏	392
第299図	近世遺構配置図20	349	第340図	磁器5 皿	393
第300図	近世遺構配置図21	350	第341図	磁器6 皿	394
第301図	近世遺構配置図22	351	第342図	磁器7 皿	395
第302図	近世遺構配置図23	352	第343図	磁器8 皿・鉢	396
第303図	近世遺構配置図24	353	第344図	磁器9 蓋・その他	397
第304図	掘立柱建物跡1、2号・出土遺物	354	第345図	陶器1 碗	398
第305図	焼土跡1～3号	355	第346図	陶器2 碗・小坏	399
第306図	製鉄関連遺構1、2号	357	第347図	陶器3 皿	400
第307図	製鉄関連遺構3号	358	第348図	陶器4 鉢	401
第308図	製鉄関連遺構4号	359	第349図	陶器5 德利	402
第309図	製鉄関連遺構5～8号・ 7号周辺鉄滓出土状況	360	第350図	陶器6 蓋・水注・土瓶	403
第310図	製鉄関連遺構9、10号	361	第351図	陶器7 土瓶	404
第311図	製鉄関連遺構11～16号	362	第352図	陶器8 土瓶・釜	405
第312図	製鉄関連遺構17～19号	363	第353図	陶器9 片口	406
第313図	土坑1～5号・2、5号出土遺物	365	第354図	陶器10 片口・鉢	407
第314図	土坑6～8号・8号出土遺物	366	第355図	陶器11 鉢・搦鉢	408
第315図	土坑墓1、2号・出土遺物	367	第356図	陶器12 搦鉢	409
第316図	土坑墓3～5号	368	第357図	陶器13 搦鉢	410
第317図	土坑墓6、7号・6号出土遺物	369	第358図	陶器14 蓋(甕・甕用)	411
第318図	土坑墓8～10号・9号出土遺物	370	第359図	陶器15 甕	412
第319図	土坑墓11号	371	第360図	陶器16 甕	413
第320図	確集積1～4号	372	第361図	陶器17 甕	414
第321図	石列・ビット1～3号・3号出土遺物	373	第362図	陶器18 甕	415
第322図	ビット4号・4、6号出土遺物	374	第363図	陶器19 灯明具・仏具	416
第323図	古道1～5・古道1～3断面	375	第364図	陶器20 その他	417
第324図	溝1・出土遺物	377	第365図	金属製品1	418
第325図	溝1出土遺物	378	第366図	金属製品2	419
第326図	溝2～5・溝3、4出土遺物	379	第367図	金属製品3	420
第327図	溝6～8・溝6、7出土遺物	380	第368図	補遺 縄文土器1	496
第328図	自然流路1断面1・出土遺物	381	第369図	補遺 縄文土器2	497
第329図	自然流路1断面1付近出土遺物(1)	382	第370図	補遺 縄文土器3	498
第330図	自然流路1断面1付近出土遺物(2)	383	第371図	補遺 縄文土器4	499
第331図	自然流路1断面1付近出土遺物(3)	384	第372図	補遺 縄文土器5	500
第332図	自然流路1断面1付近出土遺物(4)	385	第373図	補遺 縄文土器6	501
第333図	自然流路1断面1付近出土遺物(5)	386	第374図	補遺 石器1	502
第334図	自然流路1断面1付近出土遺物(6)	387	第375図	補遺 石器2	503
第335図	自然流路1断面2、断面3、 自然流路2断面・自然流路1断面1、		第376図	補遺 石器3	504
			第377図	補遺 渡畑遺跡	506

写真・図版目次

巻頭図版1	上空から見た芝原遺跡（南から北を望む）	図版41	青磁7・白磁4
巻頭図版2	芝原遺跡出土「多口瓶」（古代）	図版42	青磁8・白磁5
巻頭図版3	芝原遺跡出土「須恵器大甕」（古代）	図版43	青磁10・白磁7・青白磁
巻頭図版4	大量に出土した中世陶磁器	図版44	青花1
	説明会の様子	図版45	青花2
	上空から見た芝原遺跡周辺	図版46	青花3
	上空から見た芝原遺跡周辺（下流側から持鉢松・渡畑・芝原の各遺跡）	図版47	青花4
	土層堆積状況	図版48	青花5
図版1	芝原遺跡遠景	図版49	青花6
図版2	調査風景	図版50	青花7・赤絵
図版3	古代の調査1	図版51	中国陶器1
図版4	古代の調査2	図版52	中国陶器2
図版5	中世の調査1	図版53	中国陶器3
図版6	中世の調査2	図版54	中国陶器4
図版7	中世の調査3	図版55	中国陶器5・朝鮮陶器1
図版8	中世の調査4	図版56	中国陶器6
図版9	中世の調査5	図版57	中国陶器7
図版10	中世の調査6	図版58	中国陶器8・朝鮮陶器2・ベトナム陶器
図版11	中世の調査7	図版59	瓦器
図版12	中世の調査8	図版60	中世陶器1・中世須恵器1
図版13	近世の調査1	図版61	中世陶器2
図版14	近世の調査2	図版62	中世陶器3
図版15	近世の調査3	図版63	中世陶器4・中世須恵器2
図版16	古代の遺物	図版64	中世須恵器3・瓦質土器1
図版17	古代 土坑1号出土遺物	図版65	瓦質土器2・土師質土器・その他
図版18	古代 土師器碗・坏	図版66	瓦・滑石製石鍋
図版19	古代 土師器皿・鉢・甕	図版67	滑石製品
図版20	古代 黒色土器・赤色土器・須恵器	図版68	砥石
図版21	古代 須恵器壺・多口瓶	図版69	五輪塔
図版22	古代 須恵器大甕	図版70	近世 遺構内出土遺物
図版23	古代 墨書土器	図版71	近世 磁器1
図版24	古代 墨書土器「宅」	図版72	近世 磁器2
図版25	古代 ヘラ書き土器「宅」	図版73	近世 磁器3
図版26	古代 ヘラ書き土器 文字	図版74	近世 陶器1
図版27	古代 ヘラ書き土器・硯 その他	図版75	近世 陶器2
図版28	中世の出土遺物	図版76	近世 陶器3
図版29	中世 遺構内出土遺物1	図版77	近世 陶器4
図版30	中世 遺構内出土遺物2	図版78	近世 陶器5
図版31	中世 遺構内出土遺物3	図版79	近世 陶器6
図版32	中世土師器・土鍾	図版80	近世 陶器7
図版33	青磁1	図版81	金属製品
図版34	青磁2	図版82	鉄滓
図版35	青磁3	図版83	補遺 縄文土器1
図版36	青磁4	図版84	補遺 縄文土器文様展開写真
図版37	青磁5	図版85	補遺 縄文土器2
図版38	青磁6・白磁1	図版86	補遺 石器1
図版39	白磁2	図版87	補遺 石器2
図版40	白磁3	図版88	補遺 渡畑遺跡出土遺物

第1章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護と活用を図るため、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて各関係機関との間で協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、鹿児島県土木部河川課（以下「県土木部」）は、中小河川改修事業（万之瀬川）の日置郡金峰町内（現南さつま市）における事業計画実施に先立って、対象地内における埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育委員会文化課（現文化財課、以下「県文化財課」）に照会した。

これを受けて県文化財課、金峰町教育委員会が平成5年度に分布調査を実施したところ、事業区域内に万之瀬川川底遺跡、松ヶ鼻遺跡、持林松遺跡、渡畑遺跡、芝原遺跡、上水流遺跡の6遺跡の所在が判明した。

この結果を受けて、県土木部・県文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「県立埋文センター」）の3者で協議した結果、対象地内での遺跡の範囲と性格を把握するために当該地域において確認調査を実施することとした。

確認調査は、県立埋文センターが担当し、平成10年度に実施した。その結果、予定地において49,600㎡の範囲に遺跡が残存していることが確認された。

これを受けて、再度3者で協議した結果、本調査は、県立埋文センターが担当し、平成11年度から平成16年度に調査を実施した。

報告書作成作業は、県立埋文センターが担当し、平成17年度から報告書作成作業に着手した。平成22年3月に「芝原遺跡1縄文時代遺構編」、平成23年3月に「芝原遺跡2縄文時代遺物編」を刊行し、本年度は、「芝原遺跡3古代・中世・近世編」を刊行することとした。なお、平成24年度も継続して作業を実施し、報告書を刊行する計画である。

第2節 事前調査

1 分布調査

(1) 調査概要

県土木部は、中小河川改修事業（万之瀬川）の日置郡金峰町内（現南さつま市）における事業計画実施に先立って、対象地内における埋蔵文化財の有無について、県文化財課に照会した。

これを受けて県文化財課、金峰町教育委員会が平成5年度に事業区域内の分布調査を実施したところ、事業区域内に万之瀬川川底遺跡、松ヶ鼻遺跡、持林松遺跡、渡畑遺跡、芝原遺跡、上水流遺跡の6遺跡の所在が明らかとなった。

2 確認調査

(1) 調査概要

平成10年8月に県土木部・県文化財課・県立埋文センターの3者で今後の調査の進め方について協議した結果、平成10年度中に芝原遺跡の確認調査を実施することとした。

確認調査は、平成10年11月に実施した。

(2) 調査体制

事業主体	鹿児島県土木部河川課
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長	吉水 和人
調査企画	次長兼総務課長 尾崎 進
調査課長	戸崎 勝洋
調査課長補佐兼 第一調査係長	新東 晃一
主任文化財主事	青崎 和憲
調査担当	文化財主事 安藤 浩 文化財研究員 中村 和美
事務担当	主 査 前屋敷裕徳 主 査 政倉 孝弘 主 査 溜池 桂子

3 調査経過

事業区域内に2m×10mを基本としたトレンチを、ほぼ50mおきに13本設定した（第4図）。確認調査面積は339㎡であった。

各トレンチの概要は、表1のとおりである。

表1 各トレンチの概要

トレンチ	遺物	遺構	時代	包含層までの深さ
1	有	有	中世・古墳・縄文後期	20～40cm
2	有	有	中世・古墳・縄文後期	30cm
3	有	有	中世・古代	20cm
4	有	無	中世	85cm
5	有	有	中世	70～85cm
6	有	有	中世・縄文後期	80cm
7	無	無	—	—
8	無	無	—	—
9	無	無	—	—
10	無	無	—	—
11	有	有	中世	20cm
12	有	無	中世	70～110cm
13	有	有	古墳	40cm

表1の結果のとおり、7トレンチから10トレンチを除く9か所のトレンチで、遺物包含層または遺構が確認された。7トレンチから9トレンチの範囲は、土層の堆積状況から旧河道に相当すると判断できた。事業区域内はすでに圃場整備が行われ、中世から古墳時代の包含層は地点によっては残存が悪く、包含層までの深さは極めて浅い状態であった。縄文時代については、やや深い砂層から出土している。

確認調査の結果から、芝原遺跡の範囲はC-1区からB-E-38区(第4図)であり、遺跡面積は49,600㎡である。またその時代は、縄文時代中・後期、古墳時代、古代、中世(前期・後期)であるが、地点によってその密度が異なっている。

この確認調査の結果を受け、県土木部・県文化財課・県立埋文センターの3者で協議し、現状保存や設計変更が不可能であることから、平成11年度から記録保存のための本調査を実施することとなった。

第3節 本調査

1 調査概要

本調査では、平成11年度及び平成12年度に築堤部分、平成13年度に新堤防と旧堤防の間、平成14年度に新堤防と旧堤防の間及びび万之瀬橋の橋脚部分、平成15年度に橋梁部及び橋門から新堤防の間、平成16年度に前年度の調査未了部分を調査した。

2 調査体制

事業主体	鹿児島県土木部河川課
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県立埋文センター
所長	吉永 和人 (平成11年度)
	井上 明文 (平成12～14年度)
	木原 俊孝 (平成15・16年度)
調査企画	次長兼総務課長 黒木 友幸 (平成11～13年度)
	田中 文雄 (平成14・15年度)
	賞雅 彰 (平成16年度)
調査課長	戸崎 勝洋 (平成11年度)
	新東 晃一 (平成12～16年度)
	調査課長補佐兼

第一調査係長	新東 晃一 (平成11年度)
調査課長補佐	立神 次郎 (平成12～16年度)
主任文化財主事兼	
第一調査係長	青崎 和憲 (平成12・13年度)
	池畑 耕一 (平成14・15年度)
主任文化財主事兼	
第二調査係長	彌宗 久志 (平成16年度)
主任文化財主事	中村 耕治 (平成11～15年度)
	長野 眞一 (平成16年度)
調査担当 文化財主事	安藤 浩 (平成11年度)
	西郷 吉郎 (平成11年度)
	栗林 文夫 (平成11～13年度)
	日高 正人 (平成13～15年度)
	中村 和美 (平成14・15年度)
	最上 優子 (平成14・15年度)
	湯之前 尚 (平成15年度)
	元田 順子 (平成15年度)
	富山 孝一 (平成15・16年度)
	抜水 茂樹 (平成16年度)
	黒川 忠広 (平成16年度)
文化財研究員	福永 修一 (平成12年度)
	上床 真 (平成16年度)
文化財調査員	橋口 亘 (平成12～14年度)
	松田 朝由 (平成14年度)
事務担当 総務係長	有村 賢 (平成11・12年度)

事務担当 総務係長	前田 昭伸 (平成13・14年度)
	平野 浩二 (平成15・16年度)
	主 事 溜池 佳子 (平成11年度)
	主 査 今村孝一郎 (平成13年度)
	主 査 脇田 清幸 (平成14年度)
主 事	池 珠美 (平成15年度)
	調査指導 鹿児島大学歯学部
助 手	竹中 正巳 (平成12～14年度)
助 手	鹿児島大学埋蔵文化財調査室 中村 直子 (平成12年度)
	鎌倉考古学研究所 所 員 馬淵 和雄 (平成13年度)
助 教 授	鹿児島県立短期大学生活科学科 揚村 固 (平成13年度)
	鹿児島大学教育学部 日隈 正守 (平成13年度)
株式会社九州 テクノリサーチ	大澤 正己 (平成14年度)
	広島大学文学部 教 授 河瀬 正利 (平成15年度)
西南学院大学 教 授	高倉 洋彰 (平成15年度)

3 調査経過

調査の具体的経過については、調査日誌をもとに主な出来事を月単位で記述していきたい。

◇ 平成11年度

平成11年10月15日～

平成12年3月22日 実働83日

(10月)

器材搬入。A～E-7～11区のⅢ層掘り下げ。中世の溝検出 (B-C-8～10)。

(11月)

A・B-3～10区、C-E-4～6区のⅢ層掘り下げ。

土坑、溝状遺構、竪穴建物検出。C-4区から白磁碗出土。D-4焼土内から青磁礎花皿の完形品出土。

(12月)

C・D-1～3区Ⅲ層掘り下げ。A'-C-16～22Ⅲ層上面検出。A'-A-20区で掘立柱建物跡検出。A-18区で土坑墓検出。B・C-18区で鍛冶遺構検出。A'-A-21・22区Ⅲ層掘り下げ。

(1月)

A～C-11～16区Ⅲ層上面検出。A～C-11～13区、B・C-14・15区、A～C-16～18区Ⅲ層掘り下げ。B・C-13～15区で鳥検出。空中写真撮影 (27日)。

(2月)

A～C-17・18区、A'-C-19～22区Ⅲ層掘り下げ。B・C-11・12区、A～C-13～17区Ⅳ層掘り下げ。D-15区で竪跡検出。B・C-13・14区Ⅴ層で鳥検出。東側調査区埋め戻し (7日)。竹中正巳氏 (鹿大歯学部助手) による土坑内人骨の鑑定 (15日)。

(3月)

A～C-14～16区、A-17・18区Ⅲ層掘り下げ。A～C-17～19区Ⅵ層掘り下げ。縄文後期、晩期の土器多数出土。調査終了 (17日)

◇ 平成12年度

平成12年4月24日～

平成13年1月25日 実働107日

(4月)

器材搬入・オリエンテーション実施 (24日) 表土の剥ぎ取り、Ⅲ層面検出。

(5月)

A～C-24～29区のⅢ層上面検出。溝状遺構、ピット、畝状遺構検出。A・B-20～24区のⅢ層上面検出。近世土坑墓2基検出 (古銭有り)。A'-C-11～22区Ⅶ層検出。かまど遺構切り取り保存。

(6月)

A'-C-19～22区Ⅳ層掘り下げ。A・B-22～26区Ⅲ層上面でピット、土坑、溝跡、掘立柱建物跡検出。A'-C-21～29区の空中写真撮影。A'-B-27～29区Ⅲ層掘り下げ。A・B-11～17区Ⅳ層掘り下げ。A'-B-15・16区のⅣ層上面で遺構検出。

(7月)

A'-C-20～29区Ⅲ層掘り下げ及びⅣ層上面で遺構検出。A'-29区で竪穴建物検出。A'-C-11～21区のⅤ層掘り下げ。B-19区竪穴建物検出。

(8月)

B-21～24区、C-22～25区のⅣ層の遺構掘り下げ。C-24～25区で土坑墓3基 (人骨3体) 検出。B-17～19区Ⅵ層掘り下げ。A～C-20～23区のⅥ層掘り下げ。A'-B-26～29区Ⅳ層の遺構掘り下げ。A・B-

20~24区Ⅵ層検出。

(9月)

A・C-22~29区Ⅵ層掘り下げ。A-25区で集石検出。A-26区から指宿式土器出土。A'・A-17~19区Ⅱ層掘り下げ。遺構検出、Ⅵ層上面検出、掘り下げ。A-C-21~23区Ⅷ層掘り下げ。

(10月)

A・B-26~28区Ⅵ層掘り下げ。A'・B-23~30区Ⅷ層掘り下げ。A-C-21~23区Ⅷ層掘り下げ。

(11月)

A'・B-30・31区の表土剥ぎ、Ⅲ層掘り下げ。ピット、井戸跡、土坑、溝跡、掘立柱建物跡検出。

(12月)

A'・B-30・31区Ⅲ層検出のピット、土坑、竪穴建物の掘り下げ。Ⅳ層検出。Ⅳ・Ⅴ層重機で剥ぎ取り。

(1月)

A'・B-30・31区Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ。遺物取上げ。調査終了(25日)

◇ 平成13年度

平成13年5月7日~

平成14年3月19日 実働174日

(5月)

器材搬入・オリエンテーション実施(7日)。E・F-9・10区表土の剥ぎ取り。E-H-2~5区のⅡ・Ⅲ層掘り下げ。畠検出。E-G-2~5区Ⅳ層上面検出。ピット、木棺墓、大溝検出。E-G-7~12区掘り下げ。大溝内人骨出土。土坑墓検出(F・G-8区)。E-G-5~12区のⅡ層・攪乱層掘り下げ。D-F-11~14区の攪乱層、溝の掘り下げ。畠検出。

(6月)

D-G-12区の大溝内から青磁碗・皿の完形品出土。E-13区の土坑墓から古銭、人骨出土。D-G-6~12区Ⅱ層上面検出の遺構掘り下げ。ピット、芋穴、土坑、掘立柱建物、大溝検出。E-7区の土坑墓から人骨出土。E・F-7・8区Ⅳ層掘り下げ。D・E-13区大溝検出。E・F-16・17区Ⅱ層で畠検出。

(7月)

E・F-9・10区、D-F-11・12区、D・E-13区、D-F-14区Ⅵ層掘り下げ。D-F-15~23区Ⅱ層掘り下げ。畠、土坑、かまど跡検出。

(8月)

D-G-15~22区Ⅱ層掘り下げ。E・F-8区で炭化物、鉄滓の入った遺構検出。E・F-17・18区で土器・石器の集積検出。D・E-14区のⅥ層掘り下げ。

(9月)

D-F-18~28区Ⅱ層掘り下げ。E・F-15~17区Ⅱ層掘り下げ。畠跡多数検出。D-18区から多口瓶出

土。

(10月)

D-F-25~31区のⅡ層掘り下げ。D・E-20~26区Ⅲ層検出。C-F-14~17区Ⅵ層掘り下げ。D-24区で焼土建物跡検出。

(11月)

C-E-23~31区Ⅲ層掘り下げ。D-F-19~23区Ⅳ層検出の遺構掘り下げ。

(12月)

B・C-25~29区Ⅳ層掘り下げ。B・C-30・31区Ⅲ層掘り下げ。C-D-18~21区表土剥ぎ、Ⅱ層掘り下げ。B・C-30・31区で中世土坑墓検出。E-27区で建物に伴う4面底部検出。

(1月)

B-E-26~31区Ⅲ層掘り下げ。2×3間の掘立柱建物検出。C・D-20~25区Ⅱ層掘り下げ。C-E-24・25区Ⅳ層上面検出。B・C-17区のⅣ層上面で、かまど跡、古道、ピット検出。空中写真撮影(29日)。

(2月)

B-E-24~31区Ⅳ層掘り下げ。かまど跡、ピット検出。遺構の写真撮影。

(3月)

C-E-24~28区Ⅳ層掘り下げ。集石、かまど跡等の遺構実測。調査終了(19日)。

◇ 平成14年度

平成14年5月7日~

平成15年3月20日 実働157日

(5月)

器材搬入・オリエンテーション実施(7日)。C-E-18~25区Ⅵ層掘り下げ。集石検出。D-F-14・15区Ⅵ層上面検出。

(6月)

E-22~26区、D-24・25区、C-25区Ⅵ層掘り下げ。B・C-15・16区Ⅲ層掘り下げ。C・D-25区から指宿式土器多数出土。D-25区からサメの歯出土。田堤防下の試掘実施(14日)。

(7月)

D・E-19~24区Ⅳ層掘り下げ。C-18~23区、D-19~22区Ⅷ層掘り下げ。C-15~17区のⅡ・Ⅲ層掘り下げ。D-19区から春日式土器が部分的に集中して出土。C-16区から「開元通宝」出土。橋脚部表土剥ぎ(11日~23日)。

(8月)

橋脚部掘り下げ。C・D-20・24・25区Ⅷ層掘り下げ。D-G-30~32区で近世畠検出。D-32・33区で製鉄遺構検出。D-34区から成川式土器、須恵器、染付出土。C-36・37区で成川式土器出土。

(9月)

C・D-36・37区Ⅲ層掘り下げ。C-F-30-32区Ⅲb層掘り下げ。D-E-32・33区Ⅲ層掘り下げ。E-31区でかまと跡検出。E-32区で竅穴住居検出。

(10月)

D-F-30区、C・D-32-34区、C・D-26・37区Ⅲb層掘り下げ。E-F-30-32区、C・D-33・34区、C・D-26・37区Ⅳ層掘り下げ。E-31区の土坑墓から人骨検出。C-33区の方型竅穴建物跡から銅製鏡検出。D-37区から黒髪式土器出土。

(11月)

C・D-32・36・37区Ⅳ層掘り下げ。C-D-33・34区Ⅴ層掘り下げ。F-H-23-29区表土掘り下げ。C・D-33・34区から市来式土器出土。遺構実測、写真撮影多数。

(12月)

E-G-26-29区Ⅲ層掘り下げ。品検出。C-F-32区Ⅴ層掘り下げ。E・F-30・31、C・D-33・34、36-38区Ⅴ層掘り下げ。

(1月)

F・G-25-27区Ⅰb層掘り下げ。溝遺構検出。E-G-18-24区Ⅱ層掘り下げ。遺構検出。B・C-32・33、D-31・32、E・F-30-33区Ⅵb層掘り下げ。C・D-35・36区Ⅳ層掘り下げ。崎崎式土器出土。

(2月)

E・F-32区Ⅵb層掘り下げ。市来式土器多数出土。D・F-30・31区内から指宿式土器、春日式土器多数出土。E・F-30-32、B-D-32・33区Ⅶb層掘り下げ。集石、ビット、土坑検出。D-F-20-24区Ⅳ層掘り下げ。F-G-17-21区Ⅳ層掘り下げ。空中写真撮影(21日)。

(3月)

E-30・31区Ⅳ層掘り下げ。指宿式土器多数出土。E・F-24・25区Ⅱ層掘り下げ。E-24区でかまと跡、焼土集中検出。D-F-19-24区Ⅳ層掘り下げ。調査終了(20日)。

◇ 平成15年度

平成15年5月6日～

平成16年3月22日 実働153日

(5月)

器材搬入・オリエンテーション実施(6日)。F・G-15-20区Ⅳ層掘り下げ。F-H-13・14区Ⅲ層掘り下げ。E・F-23-29区Ⅳ層掘り下げ。成川式土器出土。土坑検出。F-28・29区で集石検出。E・F-26-29区Ⅵ層掘り下げ。E-30区で集石検出。E・F-19-23区の縄文時代後期包含層より、生木、ドングリ等の木の実多数出土。

(6月)

F・G-14-18区Ⅱ層掘り下げ。G-16・17区で焼土、炭化物検出。E・F-19-23、26-29、D・E-29・30区Ⅵ層掘り下げ。E・F-26-29区で集石9基、土坑、配石遺構1基検出。A・B-36・37区Ⅱ層掘り下げ。

(7月)

E・F-24-26区、D-F-26-30区、D-35、37区Ⅵ層掘り下げ。E・F-27区から磨消縄文土器出土。E-29区、D・E-30区で竅穴住居検出。A-C-35-37区Ⅱ層掘り下げ。D-36区Ⅳ層掘り下げ。

(8月)

作業員一部上水道遺跡へ(7日)。E-27-30区Ⅵ層掘り下げ。A-D-32-37区Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ。D-34-36区Ⅲ層掘り下げ。製鉄炉検出。D-37区Ⅳ層掘り下げ。成川式土器溜り検出。空中写真撮影(6日)。

(9月)

A-C-32-35区Ⅲb層掘り下げ。B-33・34区で溝状遺構、須恵器、土師器溜り検出。B-34・35区で溝状遺構検出。A-C-36・37区Ⅲb層掘り下げ。C・D-37区Ⅳ層掘り下げ。D-37区から成川式土器溜り検出。

(10月)

A-C-31-37区Ⅲb層掘り下げ。ビット、土坑検出。A・B-36・37区から銅鏡出土。C-35区から市来式土器、磨製石斧出土。

(11月)

B・C-31-35区Ⅲb層掘り下げ。B-33・34区古墳時代竅穴住居跡周辺から青銅製の小形微製鏡出土。B-31区から入佐式土器出土。B・C-31-35区Ⅳ層掘り下げ。ビット、土坑検出。B-31区から市来式土器出土。F-34区の河川堆積層から「寛永通宝」出土。D-F-35-37区Ⅳ層掘り下げ。E-35区で焼土遺構検出。

(12月)

C-E-36-38区Ⅳ層掘り下げ。B-C-31-33、A-C-34・35区Ⅵ層掘り下げ。ビット検出。A・B-35区から市来式土器多数出土。

(1月)

B・C-31-35区Ⅵa・Ⅵb層掘り下げ。ビット検出。遺構掘り下げ、実測、写真撮影等を行う。Ⅵ層遺物多量に出土のため2mグリッドにて一括取り上げ(9日～)。

(2月)

B・C-31-35区Ⅵb、Ⅶ層掘り下げ。阿高式土器、春日式土器出土。B・C-35区から鋸歯状尖頭器出土。D-35区の溝状遺構から染付、滑石製品、龍泉窯系青磁出土。

(3月)

B-D-31-35区のⅦ-X層掘り下げ。ビット等の

検出。B-34区で集石2基検出。A-C-36・37区VI層掘り下げ。調査終了(22日)。

◇ 平成16年度

平成16年5月14日～

平成16年7月21日 実働37日

(5月)

器材搬入・オリエンテーション実施(14日)。A-C-36・37区VI～VIII層の掘り下げ。B-36区から完形の縄文土器3点出土。赤色顔料付着の南福寺式土器(鉢形)出土。軽石製加工品出土。

(6月)

A-C-36・37区VI～VIII層の掘り下げ。B-36区から足形土製品出土。

(7月)

A-C-36・37区VI～VIII層の掘り下げ。B・C-36・37区で集石2基検出。北側土層断面清掃、写真撮影(5日)。調査終了(21日)。

第4節 整理・報告書作成

1 作成概要

県土木部・県文化財課・県立埋文センターの3者で報告書作成作業の進め方について協議した結果、中小河川改修事業(万之瀬川)の整理・報告書作成業務を平成25年度までとし、次のように計画した。

平成17年度 整理作業

芝原遺跡・上水流遺跡

平成18年度 整理作業

持林松遺跡・芝原遺跡

報告書刊行

上水流遺跡1

「縄文時代後期から弥生時代編」

平成19年度 整理作業

芝原遺跡

報告書刊行

上水流遺跡2

「古墳時代から近世編」

平成20年度 整理作業

渡畑遺跡・芝原遺跡

報告書刊行

上水流遺跡3

「縄文時代前期・中近世遺物編」

平成21年度 報告書刊行

上水流遺跡4

「縄文時代前期末から中期前半編」

渡畑遺跡1

「縄文時代編」

芝原遺跡1

「縄文時代遺構編」

平成22年度 報告書刊行

渡畑遺跡2

「弥生時代から中近世編」

芝原遺跡2

「縄文時代遺物・土器編」

平成23年度 報告書刊行

芝原遺跡3

「縄文時代遺物・石器編」

芝原遺跡4

「弥生・古墳時代遺構編」

平成24年度 報告書刊行

芝原遺跡5

「弥生・古墳時代遺物編」

平成25年度 報告書刊行

芝原遺跡6

「古代から近世編」

上記の計画に従い、平成21年度まで整理作業・報告書の刊行を進めてきたが、平成21年10月13日に3者で再度協議した結果、報告書の内容と刊行予定を見直し、中小河川改修事業(万之瀬川)の整理・報告書作成業務を平成24年度までとした。

また、古墳時代に関しては遺物量が膨大なため、「古代から近世編」と並行して2年計画で整理作業を進めていくこととし、刊行順を入れ替えた。よって、平成22年度以降の計画を次のように変更した。

平成22年度 報告書刊行

渡畑遺跡2

「弥生時代から中近世編」

芝原遺跡2

「縄文時代遺物編」

平成23年度 報告書刊行

芝原遺跡3

「古代から近世編」

整理作業

弥生・古墳時代の遺構・遺物

平成24年度 報告書刊行

芝原遺跡4

「弥生・古墳時代編」

2 作成体制

(平成17年度)

事業主体 鹿児島県土木部河川課

作成主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

作成統括 鹿児島県立埋文センター

所 長 上今 常雄

作成企画 次長兼総務課長 有川 昭人 黒川 忠広
 次長兼調査第一課長 新東 晃一 文化財研究員 上床 真
 主任文化財主事兼 事務担当 総務係長 寄井田正秀
 調査第一課第二調査係長 長野 眞一

作成担当 文化財主事 東郷 克利
 富山 孝一
 廣 栄次

事務担当 主幹兼総務係長 平野 浩二

(平成18年度)

事業主体 鹿児島県土木部河川課
 作成主体 鹿児島県教育委員会
 企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
 作成統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 所 長 上今 常雄

(平成18年7月まで)

宮原 景信
 (平成18年8月から)

作成企画 次長兼総務課長 有川 昭人
 次 長 新東 晃一
 調査第一課長 池畑 耕一
 主任文化財主事兼 中村 耕治
 調査第一課第二調査係長

作成担当 文化財主事 東郷 克利
 富山 孝一
 廣 栄次
 主任文化財主事 繁昌 正幸
 文化財主事 抜水 茂樹
 黒川 忠広

文化財研究員 上床 真
 事務担当 総務係長 寄井田正秀

(平成19年度)

事業主体 鹿児島県土木部河川課
 作成主体 鹿児島県教育委員会
 企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
 作成統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 所 長 宮原 景信

作成企画 次長兼総務課長 平山 章
 次 長 新東 晃一
 調査第一課長 池畑 耕一
 主任文化財主事兼 中村 耕治
 調査第一課第二調査係長

作成担当 文化財主事 東郷 克利
 文化財主事 溝口 学
 富山 孝一
 抜水 茂樹
 森 雄二

(平成20年度)

事業主体 鹿児島県土木部河川課
 作成主体 鹿児島県教育委員会
 企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
 作成統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 所 長 宮原 景信

作成企画 次長兼総務課長 平山 章
 次 長 池畑 耕一
 調査第一課長 青崎 和憲
 主任文化財主事兼 井ノ上 秀文
 調査第一課第二調査係長

作成担当 文化財主事 溝口 学
 佐藤 義明
 木之下 悦朗
 黒川 忠広
 文化財研究員 上床 真

事務担当 総務係長 紙屋 伸一

(平成21年度)

事業主体 鹿児島県土木部河川課
 作成主体 鹿児島県教育委員会
 企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
 作成統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 所 長 山下 吉美

作成企画 次長兼総務課長 齊藤 守重
 次 長 青崎 和憲
 調査第一課長 中村 耕治
 主任文化財主事兼 宮田 栄二
 調査第一課第二調査係長

作成担当 文化財主事 溝口 学
 小林 晋也
 日高 勝博
 文化財研究員 上床 真

事務担当 総務係長 紙屋 伸一
 主 査 高崎 智博

(平成22年度)

事業主体 鹿児島県土木部河川課
 作成主体 鹿児島県教育委員会
 企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
 作成統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 所 長 山下 吉美

作成企画 次長兼総務課長 田中 明成
 次 長 中村 耕治

調査第一課長 長野 眞一
 調査第一課第二調査係長 八木澤 一郎
 作成担当 文化財主事 溝口 学
 小林 晋也
 池畑 耕一
 文化財研究員 平屋 大介
 事務担当 専門員 鳥越 寛晴
 調査指導 早稲田大学理工学術院
 准教授 山本 信夫
 鹿児島女子短期大学
 教授 竹中 正巳

(平成23年度)

事業主体 鹿児島県土木部河川課
 作成主体 鹿児島県教育委員会
 企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
 作成統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 所 長 寺田 仁志
 作成企画 次長兼総務課長 田中 明成
 次 長 井ノ上 秀文
 調査第一課長 堂込 秀人
 調査第一課第二調査係長 大久保 浩二
 作成担当 文化財主事 岡 明恵
 長崎 慎太郎
 有馬 孝一
 文化財研究員 平屋 大介

事務担当 主 事 岡村 信吾
 調査指導 早稲田大学理工学術院
 准教授 山本 信夫
 鹿児島女子短期大学
 教授 竹中 正巳

3 作成経過

芝原遺跡の発掘調査報告書作成に伴う整理作業は、平成17年度より実施した。作業は、県立埋蔵文化センターにおいて、他の万之瀬川流域の遺跡群の整理作業と同時進行で行った。芝原遺跡は縄文時代から近世までの複合遺跡であることから、時代ごとに報告書の刊行計画を立て、出土遺物の洗浄・注記後、時代及び遺構ごとに土器・石器の分類を行った。遺構は、調査担当者の記述・意見を基に、実測図・写真等から、その堀土・形状・大きさ等を再検討し、遺構の認定を行った。膨大な遺物や遺構を効率的に処理するために、ジェットマーカーやパソコン・土器実測補助器の活用や、土器・石器の外部への実測委託も行った。

本遺跡出土の土師器・須恵器・陶磁器については、早稲田大学理工学術院准教授山本信夫氏に、中世土坑墓から出土した人骨の鑑定については、鹿児島女子短期大学教授竹中正巳氏に指導をいただいた。また、製鉄関連の遺構・遺物については、九州テクノリサーチの大澤正巳氏に金属学的調査を依頼した。



説明会の様子

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

芝原遺跡は、鹿児島県南さつま市金峰町大字宮崎に所在し、万之瀬川下流の右岸、標高約4mの自然堤防上に立地する。

南さつま市金峰町の地形は大きく山地・シラス台地・沖積平野・砂丘に分けられる。山地は町の東半分を占め、標高200mを超える山系が南北に縦断する形で連なっており、金峰山や中岳などがある。シラス台地は、錦江湾奥部の始良カルデラ噴出起源の入戸火砕流（シラス）が堆積したものである。

万之瀬川は、鹿児島市錦山に源を発し、南さつま市加世田万世に至る延長36km、流域面積37km²の二級河川である。河口周辺には砂丘が広く形成されており、下流域には沖積平野が広がっている。また、中流域には万之瀬川の蛇行によって浸食されたシラス台地がみられ、こうした砂丘地とシラス台地には、縄文時代から弥生時代にかけて良好な遺跡が存在している。

遺跡周辺では万之瀬川が大きく蛇行しており、かつ、加世田川や長谷川などの支流の合流点も近くにあり、周辺の沖積平野は、過去梅雨や台風の際になるとたびたび水害に遭っている。特に享和3年(1803)の大洪水では河口が移動して現在の流れとなったが、それ以前は南側に蛇行して流れ、現在より約3km南の地点で東シナ海に注いでいたことがわかっている。また、明治35年(1902)測量の第1図と現在の航空写真(写真2)を比較すると、本遺跡東側の村原付近で河川改修(昭和初期)が行われ、低地において蛇行する部分を直線化したことがわかる。

本遺跡から東を望むと、標高約200m前後の山々が南北を縦断している。このなかでも約7km北東方向にある金峰山は、旧町名(金峰町)の由来ともなった標高636mの薩摩半島中央部における最高峰で、古来より信仰の対象となっている。また、海上航行の際には、薩摩半島南西端にある野間岳と共に、ランドマークの役割を果たしていた。

第2節 歴史的環境

南さつま市では、旧石器時代から歴史時代に至るまでの遺跡が数多く発見されている。これらの中には、学史上極めて重要な遺跡も含まれており、当地域が考古学研究の良好なフィールドであることを改めて示唆している。ここでは、旧石器時代から近世に至るまでを概観していきたい。

旧石器時代では、金峰町小中原遺跡⁽¹²⁾・加世田祝原遺跡からナイフ形石器が、金峰町山原遺跡⁽¹³⁾・加世田平田尻遺跡から細石器が発見されている。平田尻遺跡では雑群も発見されている。

縄文時代草創期の遺跡としては、加世田に椛ノ原遺跡⁽¹⁴⁾がある。ここでは、連穴土坑・集石等の遺構が発見され、隆帯文土器・磨製石斧などの遺物が出土している。特に、出土した丸ノミ状の磨製石斧は椛ノ原型と称されるほど特徴的である。平成9年(1997)には国史跡に指定された。また、加世田内山田にある志風頭遺跡では、連穴土坑から完形の隆帯文土器が出土している。この土器の放射性年代測定の結果、11,860±50年BPとされている。また、金峰町中尾遺跡からも同時期の遺物・遺構が確認されている。

縄文時代早期の遺跡には、草創期でも紹介した椛ノ原遺跡が著名である。昭和52年(1977)の発掘調査で出土した土器の中で6類として分類された資料は、早期前葉の土器型式設定を検討する上で重要な資料となった。金峰町小中原遺跡⁽¹⁵⁾では、前平式土器の円筒形・角筒形土器がまとまって出土している。特に、角筒形土器は、上半分は角筒形を、下半分は円筒形を呈しているものもあり、角筒形の発生を考える上で重要な資料となっている。

縄文時代前期の遺跡には、金峰町阿多貝塚⁽¹⁶⁾・上焼田遺跡⁽¹⁷⁾・上水流遺跡⁽¹⁸⁾がある。阿多貝塚から出土した資料の一部は、「阿多V類土器」(西河津式土器)と称され、縄文時代前期土器研究に欠かすことのできない資料である。上焼田遺跡では、珠状耳飾が出土している。周辺からは、竊土器が出土しているが、報告書では、竊土器ではなく曾畑式土器ないし春日式土器に伴うものとしてまとめている。上水流遺跡からは曾畑式土器が単独に出土しており、石器組成も含めて良好な資料となっている。また、中期末から後期初頭とされる深浦式土器も大量に出土している。

縄文時代中期の遺跡としては、上水流遺跡⁽¹⁹⁾から大型の集石と大量の春日式土器が出土しており、河川沿いの低地における遺跡の在り方が注目される。石堂遺跡や上焼田遺跡では並木式土器・阿高式土器が出土している。

縄文時代後期の遺跡には、本遺跡の他に先述の上水流遺跡⁽²⁰⁾がある。上水流遺跡からは後期前半の指宿式土器や松山式土器が出土している。指宿式土器の底部圧痕からは、従来大隅半島に分布すると考えられていた「スグレ状圧痕」が確認されている。また、本遺跡と隣接する渡畑遺跡⁽²¹⁾からは本遺跡出土の足形土製品と接合する資料が確認されている。

縄文時代晩期の遺跡としては、上加世田式土器の標識遺跡である上加世田遺跡⁽²²⁾がある。この遺跡からは、大型土坑等の遺構が検出されている。また、土器や石器の他に、土偶や軽石製石偶・石棒などの祭祀をうかがわせる資料や勾玉・管玉・小玉などの垂飾品など様々な遺物が出土している。なお、この上加世田式土器は、近年の広

域編年研究により縄文時代後期に位置づける説もある。また、金峰町下原遺跡では、縄文時代晩期終末から弥生時代早期の刻目突帯文土器に伴って朝鮮半島系無文土器・初痕土器・石包丁等が出土している。

弥生時代から古墳時代にかけて、市内では数多くの遺跡が発見されている。金峰町高橋貝塚は、弥生時代前期を主体とする貝塚で、万之瀬川の支流堀川の右岸、標高11mの洪積堆砂丘上にある。昭和37・38年(1962-1963)に河口貞徳氏によって発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代晩期の夜臼式土器と高橋I式土器の共存関係が確認されたことや、南海産の貝を素材とした貝輪や南海産貝が出土したことなど、学史的に重要な遺跡である。平成18年(2006)には、鹿児島国際大学が、隣接する高橋遺跡の発掘調査を実施し、弥生時代に属する遺構を確認した。また、金峰町下小路遺跡は、弥生時代中期の須玖式土器を用いた妻棺が検出された埋葬遺跡で、棺内の人骨にはゴホウラ製の貝輪が着装されていた。金峰町松木園遺跡では弥生時代後期の環漆の可能性のある大溝が松木園式土器を伴って発見されている。金峰町中津野遺跡では、床面が3段構造になる竪穴住居跡が発見され、最下段である3段目からは完形品が40個出土しているという。また、ここは中津野式土器の標識遺跡でもある。この中津野式土器は、弥生時代終末の土器とする考えの他に、一部は古墳時代に入る土器があるという説があり、明確には位置付けがなされていない。現状としては、弥生時代終末から古墳時代初期の土器として認識されている。

古墳時代の遺跡には、加世田小溝にある奥山古墳(六堂会古墳)が特筆される。この遺跡は、昭和6年(1931)に発見され、石棺の内部には赤色顔料が塗られており、ガラス玉や長さ180cmの鉄剣、刀子が副葬されていた。平成17年(2005)に実施された鹿児島大学の再調査の結果、周溝の一部と考えられる遺構が発見され、4世紀代の古墳である可能性が高いことが示された。金峰町白糸原遺跡では、竪穴住居跡19軒が検出され、辻堂原式土器から笹貫式土器にかけての集落であるとされる。上水流遺跡からは竪穴住居跡11軒が検出されている。遺構内から、初期須恵器の出土がみられた。また、中津野遺跡に隣接する南下遺跡では、木製品をはじめ古墳時代の良好な資料が得られている。

古代にも多くの注目される遺跡が発見されている。金峰町小中原遺跡では多くの掘立柱建物跡と「阿多」という字がへら書きされた土器などが発見されている。これらことから阿多郡衛の可能性が考えられている。金峰町山野原遺跡でも多くの掘立柱建物跡と土師器・須恵器などが発見されている。また、祭祀遺構や土師器焼成遺構の可能性が考えられる遺構が発見されており、在地豪族に関わる施設であった可能性が考えられている。加世

田遺跡⁽¹⁾では、土師器を用いた埋設遺構と竪穴住居跡とされる遺構が確認されている。本遺跡、持林松遺跡、上水流遺跡でも黒書土器をはじめ多数の古代遺物が発見されている。

荒平窟をはじめとする中岳山麓古窟跡群は金峰町にあり、9世紀から10世紀にかけて稼働していたと考えられる須恵器窯である。発掘調査は行われていないが、表面採集された遺物が熊本県荒尾市荒尾窯跡群の製品との類似性が高いことから、人的・物的な交流があったと考えられている。

中世には、ほぼ全域で島津氏が成立した薩摩国にあって、阿多郡は唯一大宰府領であった。その後13世紀前半には、金峰町が属する阿多郡は阿多氏・飯島氏などによって支配を受け、加世田が属する加世田別府は別符氏・塩田氏などによって支配を受けることとなる。城館跡・山城跡も多く所在しており、上ノ城跡・別府城跡・牟礼ヶ城跡・貝殻崎城跡などは発掘調査が行われている。加世田益山の寺園氏宅には、二重の堀があったと伝えられ、現在もその痕跡が残っている(上東2004)。中世のものであるか明らかでないが、館であった可能性も考えられる。白糸原遺跡⁽²⁾では、中世末から近世の土坑墓が2基検出された。この中からは、南海産の夜光貝が出土している。加えて、竪穴建物跡や双丸文青磁なども発見されている。

古代から中世においては、本遺跡も属する万之瀬川流域の遺跡群も近年特に注目されている。全国各地の窯で焼かれた陶器類や、中国からの輸入陶磁器類などが多量に出土した持林松遺跡や本遺跡を中心に、広範な交流の拠点であったことを示すものであり、今後さらに検討されるべき遺跡群である。

近世においては、前述の上水流遺跡の大溝から16・17世紀頃の肥前系陶磁器と初期の薩摩焼(苗代川系)等が、福建・広東及びベトナム産の甕・壺類といった貯蔵器とともに出土している。また、万之瀬川河口付近を含む吹上浜海岸では、東南アジアとの交易に関連するという指摘のある漂着遺物が確認されている(橋口1999)。

外城制度(天明4年[1784]、外城から郷に改称)に関しては、行政の中心である地頭飯屋が阿多と田布施の2か所、武士の居住区である麓集落はその周辺にあった。渡畑周辺に点在した阿多麓集落は、享保13年(1728)の新田開墾工事の完成後に台地上に移転している。新田開発のため、万之瀬川上流の南九州市川辺町腰ヶ原より16kmに及ぶ用水路を宮崎の台地に引く難工事であった。この時の工事監督は、後の木曾川宝暦治水で奉行を務めている。商人の居住区である野町は、金峰地域では阿多公民館付近と池辺の2か所にあった。また、藩の浄土真宗禁制に対し、かくれ念仏講により信仰が続けられた。



第1図 遺跡周辺の旧地形

(明治35年測量)



上空から見た芝原遺跡周辺

(国土画像情報国土交通省より)



第2図 周辺遺跡位置図

表2 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	時代					備考
			旧石器	縄文	弥生	古墳	中世	
1	上ノ山後遺跡	南さつま市金峰町高橋上ノ山後			●	●	●	
2	上ノ山遺跡	南さつま市金峰町上ノ山			●			
3	草原町遺跡	南さつま市金峰町宮崎			●			
4	高橋貝塚	南さつま市金峰町高橋			●			「九州考古学」18
5	下小路遺跡	南さつま市金峰町高橋下小路			●			
6	平田城跡	南さつま市金峰町高橋字真門砂入			●			中世城館跡 二階堂氏
7	種田遺跡	南さつま市金峰町尾下				●		
8	松木遺跡	南さつま市金峰町尾下松木園			●			「鹿児島考古」14号
9	山野原遺跡	南さつま市金峰町尾下山野原			●	●	●	金峰町埋文(5)(7)
10	鳥追原遺跡	南さつま市金峰町尾下鳥追原			●	●		
11	尾下遺跡	南さつま市金峰町尾下			●			
12	中津野下原遺跡	南さつま市金峰町中津野下原			●			「鹿児島県考古学紀要」2号
13	平畑遺跡	南さつま市金峰町中津野		●	●	●	●	金峰町埋文(8)
14	中津野遺跡	南さつま市金峰町中津野1119		●	●			
15	中津野城跡	南さつま市金峰町新山					●	別称「江田城」
16	上野原遺跡	南さつま市金峰町新山			●			
17	小中原遺跡	南さつま市金峰町新山小中原	●	●	●	●	●	金峰町埋文(5) 照理文(57)
18	野村原遺跡	南さつま市金峰町中津野						
19	阿多貝塚	南さつま市金峰町宮崎上焼田		●	●	●		「人類学史講座」第1巻 金峰町埋文発掘調査(1)
20	上焼田遺跡	南さつま市金峰町宮崎上焼田	●	●	●	●	●	金峰町埋文(15)
21	上花立遺跡	南さつま市金峰町						
22	万之瀬川床遺跡	南さつま市加世田益山万之瀬川川床			●	●		「鹿児島考古」12号
23	上川原遺跡	南さつま市金峰町宮崎上川原			●			
24	古城跡	南さつま市金峰町宮崎西					●	別称「古ノ城」
25	白糸原遺跡	南さつま市金峰町宮崎		●	●	●	●	
26	上宮寺跡	南さつま市金峰町松田南					●	坊津一乗院の末寺
27	松田南遺跡	南さつま市金峰町花園		●	●			
28	持林松遺跡	南さつま市金峰町松田南		●	●	●	●	金峰町埋文(10) 照理七報(120)
29	渡畑遺跡	南さつま市金峰町宮崎字渡畑		●	●	●	●	照理七報(151)(159)
30	芝原遺跡	南さつま市金峰町宮崎字芝原		●	●	●	●	本報告書 照理七報(149)(158)
31	市原遺跡	南さつま市金峰町宮崎		●				
32	阿多城跡	南さつま市金峰町阿多					●	阿多平四郎忠景
33	鶴之城跡	南さつま市金峰町花園鶴之城					●	
34	大迫田遺跡	南さつま市金峰町花園					●	金峰町埋文(14)
35	花園今城原遺跡	南さつま市金峰町花園今城原		●	●	●		金峰町埋文(14)
36	上水流D遺跡	南さつま市金峰町花園					●	金峰町埋文(14)
37	上水流遺跡	南さつま市金峰町花園上水流・森山		●	●	●	●	金峰町埋文(9) 照理七報 (113)(121)(136)(150)
38	上水流C遺跡	南さつま市金峰町花園		●	●	●		金峰町埋文(14)
39	花園遺跡	南さつま市金峰町花園今城原			●	●		
40	針原遺跡	南さつま市金峰町花園		●	●	●		金峰町埋文(14)
41	加治屋遺跡	南さつま市加世田川畑岩山		●	●	●		照理文(82)
42	二瀬・花茂園墓跡	南さつま市加世田川畑377能					●	南さつま市埋文(1)
43	柳ノ原遺跡	南さつま市加世田村原橋ノ原	●	●	●	●	●	加世田市埋文(10)
44	永田遺跡	南さつま市加世田川畑永田			●	●		
45	上加世田遺跡	南さつま市加世田川畑上加世田2715地		●	●	●		加世田市埋文(3)(4)(13)
46	杉本寺跡	南さつま市加世田川畑杉本寺			●			酒蔵 磁器器出土(加世田市史掲載)
47	別府城跡	南さつま市加世田武田城ノ山			●	●	●	加世田市埋文(10)
48	在方原・内田原遺跡	南さつま市加世田在方原在方原他			●	●		
49	下東原遺跡	南さつま市加世田宮原下東原176地	●	●	●			
50	田武平遺跡	南さつま市加世田益山田武平		●	●			
51	油免・本寺遺跡	南さつま市加世田宮原油免		●	●			照理七報(148)
52	西荒田遺跡	南さつま市加世田益山西荒田		●	●	●		加世田市報(7)
53	宮ノ脇・口畑遺跡	南さつま市加世田宮原ノ脇他			●			
54	陣跡	南さつま市加世田益山陣					●	
55	内ノ田遺跡	南さつま市加世田益山内ノ田	●		●	●	●	加世田市報(6)(19)
56	中小路遺跡	南さつま市加世田益山中小路・屋敷			●	●	●	
57	浜瀬遺跡	南さつま市加世田宮原浜瀬			●	●		
58	鶴ノ塚陣跡	南さつま市加世田益山宇都						
59	上山野遺跡	南さつま市加世田益山上山野			●	●		
60	川ノ原遺跡	南さつま市加世田益山川ノ原			●	●		

交通網では、薩摩半島を縦貫する近世街道の「伊作筋」と田南薩鉄道が、渡畑遺跡内で現在の国道270号線と併走していた。「伊作筋」は加世田の村原渡口で渡船し、渡畑を斜行し上宮寺前、伊作峠、谷山を経由して鹿児島と結んだ。南薩鉄道は枕崎市から日置市伊集院を経由し、国鉄線で鹿児島市と連絡していた。大正3年(1914)に始まり昭和58年(1983)の豪雨災害で翌年度線となった。

近・現代においては、第二次世界大戦時、加世田の唐仁原・高橋に、陸軍飛行戦隊知覧分遣隊の万世基地がおかれ、戦争末期に特別攻撃隊の出撃基地となった。

参考文献

田畑智子(2002)「鹿児島県万之瀬川流域の地形発達」『大分地理』15,9-14 大分大学教育福祉科学部地理学教室

上東克彦(2004)「鹿児島県薩摩半島に伝世された華南三彩-クンディと果実形水注-」『貿易陶磁研究』24号 日本貿易陶磁学会

橋口 亘(1999)「薩摩出土の清朝磁器」『貿易陶磁研究』19号 日本貿易陶磁学会

加世田市教育委員会

(1985)「上加世田遺跡1」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』(3)

(1987)「上加世田遺跡2」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』(4)

(1995)「干河原遺跡」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』(12)

(1999)「志風頭遺跡・奥名野遺跡」『加世田市埋

蔵文化財発掘調査報告書』(16)

金峰町教育委員会

(1978)「阿多貝塚」『金峰町埋蔵文化財発掘調査』(1)

(1998)「上水流遺跡-第1次調査-」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』(9)

(1998)「持鉢松遺跡 第1次調査」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』(10)

(2000)「小園遺跡」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』(11)

鹿児島県教育委員会

(1991)「小中原遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (57)

鹿児島県立埋蔵文化財センター

(2007)「上水流遺跡1」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (113)

(2008)「持鉢松遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (120)

(2008)「上水流遺跡2」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (121)

(2009)「上水流遺跡3」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (136)

(2010)「芝原遺跡1」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (149)

(2010)「上水流遺跡4」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (150)

(2010)「渡畑遺跡1」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (151)



上空から見た芝原遺跡周辺(下流側から持鉢松・渡畑・芝原の各遺跡)

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

1 発掘調査の方法

平成10年度に行われた確認調査をうけて、平成11年度から平成16年度に本調査を行った。

確認調査の結果、遺跡の範囲は、国家座標 $X = -174390$ から $X = -174490$ 、 $Y = -63900$ から $Y = -63500$ であり、調査区を国家座標をもとに10mグリッドを設定して発掘調査を実施した。

第4図に示すように、南北方向にA、A、B…としてIまで、東西方向に1、2、3、…として38までを付け、A-37区などと呼称することとした。A'E-1~31区(万之瀬川の新築堤防部分)の調査を平成11年度・12年度に行い、B-H-2~31区(新堤防と旧堤防の間)を平成13年度、C-I-3~38区(新堤防と旧堤防の間及び万之瀬川橋脚部分)を平成14年度、A-C-31~36区及びD-F-34~38区(橋梁部及び樋門から新堤防の間)を平成15年度・平成16年度に調査を行った。

発掘調査は、重機でI a層(表土・耕作土)を除去した後、遺物包含層であるI b層からX層までを人力で掘り下げた。また、場所によりII層以下に無遺物層が認められる場合も重機で除去した。最終的には重機で下層確認のためのトレンチを設定して掘り下げた。

これらの調査の結果、I b層からX層にまで、縄文時代中期から近世の数多くの遺構、遺物が発見された。

遺物の出土量は膨大であったため弥生時代以降の遺物は基本的に層とグリッドごと一括して取り上げた。また、縄文時代の遺物は、原則として平板実測及びレベル測定により現位置を記録し取り上げた。ただ、小グリッドごと一括して取り上げたものもある。

遺構は検出状況を写真で撮影し、位置を記録してから個別に実測を行った。必要に応じて実測途中と実測後の状況も写真撮影した。図化作業に関しては、作業の効率化のため業者委託を実施した。

2 遺構の検出と認定

各遺物包含層上面を検出した際、精査を行い、土色及び土質の違いから遺構の有無を確認した。また、遺構内外で異なる土の境界をたどり、平面的に遺構の輪郭(平面プラン)を確定していった。

その後、主軸を確認し、土層確認用のベルトを設定し、遺構の掘り下げを行った。その際、埋土の色・質・硬さなどの違いを比較し掘り下げた。

さらに、遺構を検出した層や埋土状況、遺構の形態、遺構内出土遺物などの情報から遺構の帰属時期の検討を行った。

3 整理作業の方法

古代から近世の遺物については、平成22・23年度に分類・選別、接合、補強・復元により、平成23年度に実測・拓本・トレース等を行った。整理作業の具体的経過については、主な作業を年度ごとに記していきたい。

◇ 平成17年度

洗浄、注記、区・層ごとの分類、レベル入力等

◇ 平成18年度

注記、区・層ごとの分類、人骨処理、鉄器等のクリーニング等

◇ 平成19年度

注記、区・層・遺構ごとの分類、人骨処理、鉄器等のクリーニング、石器実測委託等

◇ 平成20年度

縄文時代遺構内出土土器分類・選別、接合・復元・補強、実測、拓本、縄文時代遺構内出土土器仕分け・選別、実測委託・縄文時代遺構配置図作成、集石トレース、鉄器等のクリーニング等

◇ 平成21年度

土層図作成・トレース、縄文時代土坑トレース、縄文時代遺構内出土土器実測・実測委託、写真撮影、レイアウト、整理指導、原稿執筆、縄文時代包含層出土遺物接合、復元、形式分類、実測等「芝原遺跡1 縄文時代遺構編」刊行

◇ 平成22年度

縄文時代包含層出土土器選別、実測、実測委託、拓本、復元・補強、トレース、縄文時代包含層出土土器選別、実測、実測委託、トレース、レイアウト、写真撮影、整理指導、原稿執筆、弥生・古墳時代出土土器接合、古代・中世遺物分類等「芝原遺跡2 縄文時代遺物編」刊行

◇ 平成23年度

古墳時代から近世までの遺構選別・トレース、遺構内出土遺物実測・トレース、包含層出土遺物実測・トレース、写真撮影、レイアウト、整理指導、原稿執筆、古墳時代遺物分類・接合・復元・実測・トレース等「芝原遺跡3 古代・中世・近世編」刊行

報告書作成指導委員会

平成23年11月25日 井ノ上次長ほか10名

報告書作成検討委員会

平成23年11月29日 寺田所長ほか13名

第2節 層序（第3図）

芝原遺跡は万之瀬川中流の右岸にあり、標高約4mの自然堤防上に立地する遺跡である。第3図に平成15年の調査時に作成された本遺跡の基本土層を示す。

万之瀬川は過去に何度も大きな洪水を繰り返しており、その氾濫堆積層などを含んでいるので、遺跡内において必ずしも安定した層序を成している状況ではなかった。加えて各年度ごとに遺跡を分断して調査を進めざるをえなかった結果、各年度の層序の整合がとれない状況も発生した。

例えば平成12年度のB-19区Ⅷ層からは春日式土器が集中して出土しているのに対し、平成13・14年度のⅨ層としたものからは、春日式土器より新しい市来式土器が出土している。このため平成22年度に刊行した「縄文時代遺物編」では、平成12年度の春日式土器出土集中区のみ独立させ、それ以外に関しては一括して取り扱わざるをえなかった。

今回の整理作業を進める中でも、基本土層では中世前期の包含層とされているⅢa層から、近世前期の遺物が多数出土していることが確認され、基本土層の年代に疑問を呈する状況となった。

よって、今回の整理作業では基本土層にある包含層年代には依らず、遺物の年代観による時期決定を優先して作業を進めた。

ちなみにⅡb層の白色砂層については、遺跡を広く覆っていることから、河口を現在の位置に変えた享和3年（1803）の大洪水時のものと仮定すれば、その下位から近世前期の遺物が出土することに矛盾はないことも考えられる。

基本土層以外では、旧堤防部分に縄文時代後期土器を伴う泥炭層がみられた。また、その他の調査区でも河川

氾濫時の堆積層とみられる砂層が所々みられた。

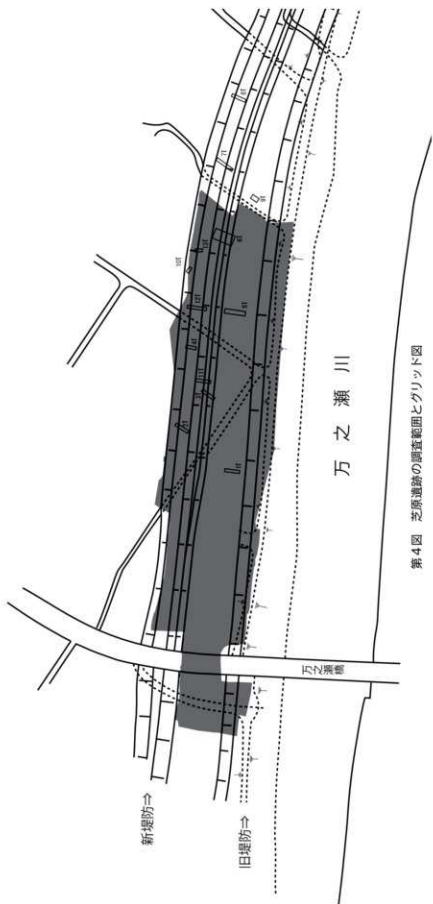
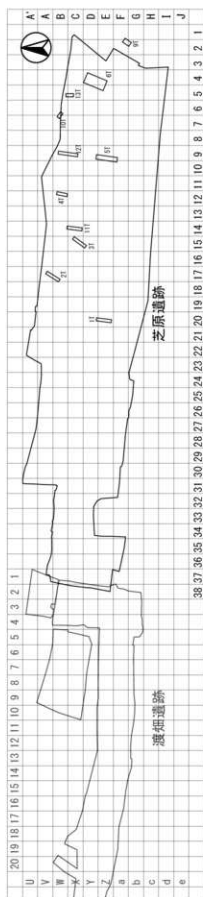
本遺跡では明確な火山灰層はみられなかったが、本遺跡上流の上水流遺跡では、縄文時代晩期包含層であるⅢb層中に、間開岳起源の「灰ゴラ」がブロック状に含まれていたと報告されている。芝原遺跡では部分的に見られたにせよ、明確なブロック状の堆積は見られなかった。

I層	灰褐色土、現表土	
I b層	灰褐色砂質土	中世～近世後期包含層
Ⅱ a層	茶褐色砂質土 炭化物・赤褐色の焼土を含む。	中世中期包含層
Ⅱ b層	白色砂層 万之瀬川の洪水層	
Ⅲ a層	黒色砂質土	中世前期包含層
Ⅲ b層	明黒褐色砂質土	古代、古墳時代包含層
Ⅳ層	黄褐色砂質土	弥生時代包含層
Ⅴ層	暗黄褐色砂質土	
Ⅵ a層	黄橙色砂質土	縄文時代後・晩期包含層
Ⅵ b層	暗茶褐色砂質土 炭化物多く含む	縄文時代後期包含層
Ⅶ層	白色砂層	部分堆積
Ⅷ層	茶褐色砂質土	縄文時代中期～後期包含層
Ⅸ a層	白色砂層	
Ⅸ b層	にぶい黄橙色砂層	
X層	にぶい黄褐色砂質土	縄文時代中期～後期包含層
X I層	黄褐色砂質土	

第3図 芝原遺跡の基本土層図（平成15年調査時）



土層堆積状況



第4図 芝原遺跡の調査範囲とグリッド図

第3節 調査の成果

1 古代の調査

(1) 調査の概要

調査は全時代を通じて、10m四方のグリッドを基本に、調査区全体にグリッドを設定して発掘調査を行った。調査区内は河川敷という立地もあり、層堆積は不安定で発掘調査時は遺構把握、出土遺物の層認定に非常に苦慮した。また、多数のピットが検出されたため、掘立柱建物跡の認定作業は困難を極め、整理作業において図上での復元も試みた。遺構の時期認定は、出土遺物を中心に記録層位、埋土を検討して認定を行った。

(2) 出土遺物の分類方法

遺物総数は約61,270点で、遺構内出土遺物の一部は番号を付けて取り上げを実施し、それ以外は原則として一括して取り上げた。包含層出土遺物一括して取り上げた遺物は、ほとんどが土師器の小破片と須恵器の小破片であった。

遺物の分類は、土師器、須恵器、土製品、石製品、鉄製品、墨書土器に分けた。さらに土師器については、碗、杯、高杯、高台付皿、甕、黒色土器、赤色土器に、須恵器については、蓋、碗、杯、皿、甕、鉢、壺に、墨書土器については、墨書、ヘラ書き、スタンプ文に分けた。器種毎の分類は、以下の通りである。

蓋の分類

つまみの形態を指標として4類に分類した。

- ・蓋Ⅰ類 頂部が高い山形になった擬宝珠状。
- ・蓋Ⅱ類 頂部が山形になった擬宝珠状。
- ・蓋Ⅲ類 扁平な擬宝珠状。
- ・蓋Ⅳ類 頂部が窪む扁平なボタン状。

碗の分類

高台の形状・高さを指標として8類に分類した。

- ・碗Ⅰ類 長くハの字状に開き太さは均一で端部が角張る。
- ・碗Ⅱ類 長くハの字状に開き太さは均一だが、端部が角張らずに丸みを帯びる。
- ・碗Ⅲ類 ハの字状に開くが端部が細くなり、断面でみると外反しているようにみえる。
- ・碗Ⅳ類 短く端部は細い。外面は外側が直で内側が傾斜する形になる。
- ・碗Ⅴ類 高台が短く先が細くなり、ハの字状にやや開き気味になる。
- ・碗Ⅵ類 高台は太く長くハの字状に開き端部は角張るかやや丸みを帯びる。
- ・碗Ⅶ類 高台は太く短く端部は細くなるが畳付の幅は広い。

・碗Ⅷ類 Ⅶ類に比べ畳付の幅が狭く端部は尖るような形になる。

体部 A-直線的、B-曲線的

口縁部 a-直口、b-外反

杯の分類

形状・大きさを指標として6類に分類した。

- ・杯Ⅰ類 大宰府出土の杯に類似し、底部外面に稜線を有する。
- ・杯Ⅱ類 箱形の器形で、底部に調整が施され、底部外面は丸い。
- ・杯Ⅲ類 逆台形の器形。
- ・杯Ⅳ類 円柱状の充実高台を有する。
- ・杯Ⅴ類 小杯
- ・杯Ⅵ類 口径が大きくなり器高が低い。

甕の分類

口縁部の器形と技法を指標にして4類に分類した。

- ・甕Ⅰ類 胴部が若干張り気味で丸をもつ。口縁部は短く外反する。
- ・甕Ⅱ類 口縁部はⅠ類と同じで、胴部が張らない。
- ・甕Ⅲ類 底部より内湾しながら立ち上がり、口縁部に至る。胴部は他と比べて浅く、鍋の形態に似る。
- ・甕Ⅳ類 胴部が大きく横に張る。

鉢の分類

器形を基準に3類に分類した。

- ・鉢Ⅰ類 器高が高く直線的に外傾するバケツ形。
- ・鉢Ⅱ類 器高が低く大きく外反する器形。
- ・鉢Ⅲ類 口縁部が内湾する「鉢鉢形」。

黒色土器の分類

黒く焼かれた面から2類に分類した。

- ・黒色土器Ⅰ類 内面のみを黒く焼かれた内黒土器。外面に赤色顔料を施されたものもある。
- ・黒色土器Ⅱ類 内外面とも黒く焼かれた黒色土器。

赤色土器の分類

赤色顔料を施された面から3類に分類した。

- ・赤色土器Ⅰ類 内面にのみ施されたもの。
- ・赤色土器Ⅱ類 内外面とも施されたもの。
- ・赤色土器Ⅲ類 外面にのみ施されたもの。

(3) 遺構

古代の遺構は、掘立柱建物跡15棟、竪穴建物状遺構1基、切跡1基、土坑7基、土坑墓3基、溝17条が検出された。ピットは多数検出され、根石などの構造物が確認できるもの以外は、掲載遺物のあるもののみ遺構配置図

で平面形を図示するに留めた。

掘立柱建物跡(第31図～第38図)

掘立柱建物跡は、15軒が検出された。そのうちC・D-25～29区に8基が集中し、残りは調査区内に点在する。2間×3間規模の建物が半数を占める。

掘立柱建物跡1号(第31図)

B・C-32区で検出された。規格が1間×2間の建物で梁行約3.6m、桁行約4mの規模をもち、床面積14.4㎡となる。柱穴は径50cm前後のものが大半を占め、桁行の中間柱がない。

掘立柱建物跡2号(第31図)

D-31・32区で検出された。規格が2間×3間の建物で梁行約4.8m、桁行約7.2mの規模をもち、床面積34.56㎡となる。柱穴は径80cmから100cmのものが多く、全体的にがっちりとした印象を受ける。

掘立柱建物跡3号(第32図)

A'・A-29区で検出された。規格が2間×3間の建物で梁行約4.7m、桁行約6.2mの規模をもち、床面積29.14㎡となる。柱穴は径40cm前後のものが大半を占める。南西隅の柱は確認できなかった。柱穴3から須臾器の坏が出土した。

出土遺物(第32図)

1は須臾器坏である。甕台形で、底部から口縁部まで直線的に開く。口縁部は尖り、底部は平坦で厚みがある。胴部立ち上がり部にナデ調整を施している。

掘立柱建物跡4号(第32図)

C-28・29区で検出された。規格が2間×2間の建物で梁行約3.4m、桁行約3mの規模をもち、床面積10.2㎡となる。柱穴は径50cm前後のものが大半を占め、東側梁行き間の柱は確認できなかった。

掘立柱建物跡5号(第33図)

C-28区で検出された。規格が1間×2間の建物で梁行約3.1m、桁行約4.2mの規模をもち、床面積14.7㎡となる。柱穴は径30cm前後である。

掘立柱建物跡6号(第33図)

D-27・28区で検出された。規格が2間×3間の建物で梁行約3.2m、桁行5.4mの規模をもち、床面積17.28㎡となる。柱穴は径30cmから50cm程度とばらつきがある。柱穴6、10の柱配置に若干ズレがみられる。

掘立柱建物跡7号(第34図)

C-27区で検出された。規模が2間×3間の建物で梁行約4m、桁行約5.4mの規模をもち、床面積21.6㎡となる。柱穴は径60cmから70cm程度のものが大半を占め、全体的にがっちりした印象を受ける。掘立柱建物跡8号・9号と切り合い関係にあるが、前後関係については明確でない。

掘立柱建物跡8号(第34図)

C-27区で検出された。規格が1間×2間の建物の北

と東側に庇が付く。建物本体の規模は、梁行約3.6m、桁行約4mで、床面積14.4㎡となる。底部は80cmほど張り出す。柱穴は径30cm前後のものが大半を占める。

掘立柱建物跡9号(第35図)

C-26・27区で検出された。規格が2間×3間の建物で梁行約4m、桁行約5.2mの規模をもち、床面積20.8㎡となる。柱穴は径40cmから50cmのものが大半を占める。西側梁行間の柱のみ径20cmと小さく、やや南側にずれている。

掘立柱建物跡10号(第35図)

D-26・27区で検出された。規格が2間×3間の建物で梁行約3.2m、桁行約5.4mの規模をもち、床面積17.28㎡となる。柱穴10が若干東にずれ、柱穴3が若干北にずれる。柱穴は30cm程度から90cmほどのものと、ばらつきがある。

掘立柱建物跡11号(第36図)

D-25・26区で検出された。規格が2間×3間の建物で梁行約3.6m、桁行約5mの規模をもち、床面積15㎡となる。柱穴は径50cm前後のものが大半を占める。溝7に柱穴を切られており、建物が溝7以前のものであることが明らかである。

掘立柱建物跡12号(第36図)

A-24区で検出された。規格が1間×2間の建物で梁行2.8m、桁行約3mの規模をもち、床面積8.4㎡となる。柱穴は径30cm前後である。

掘立柱建物跡13号(第37図)

D・E-22・23区で検出された。規格が2間×3間の建物で梁行4m、桁行7.2mの規模をもち、床面積28.8㎡となる。柱穴は径30cmから40cmのものが大半を占める。柱穴3と柱穴5の間に柱があり半間の柱間をつくる。

掘立柱建物跡14号(第37図)

E-20・21区で検出された。規格が2間×2間と思われるが東側と南側の中間の柱は確認できなかった。梁行約3.7m、桁行約4mの規模をもち、床面積14.8㎡となる。柱穴は径30cm程度である。

掘立柱建物跡15号(第38図)

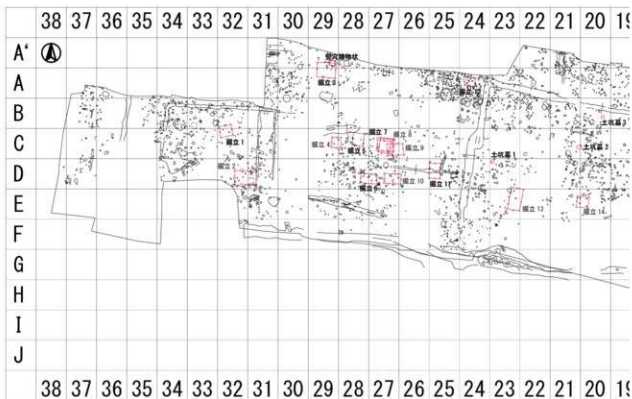
G-6・7区で検出された。規格が1間×2間の建物で梁行4m、桁行4mの規模をもち、床面積16㎡となる。柱穴は径約35cm前後である。梁行の柱間が広いが、中間の柱穴を検出できなかった可能性もある。

竪穴建物状遺構(第38図)

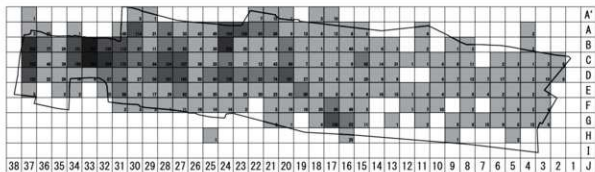
竪穴建物状遺構は、A'-29区で1基検出された。形状は1辺が約1.8mの方形を呈する。検出面からの深さ約30cmで底面中央部が凹む。底面が平坦でないこと、規模が小さいことから建物とは断定できなかった。

出土遺物(第38図)

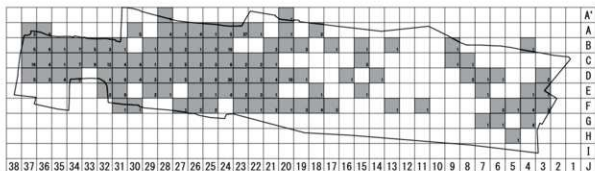
2は完形品の土師器坏Ⅲ類で、硬質に焼き締められ内外面とも赤橙色を呈する。内外面ともに横ナデ調整。底



第5図 古代全体遺構図 1

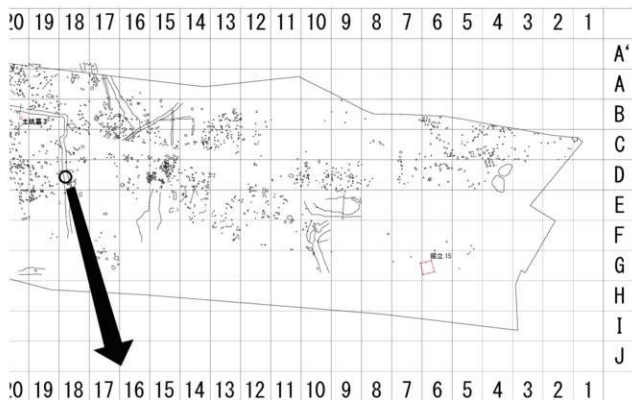


土師器（口縁部）出土状況

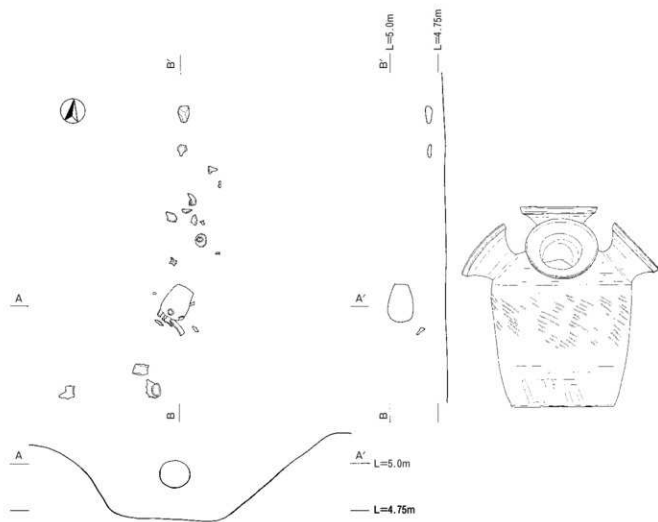


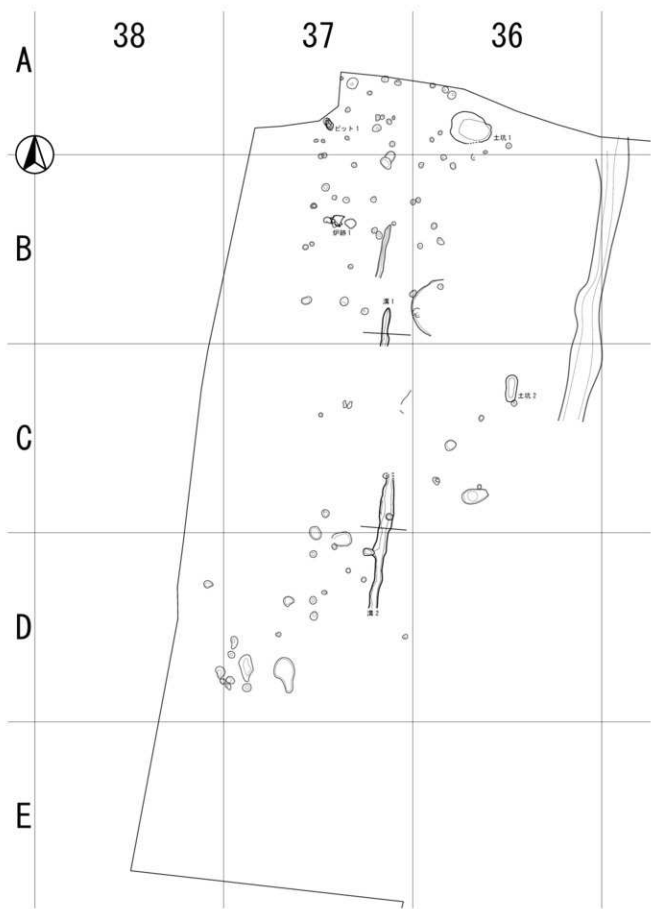
須恵器（口縁部）出土状況





第6圖 古代全体遺構圖2





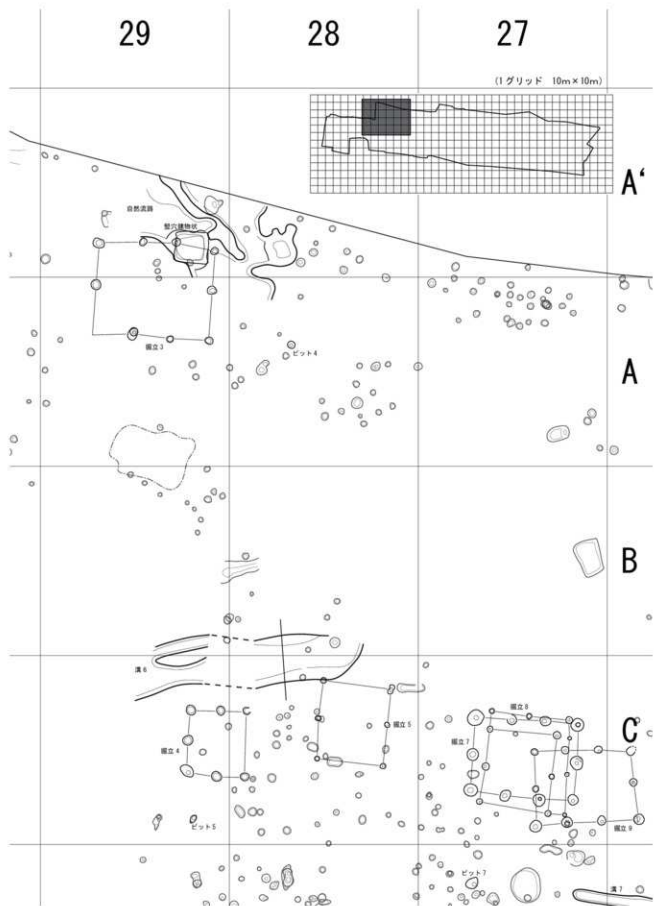
第7图 古代遺構配置図1



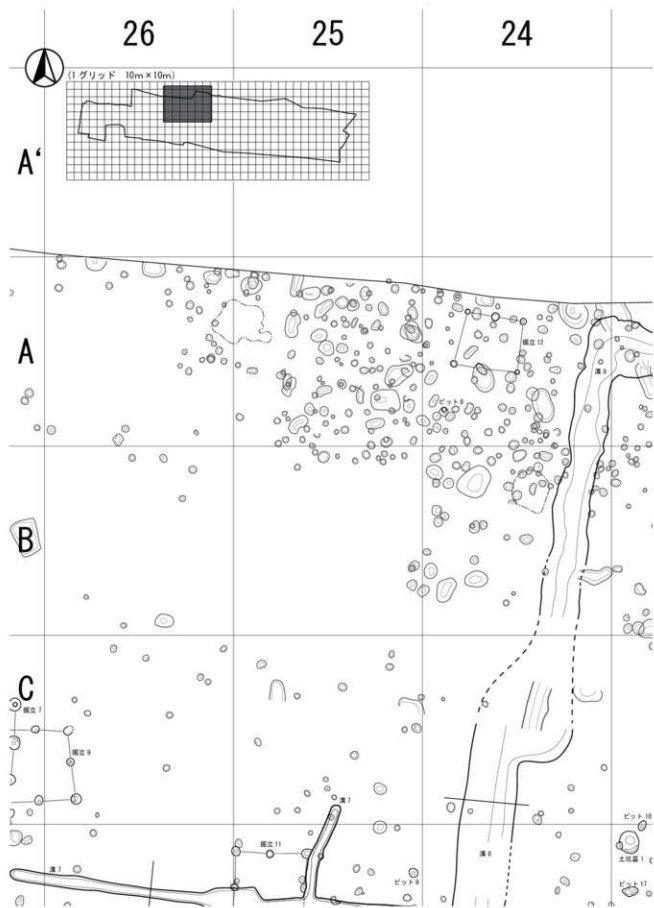
第8図 古代遺構配置図2



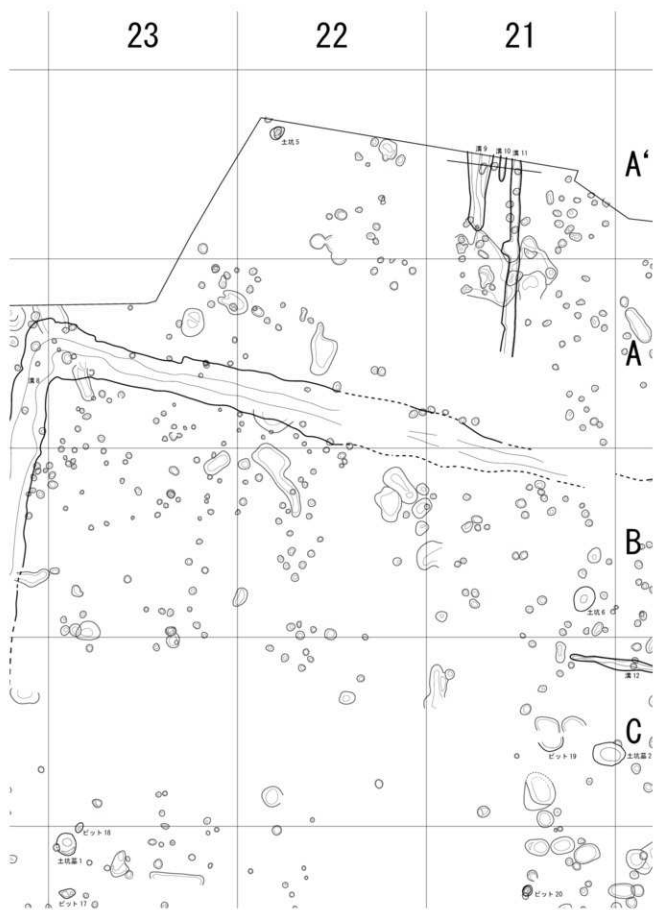
第9図 古代遺構配置図3



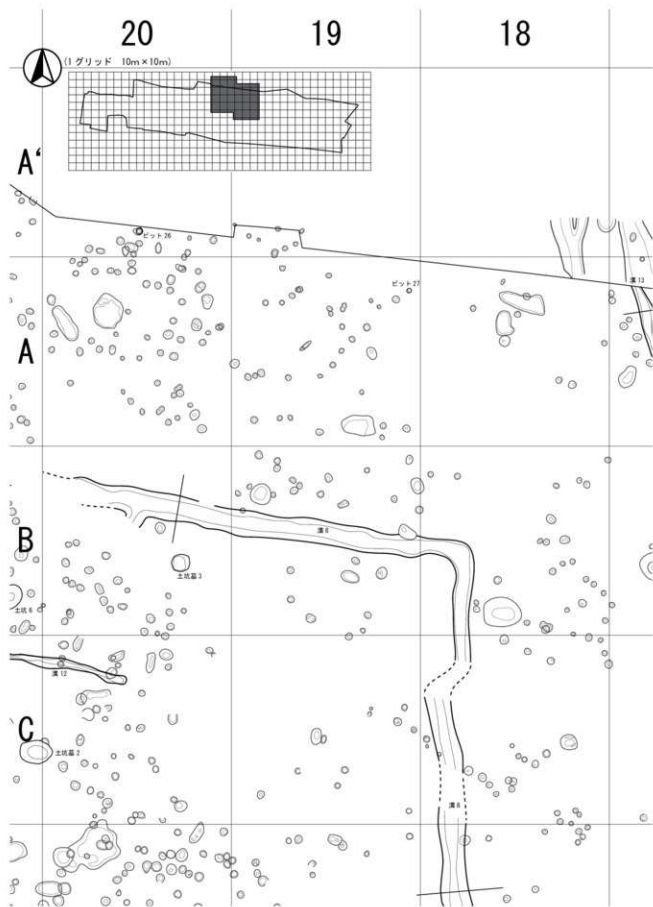
第10図 古代遺構配置図4



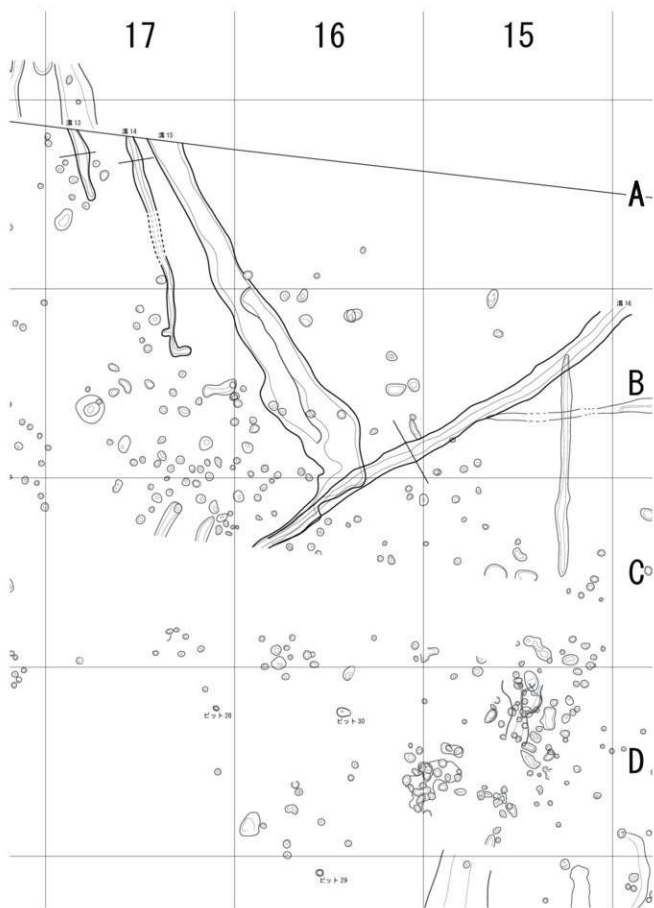
第11図 古代遺構配置図5



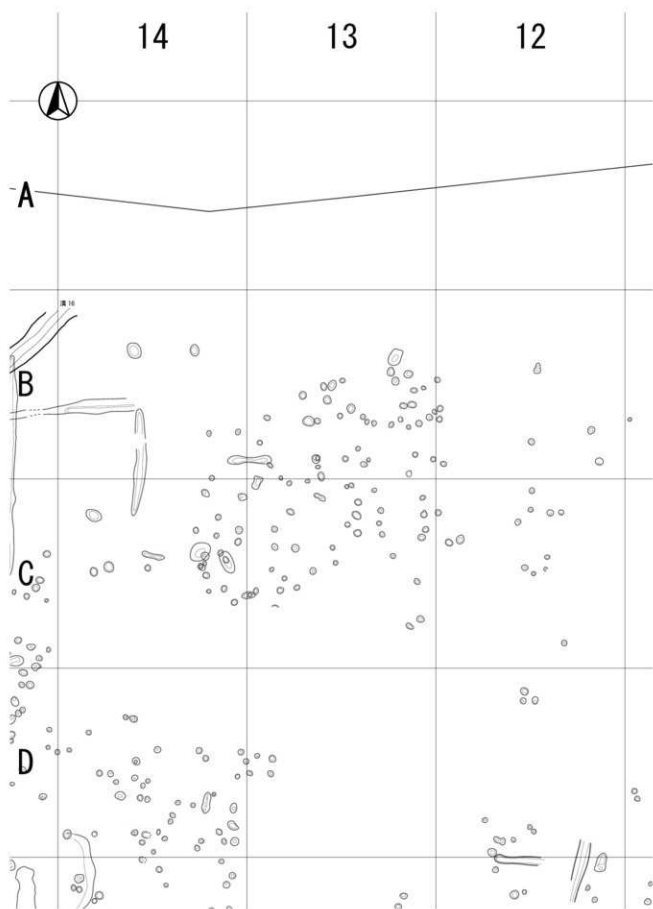
第12図 古代遺構配置図6



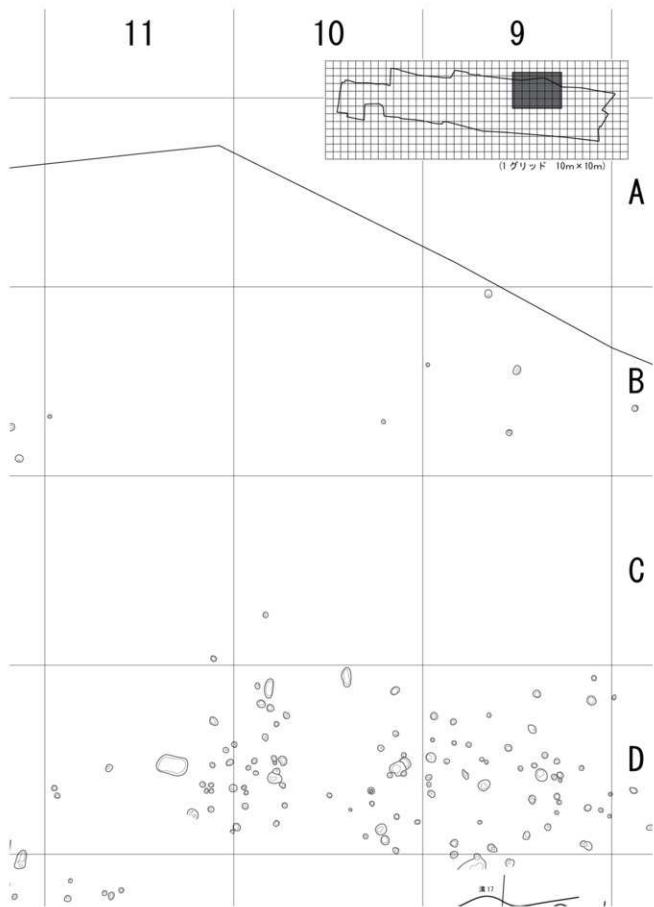
第13図 古代遺構配置図7



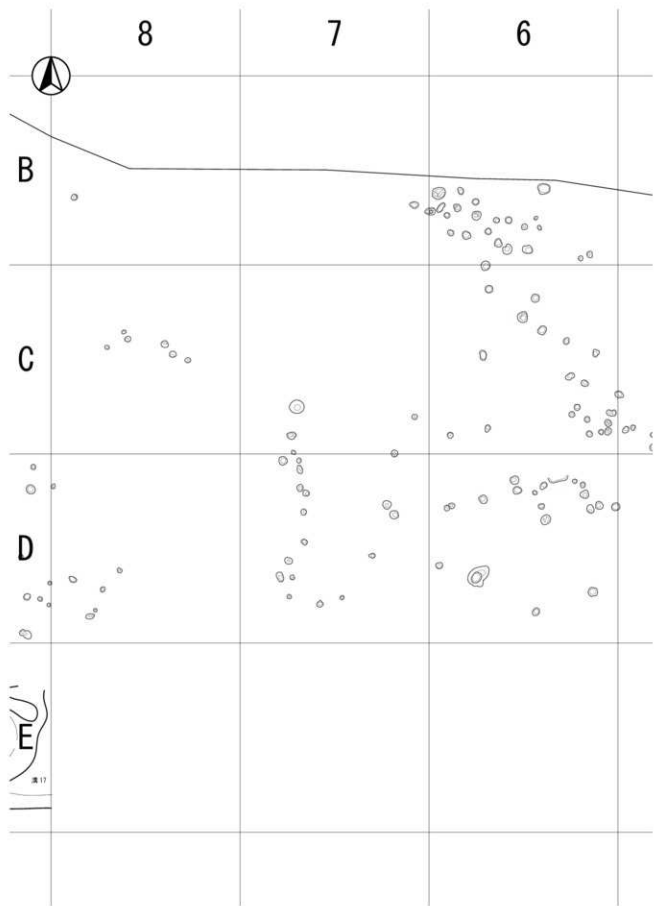
第14図 古代遺構配置図8



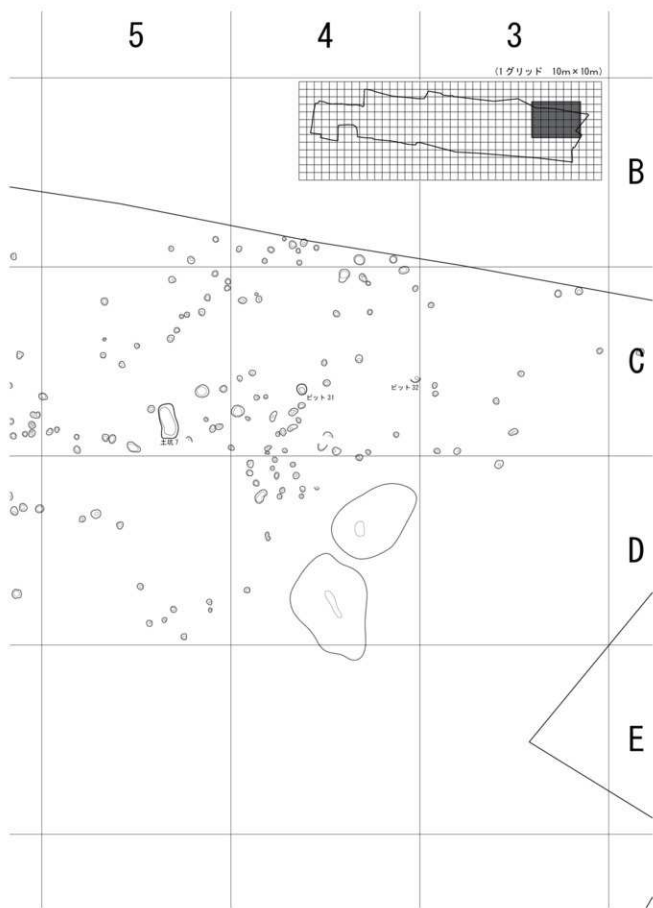
第15図 古代遺構配置図9



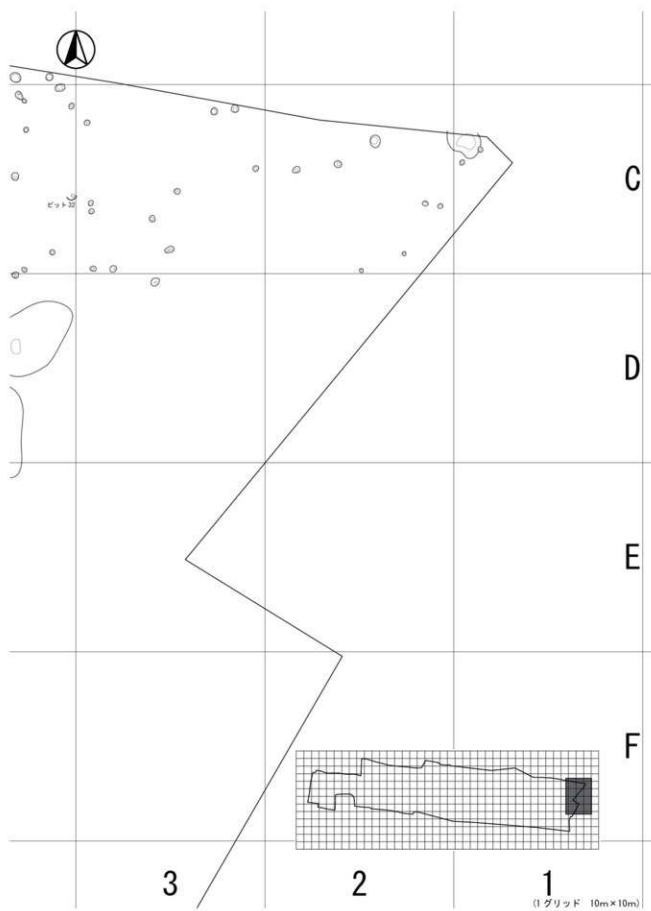
第16図 古代遺構配置図10



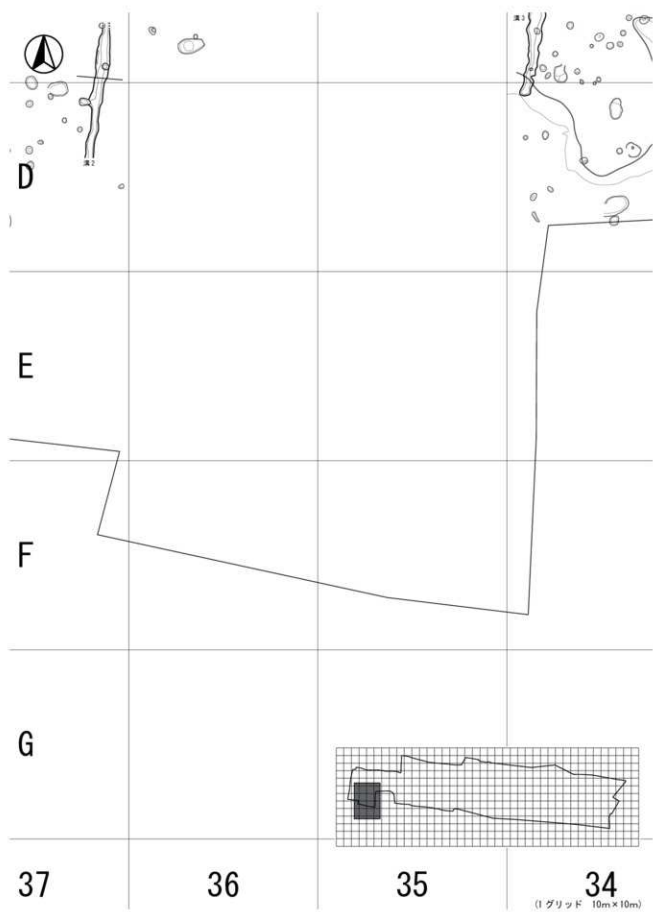
第17図 古代遺構配置図11



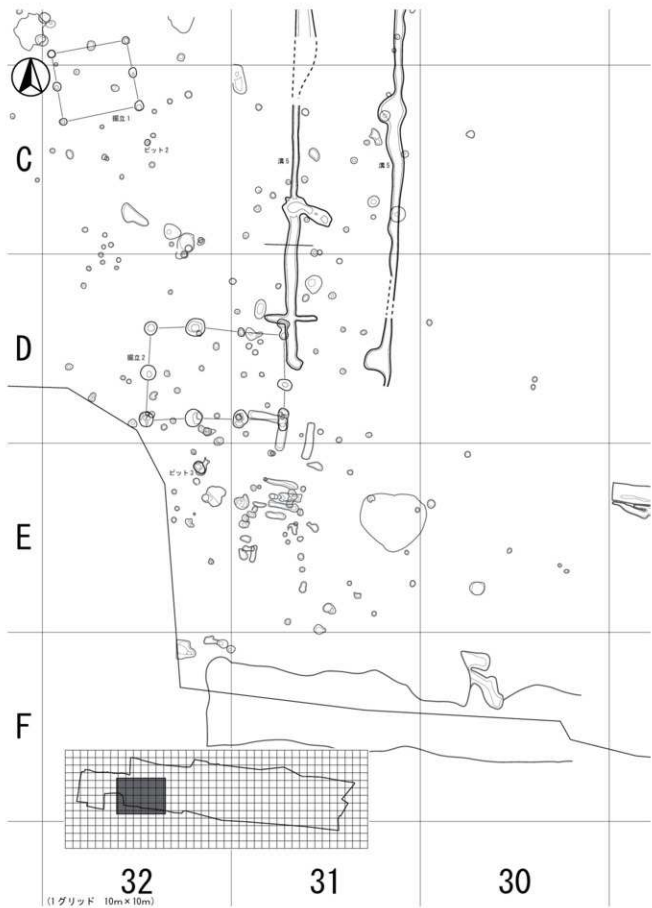
第18図 古代遺構配置図12



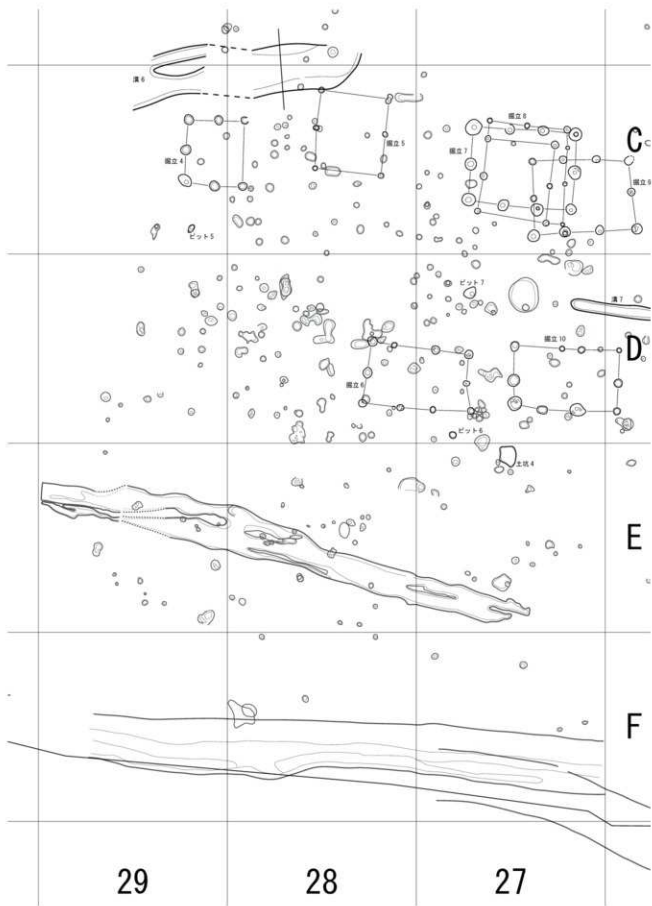
第19図 古代遺構配置図13



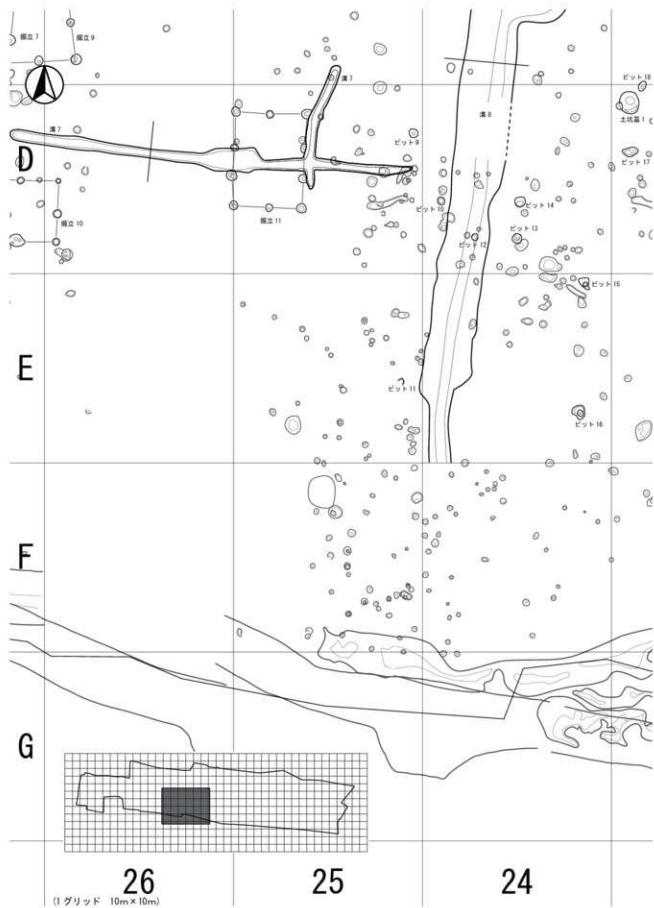
第20図 古代遺構配置図14



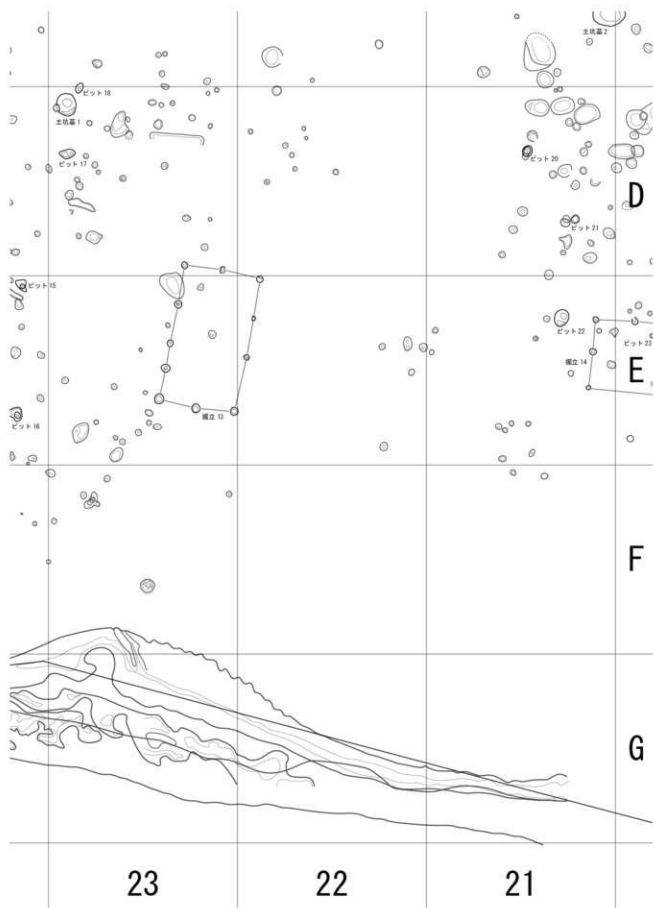
第21図 古代遺構配置図15



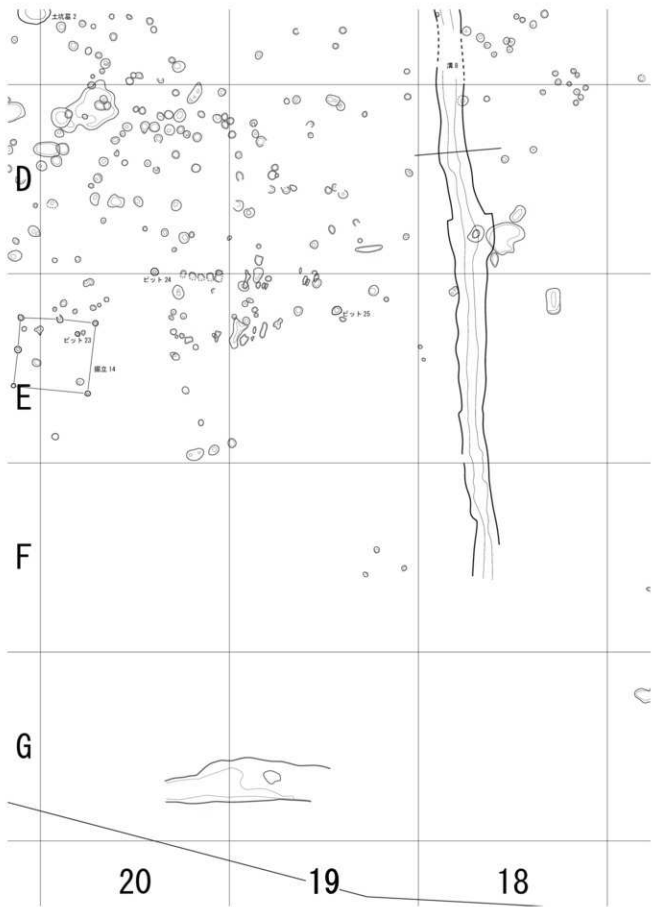
第22図 古代遺構配置図16



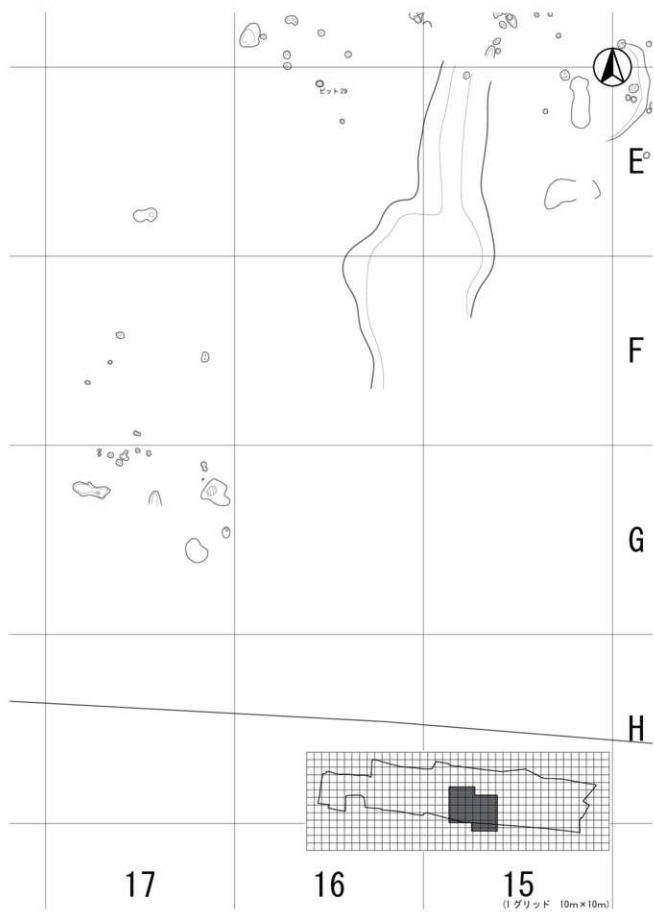
第23図 古代遺構配置図17



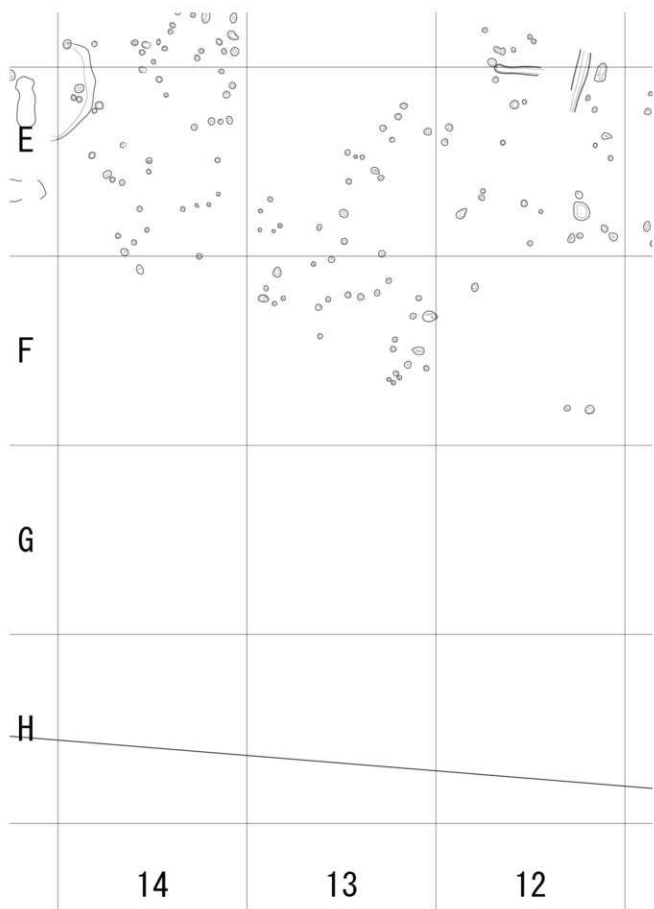
第24図 古代遺構配置図18



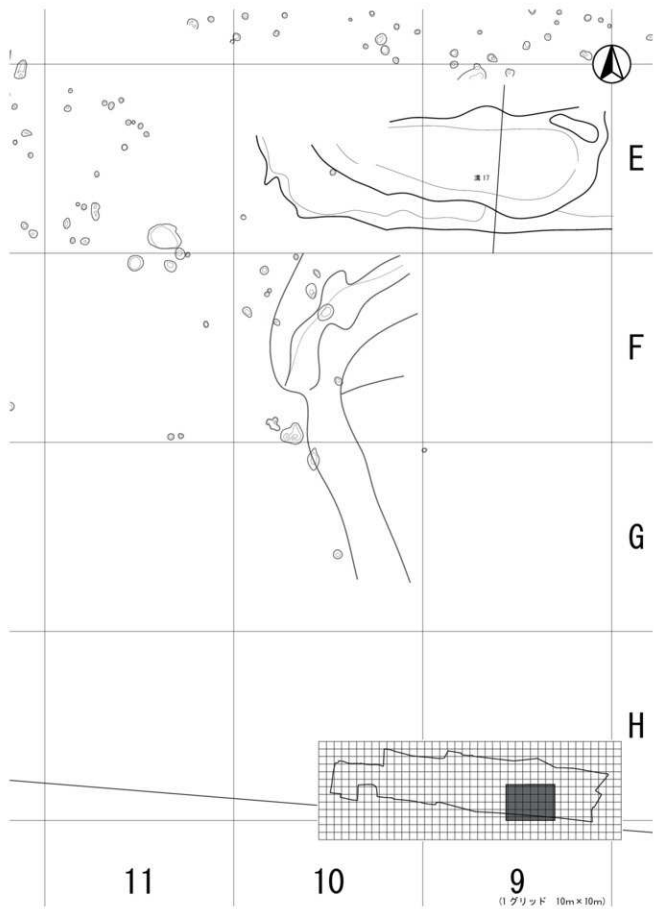
第25図 古代遺構配置図19



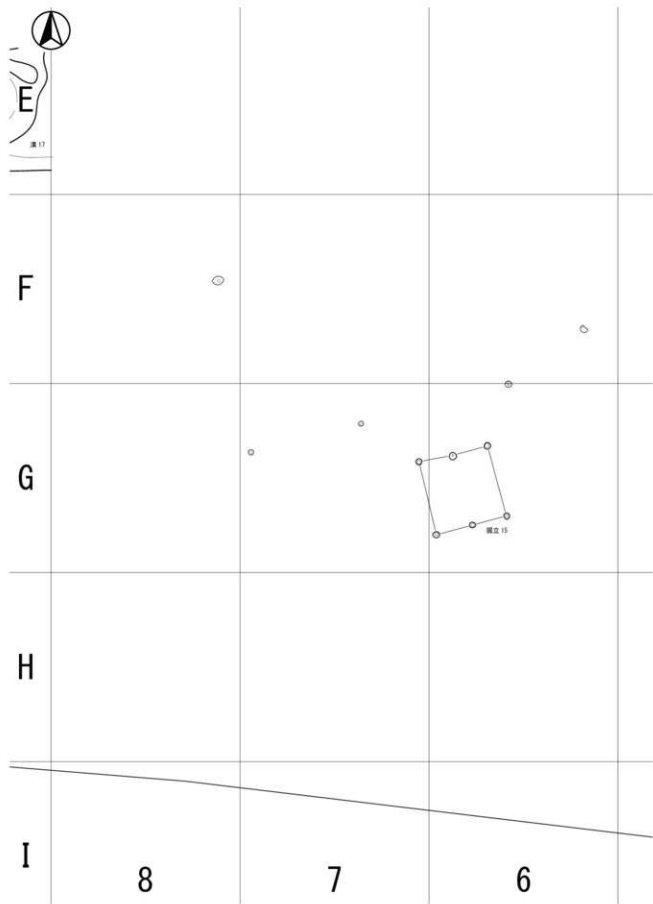
第26図 古代遺構配置図20



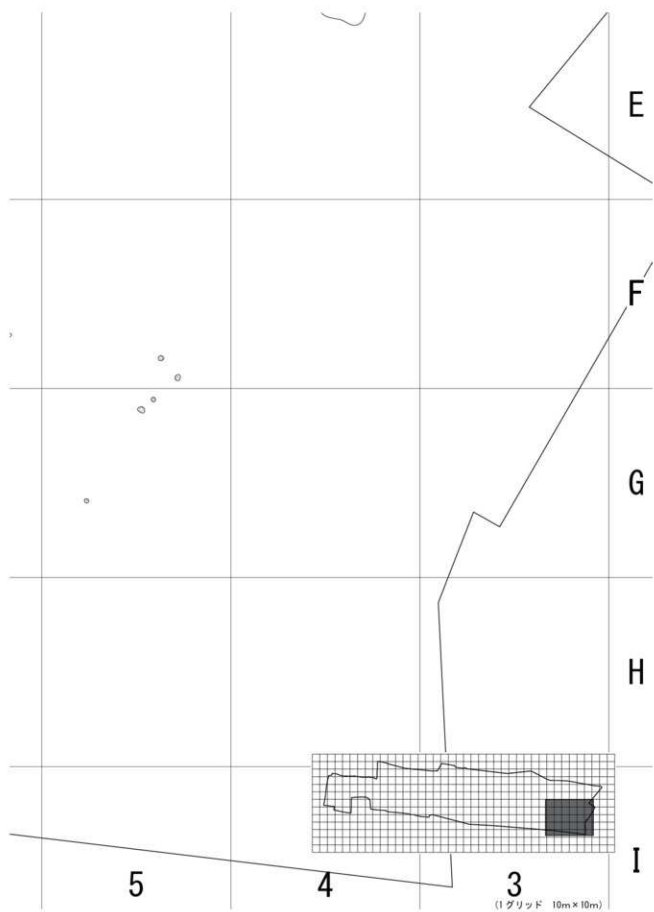
第27図 古代遺構配置図1



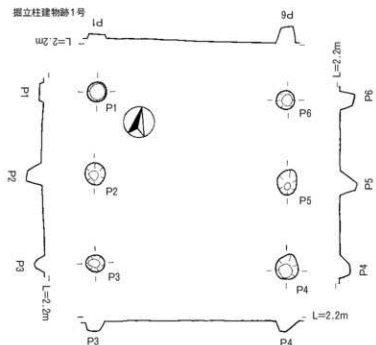
第28図 古代遺構配置図22



第29圖 古代遺構配置圖23



第30図 古代遺構配置図24



掘立柱建物跡1号

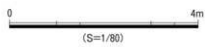
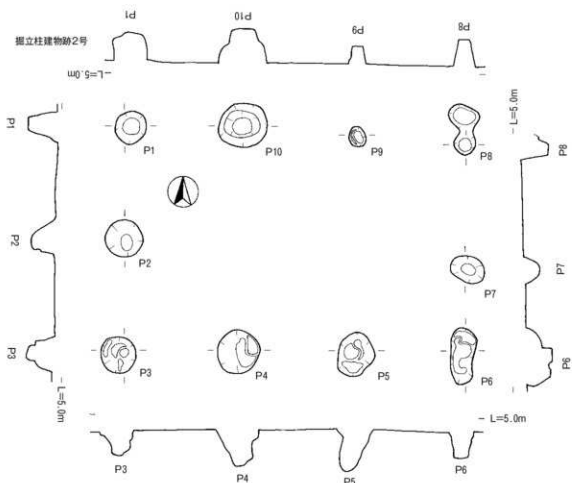
柱番号	柱穴 (cm)		
	直径	半径	高さ
1	80	40	10
2	48	24	33
3	41	20.5	23
4	54	27	21
5	52	26	37
6	48	24	21

柱穴番号	掘立柱間 (m)	柱穴番号	掘立柱間 (m)
3-4	4.1	1-2	1.6
6-1	4.1	2-3	1.6
		4-5	1.8
		5-6	1.8

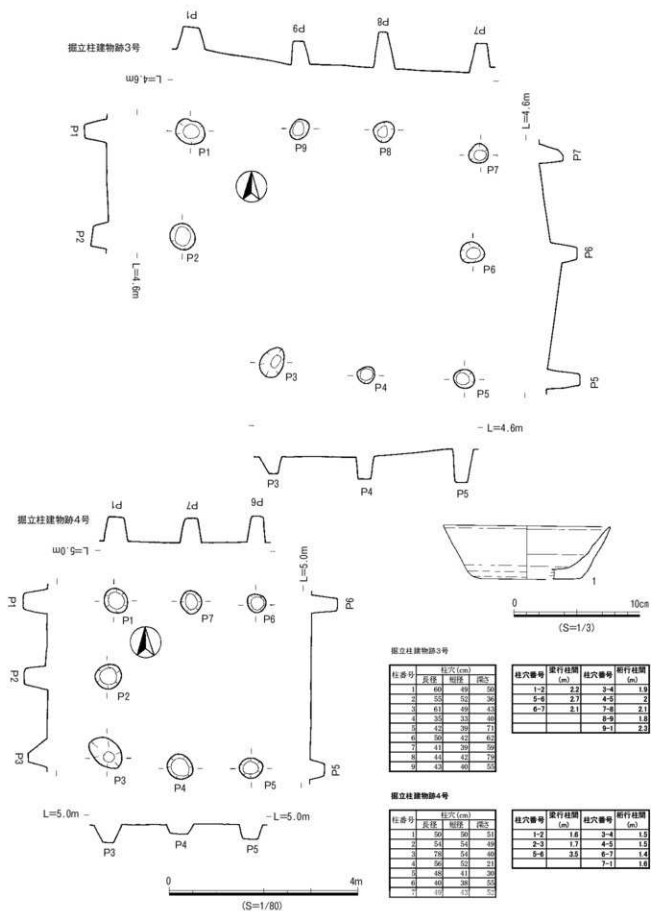
掘立柱建物跡2号

柱番号	柱穴 (cm)		
	直径	半径	高さ
1	72	36	61
2	81	40.5	48
3	77	38.5	66
4	93	46.5	70
5	88	44	78
6	110	55	57
7	77	38.5	31
8	104	52	57
9	47	23.5	40
10	102	51	75

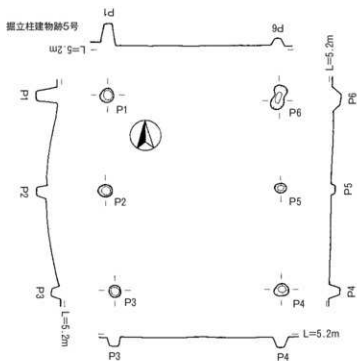
柱穴番号	掘立柱間 (m)	柱穴番号	掘立柱間 (m)
1-2	2.3	3-4	2.3
2-3	2.4	4-5	2.3
6-7	1.7	8-9	2.4
7-8	2.6	9-10	2.3
		9-10	2.4
		10-1	2.3



第31図 掘立柱建物跡1、2号



第32図 掘立柱建物跡3、4号・3号出土遺物



掘立柱建物跡5号

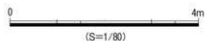
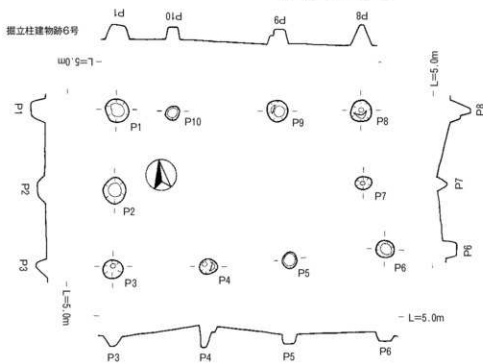
柱番号	柱穴 (cm)		高さ
	直径	幅	
1	33	33	46
2	33	27	51
3	27	27	30
4	30	28	24
5	26	23	46
6	31	29	18

柱穴番号	掘立柱間 (m)	柱穴番号	掘立柱間 (m)
3-4	3.5	1-2	2.0
6-1	3.8	2-3	3.1
		4-5	3.1
		5-6	1.8

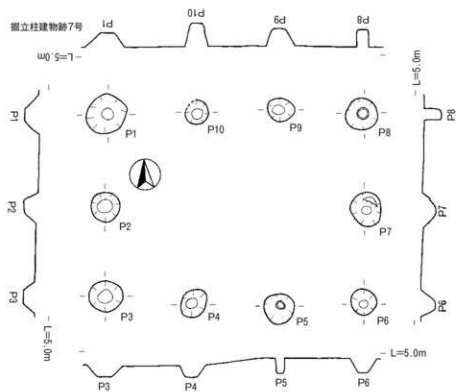
掘立柱建物跡6号

柱番号	柱穴 (cm)		高さ
	直径	幅	
1	49	49	32
2	55	48	14
3	43	46	23
4	38	32	46
5	33	29	30
6	29	25	30
7	35	27	29
8	44	44	33
9	44	43	31
10	39	28	29

柱穴番号	掘立柱間 (m)	柱穴番号	掘立柱間 (m)
1-2	1.7	3-4	2.0
2-3	1.8	4-5	1.8
6-7	1.5	5-6	2.0
7-8	1.5	8-9	1.7
		9-10	2.2
		10-1	1.2



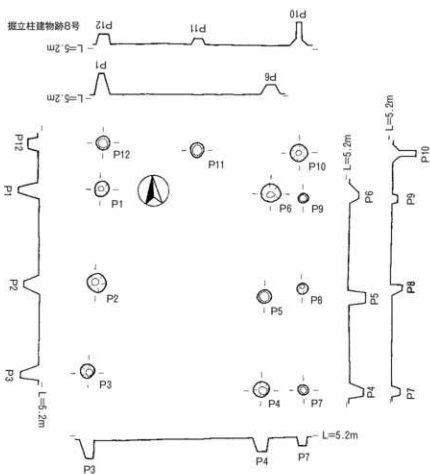
第33図 掘立柱建物跡5、6号



掘立柱建物跡7号

柱番号	柱径 (cm)		
	直径	前後	高さ
1	68	62	21
2	61	61	23
3	70	63	21
4	61	51	24
5	63	53	24
6	53	58	26
7	71	65	25
8	66	66	26
9	53	64	23
10	53	63	26

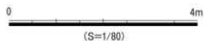
柱穴番号	掘立柱間 (m)	柱穴番号	掘立柱間 (m)
1-2	1.9	3-4	1.8
2-3	1.9	4-5	1.8
6-7	2.0	8-9	1.8
7-8	2.0	8-9	1.8
		9-10	1.7
		10-1	1.9



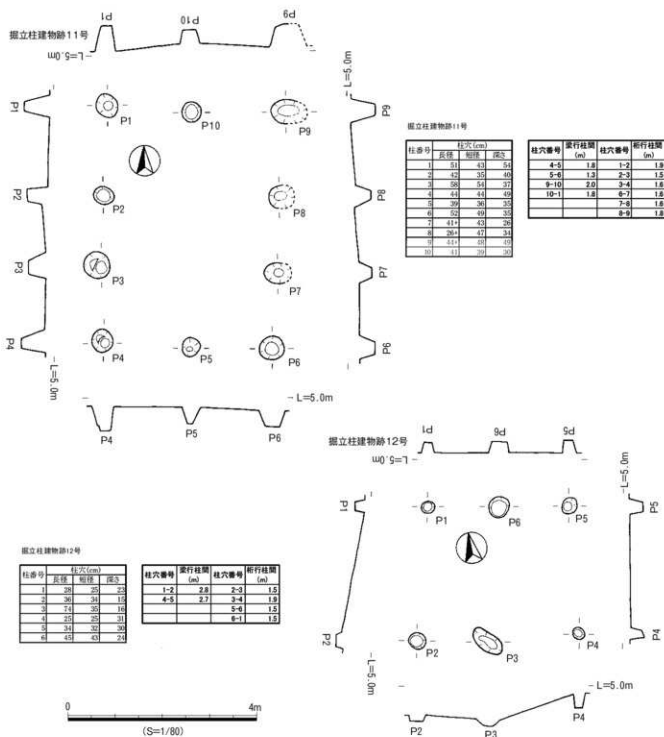
掘立柱建物跡8号

柱番号	柱径 (cm)		
	直径	前後	高さ
1	33	36	15
2	29	29	23
3	31	29	42
4	25	23	21
5	29	29	21
6	41	29	22
7	24	29	18
8	23	23	28
9	21	18	12
10	25	23	29
11	21	29	12
12	21	23	22

柱穴番号	掘立柱間 (m)	柱穴番号	掘立柱間 (m)
3-4	3.7	1-2	2.0
6-7	3.6	2-3	1.9
4-7	0.8	4-5	2.0
10-11	2.1	5-6	2.1
11-12	2.0	7-8	2.2
		8-9	1.8
		9-10	1.0
		12-1	1.0



第34図 掘立柱建物跡7、8号



第36図 掘立柱建物跡11、12号

部は回転ヘラ切りによる切り離し後、調整を施していない。

炉跡 (第38図)

炉跡は、B-37区で1基検出された。上面を削平されており、本来の全体形状は明らかでない。残存部が約50cm四方で、焼土厚は15cm程度である。

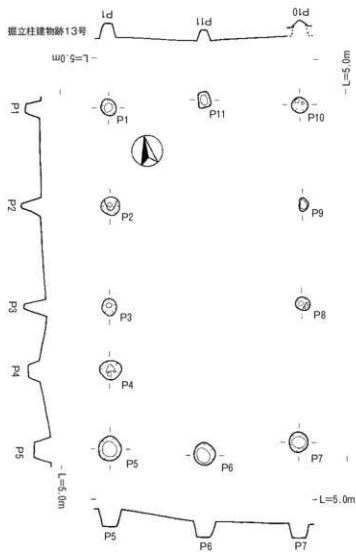
土坑 (第39図～第45図)

土坑は7基検出された。概ね長軸、短軸1m以上のも

ので、遺構内から遺物が出土したものを、基本的に扱った。調査区西側にやや偏っているが集中部を形成するほどではなく、点在する。

土坑1号 (第39図・第40図)

A-36区で検出された。平面形は、長軸2.1m以上、短軸は1.6mの隅丸方形を呈すると思われる。検出面からの深さ約95cmで、底面はほぼ平坦である。埋土中、中位から上位に大量の遺物を検出した。形態から本来、土坑



掘立柱建物跡13号

柱番号	柱穴 (cm)		
	長径	短径	深さ
1	38	31	33
2	48	40	41
3	35	28	43
4	46	42	38
5	52	48	31
6	47	45	32
7	43	40	32
8	33	28	21
9	27	22	5
10	34	34	11
11	33	24	39

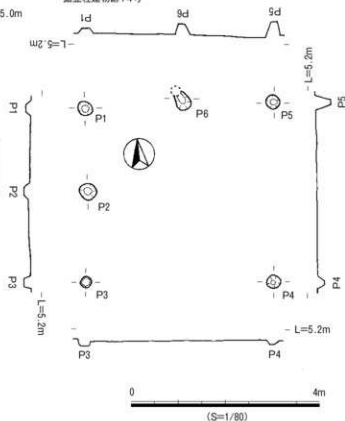
柱穴番号	並行柱間 (m)	柱穴番号	並行柱間 (m)
5-6	2.0	1-2	2.1
8-7	2.0	2-3	2.1
10-11	2.0	3-4	1.4
11-1	2.0	4-5	1.7
		7-8	2.0
		8-9	2.1
		9-10	2.1

掘立柱建物跡14号

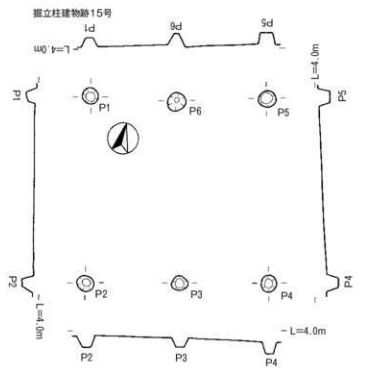
柱番号	柱穴 (cm)		
	長径	短径	深さ
1	30	30	
2	38	34	
3	23	23	
4	29	28	
5	29	28	
6	33	28	

柱穴番号	並行柱間 (m)	柱穴番号	並行柱間 (m)
1-2	1.7	3-4	4.0
2-3	1.9	5-6	1.9
4-5	3.7	6-1	2.1

掘立柱建物跡14号



第37図 掘立柱建物跡13、14号

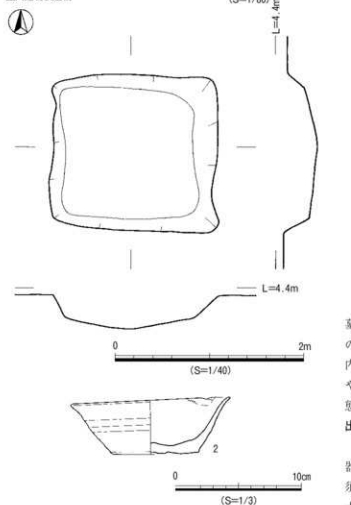


獨立柱建物跡15号

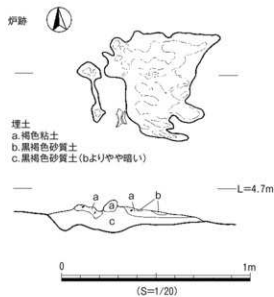
柱番号	柱穴 (cm)		
	長径	短径	深さ
1	33	33	20
2	37	34	24
3	35	31	20
4	34	30	24
5	37	37	25
6	39	39	20

柱穴番号	実行柱間 (m)	柱穴番号	実行柱間 (m)
1-2	3.9	2-3	2.0
4-5	3.9	3-4	1.9
		5-6	1.9
		6-1	1.8

竪穴建物状遺構



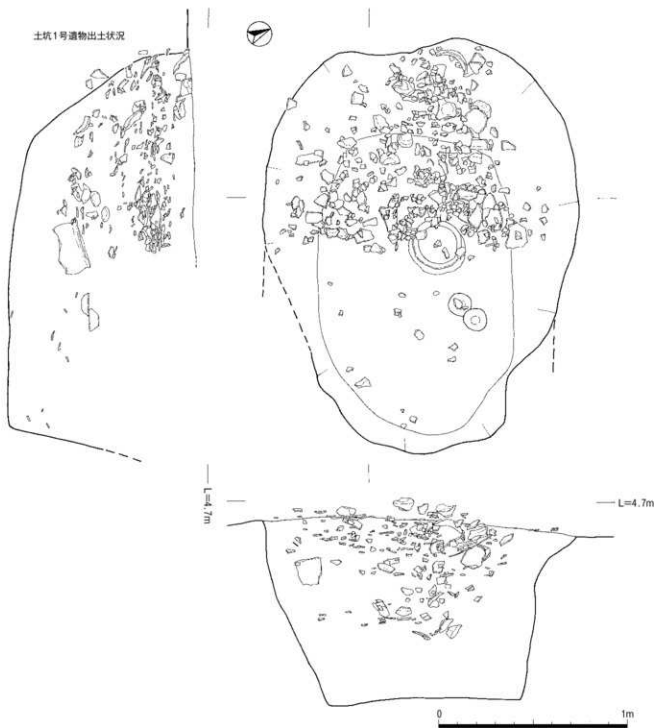
第38図 獨立柱建物跡15号・竪穴建物状遺構・竪穴建物状遺構出土遺物・炉跡



墓の可能性も考えられるが、底面付近での人骨、副葬品の検出がみられないことから、土坑として取り扱った。内部から出土した遺物は、土坑が埋没していく過程でやや深い凹みをもっていた時期に、一括して廃棄された状態とみられる。

出土遺物(第41図～第43図)

土師器椀1点、土師器杯15点、土師器甕8点、黒色土器1点、赤色土器1点、須恵器皿2点、須恵器蓋4点、須恵器大甕1点、土製品1点、墨書土器4点、ヘラ書き土器1点の39点を掲載した。本遺跡の他の遺構と比較して、土師器杯、土師器甕および墨書土器の点数が多い特徴がある。一方、土師器椀、赤色土器、黒色土器および



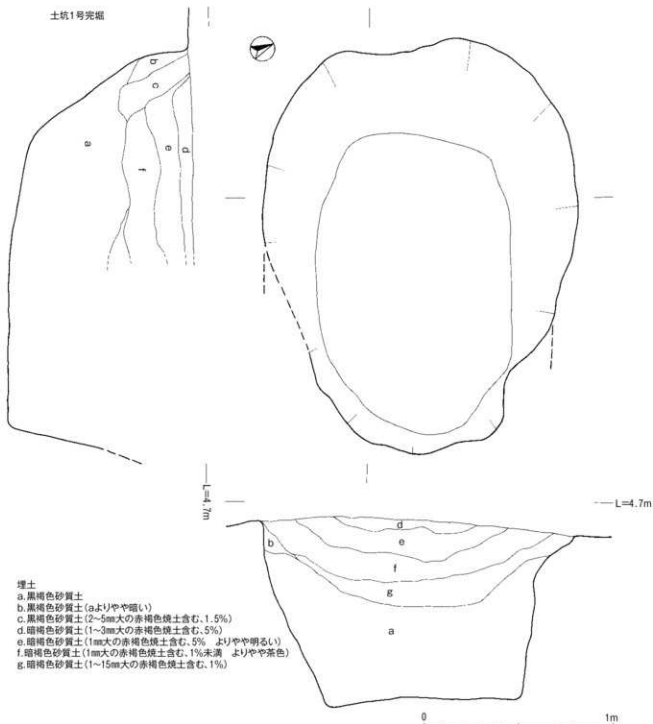
第39図 土坑1号遺物出土状況

須恵器の点数が少ない。また、墨書土器では、「宅」「万」「作」「門」「凡」「富」といった本遺跡で多く出土する文字を記載した土器は出土していない。

3は、土師器碗の底部である。口縁部および高台端部を欠損している。高台はハの字に広がるものである。

4～17は、すべて土師器環のⅢ類である。16と17については底部を欠損しているが、碗との判別が困難なため環として掲載することとした。内外面ともに横ナデ調整を施し、底部は回転ヘラ切りによる切り離し後、ナデ調

整を施している。底面は平坦で、体部が直線的に開く。8・10はほぼ完形品である。4・5・8・9・13・17は口縁端部が突る。6・16は口縁部がほぼ直行している。4・5・7は胴部から口縁部にかけて、やや内湾している。5・6・8・9・11・12は底部から胴部にかけて、やや丸みをもって立ち上がる。11・17は口縁部がやや外反している。11は焼成により、内外面とも赤橙色を呈している。また、底部の器壁がやや厚く、内面の中心部が窪んでいる。18は赤色土器Ⅱ類の環である。



第40図 土坑1号完掘状況

19~25は土師器甕である。口縁部から胴部まで復元できたもので、完形品はなかった。口縁部は短く外反する。19・20・23・25は胴部が張り出すI類、21・22・24は胴部が張り出さないII類である。19は口縁部から胴部の張り出しあたりまで、ほぼ完形で出土している。胴部下端から底部は出土していない。口径26cmを測り、外面にハケ目調整、内面にケズリ調整、内面張り出しに指頭圧痕、口縁部内外面に丁寧な横ナデ調整を施す。20・22~24は、外面にハケ目調整、内面にケズリ調整を施す。25は、口

縁部と底部を欠損している。内外面ともケズリ調整を施す。26は土師器甕の底部である。外面にハケ目調整、内面にケズリ調整、底部内面に指頭圧痕を施す。

27は黒色土器I類の口縁部である。28は赤色土器II類の坏で、口縁部を欠損している。明確な胴部立ち上りの稜をもち、内外面とも丁寧に磨かれている。33は須恵器皿の底部で、口縁部を欠損している。29~32は須恵器蓋である。30はボタン状の柄をもつIV類である。30~32の口縁部は、断面三角形の肥厚部となる。35は

かまどの焚き口を構成する部分と考えられる。34は土師器底部を転用した紡錘車と考えられる。

36～39は墨書土器で、41はヘラ書き土器である。36は土師器杯の胴部外面に墨書されているが、欠損により文字は不明である。37は土師器杯の胴部外面に正位で墨書されていて、一文字目が「大」、二文字目は「得」に類似する。38は土師器杯の胴部外面に逆位で丁寧な楷書体で墨書されている。一文字目は、大部分の偏を欠損し、旁は「酉」と読める。二文字目は「井」と読める。旁に「酉」を持つ字は少なく、「酉」が想定され、あわせて「酒井」となり、人名の可能性もある。39は硬質に焼き締められた土師器皿の底部で、口縁部から底部を欠損している。底部外面の中央部に墨書があり、一部欠損があるが「厂」「豆」「寸」で構成されていて「厨」と読める。40は土師器杯の口縁部で、39の口縁部の可能性がある。41は土師器杯Ⅱ類の完形品で、底部内面の中央やや外側にヘラ書きされている。「乙」の字が、左右逆に書かれた鏡映文字になっている可能性がある。

土坑2号(第44図)

C-36区で検出された。平面形は、長軸1.5m、短軸0.6mの長楕円を呈する。検出面からの深さ約13cmで、上面はかなり削平されていると思われる。

出土遺物(第44図)

42は土師器椀で、底面は平坦で、体部が直線的に開く。

内外面ともに横ナデ調整を施し、高台を欠損している。

土坑3号(第44図)

B-33区で検出された。平面形は、長軸約1.2m、短軸0.9mの楕円形を呈する。検出面からの深さ約32cmで上面は削平されていると思われる。遺構内部東壁面に接し、ほぼ完形の土師甕が出土している。火葬墓の可能性も考えられるが、科学分析の結果では、確証は得られなかった(第4章参照)。

出土遺物(第44図)

43は土師器甕Ⅰ類で、外面にハケ目調整、内面にケズリ調整を施されている。完形であるが、歪が大きい。

土坑4号(第44図)

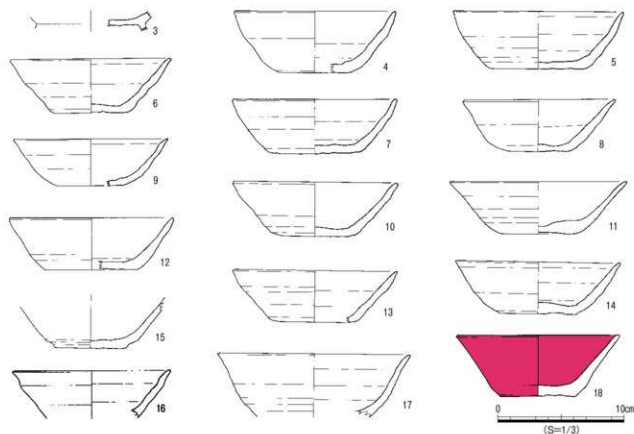
E-27区で検出された。平面形は、長軸約0.9m、短軸約0.8mの台形を呈する。検出面からの深さ約40cmである。掘り込み壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺構内から墨書された土師器の碗が出土した。

出土遺物(第44図)

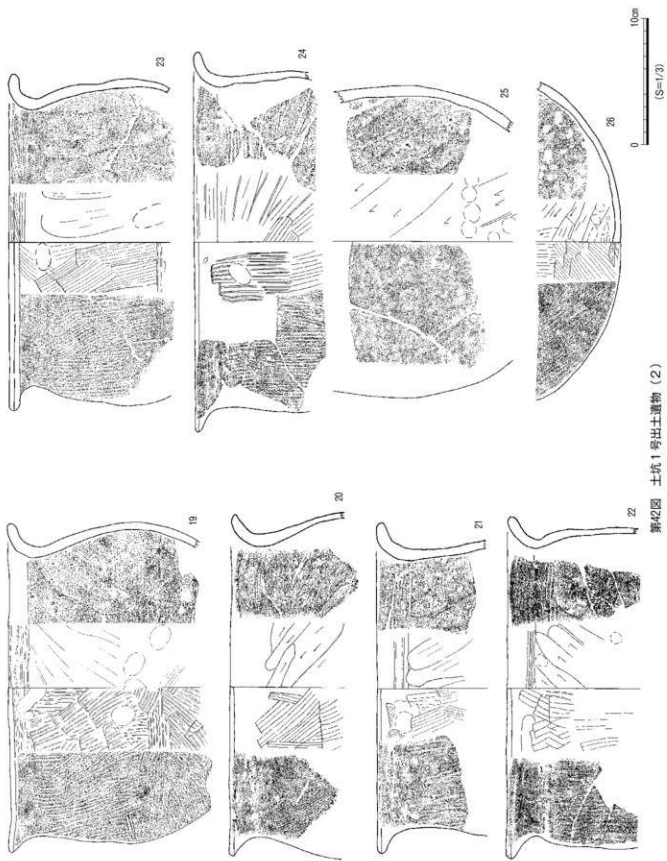
44は胴部外面に朱書の施された赤色土器Ⅰ類の完形品である。化学分析により、顔料はベンガラであるという結果がでている。正位で、後述する「宅」の変形したものと思われる。本遺跡では朱書された土器はこの1点のみである。底部に内面から穿った痕跡がみられる。

土坑5号(第44図)

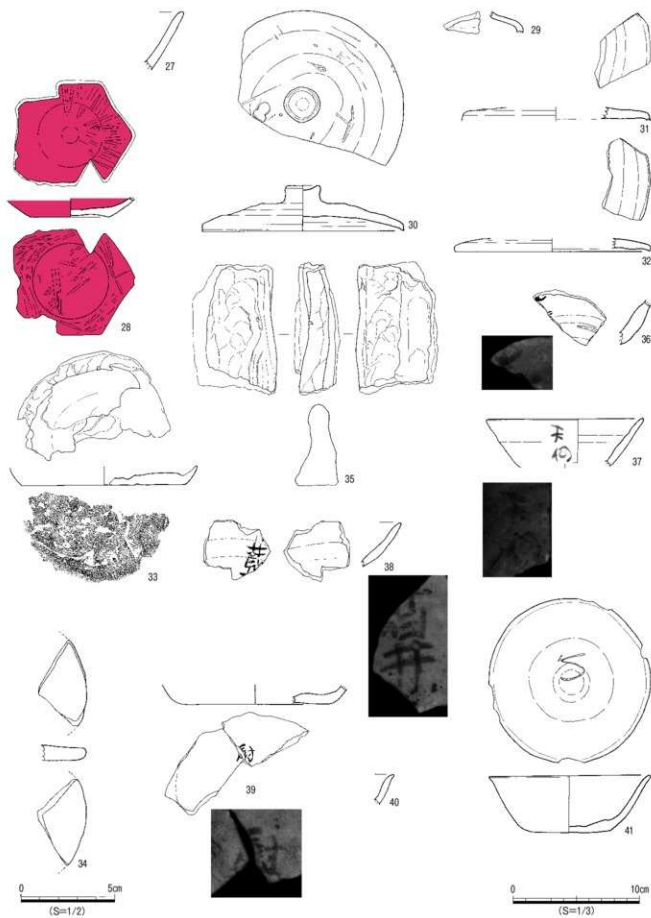
A'-22区で検出された。平面形は長軸0.8m、短軸0.6



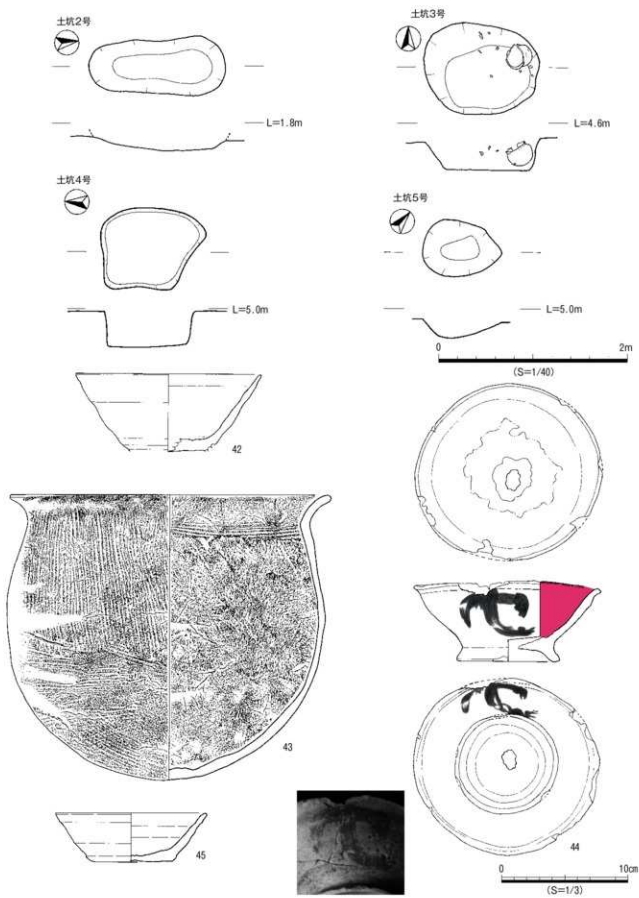
第41図 土坑1号出土遺物(1)



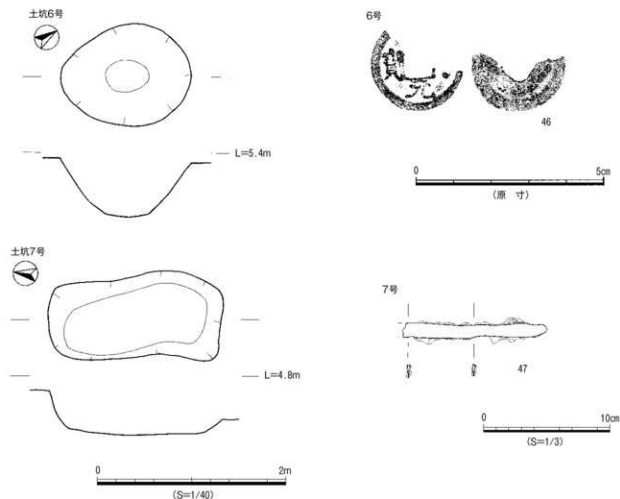
第42图 土坑1号出土器物(2)



第43图 土坑1号出土遗物(3)



第44图 土坑2~5号·出土遗物



第45図 土坑6、7号・出土遺物

mの楕円形を呈する。検出面からの深さ約20cmで、底面は皿状を呈する。

出土遺物 (第44図)

45は硬質の土師器環である。内外面ともに横ナテ調整。底部は回転ヘラ切り後にナテ調整を施されている。

土坑6号 (第45図)

B-21区で検出された。平面形は長軸約1.4m、短軸約1.1mの楕円形を呈する。検出面からの深さ約60cmで、断面形がすり鉢状を呈する。埋土内から銭貨が出土した。

出土遺物 (第45図)

銭貨が1点出土した。46は元・室の文字が判別できる。

土坑7号 (第45図)

C-5区で検出された。平面形は長軸約1.8m、短軸約0.9mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さ約5cmで、底面はほぼ平坦である。埋土内から鉄器が出土した。

出土遺物 (第45図)

47は細身の刃部をもつ刀子片である。

土坑墓 (第46図～第47図)

土坑墓は3基、B-D-20～23区、溝8に囲まれた範囲に検出された。

土坑墓1号 (第46図)

D-23区で検出された。平面形は径約1.2mのほぼ円形を呈し、検出面からの深さ約75cmである。主軸は西に6°振れる。底面で歯、銭貨、釘が出土しており、木棺墓と判断した。

出土遺物 (第46図)

出土した銭貨3枚を図化した。48は咸平元宝である。49は紹聖元宝である。50は景德元宝である。

土坑墓2号 (第47図)

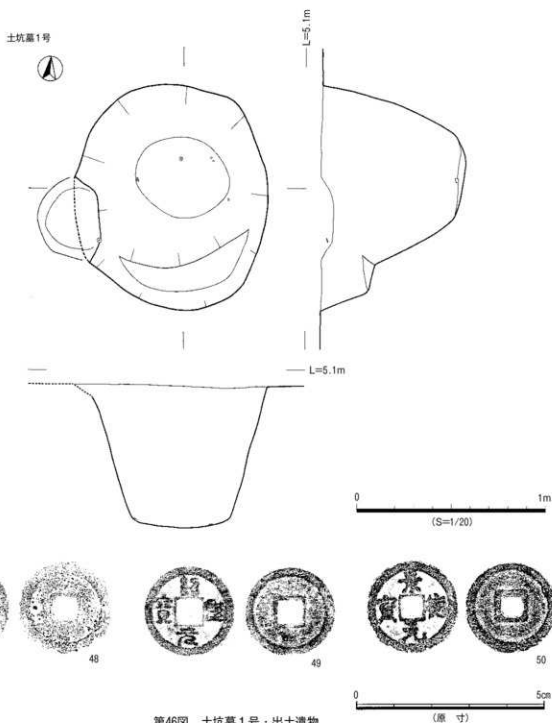
C-20-21区で検出された。平面形は、長軸約1.7m、短軸1.2mの楕円形を呈する。主軸は西に78°振れる。検出面からの深さ約65cmで底面中央付近が凹む、断面U字形を呈する。埋土内から釘、土師器片が出土しており、木棺墓と判断した。

土坑墓3号 (第47図)

B-20区で検出された。平面形は、長軸1m、短軸0.9mのほぼ方形を呈する。検出面からの深さ約50cmで、底面はほぼ平坦である。遺構内から銭貨が出土した。

出土遺物 (第47図)

51は、銘のため室の字のみ読み取れる。種別については不明である。



第46図 土坑墓1号・出土遺物

ビット (第48図)

ビットは、調査区内全域に多数検出された。その内遺構内に根石、礎などが確認できたものについて図化し掲載した。また、掲載可能な遺物が出土したものについては、遺構配置図中に遺構番号を付して表示し、遺物のみ掲載した。

ビット1号 (第7図・第48図)

A-37区で検出された。平面形は長軸約70cm、短軸約35cmの楕円形を呈する。2つのビットが切り合っており、北西側のビットに根石、根固め石と思われるものが入っている。検出面からの深さ約35cmである。周辺に建

物を構成するビット配列がないか確認したが、復元には至らなかった。

ビット2号 (第9図・第48図)

C-32区で検出された。52は口径13cmの小型の土師器皿である。口縁部が外反する器形で、器面調整は丁寧な回転ナデである。

ビット3号 (第21図・第48図)

E-32区で検出された。53は土師器杯の胴部外面に、正位で墨書されている。「大」の字に類似する。

ビット4号 (第10図・第48図)

A-28区で検出された。54は赤色土器Ⅱ類の坏もしくは

は腕の胴部外面に、側位で「宅」と記された墨書土器である。

ビット5号 (第10図・第48図)

C-29区で検出された。55は阜宋通宝である。

ビット6号 (第22図・第48図)

D-27区で検出された。56は蛇文岩を石材とする暗緑色の石製丸鞘で、正面および側面は研磨剤で光沢を持つほど磨かれ、裏面の外枠付近まで認められる。3ヶ所の径0.2mmの貫通する孔が認められる。重量は9gである。

ビット7号 (第22図・第48図)

D-27区で検出された。銭貨が1点出土した。57は阜宋通宝である。

ビット8号 (第11図・第48図)

A-24区で検出された。58は須恵器壺の口縁部から頸部である。頸部がくの字に屈曲し、二重口縁となるものである。

ビット9号 (第11図・第48図)

D-25区で検出された。59は須恵器壺で、頸部がくの字に屈曲し、二重口縁となるものである。

ビット10号 (第23図・第48図)

D-24区で検出された。銭貨が1点出土した。60は元宝通宝である。

ビット11号 (第23図・第48図)

E-25区で検出された。銭貨が1点出土した。61は元祐通宝である。

ビット12号 (第23図・第48図)

D-24区で検出された。62はバケツ形に開く器形の須恵器鉢の完形品である。63は硬質の赤色土器Ⅰ類の腕の底部外面に、ヘラ書きされている。「乙」の字が、左右逆に書かれた鏡映文字になっている可能性がある。

ビット13号 (第23図・第48図)

D-24区で検出された。銭貨が1点出土した。64は乳元重宝である。

ビット14号 (第23図・第48図)

D-24区で検出された。銭貨が1点出土した。65は熙寧元宝である。

ビット15号 (第23図・第48図)

E-24区で検出された。銭貨が1点出土した。66は熙寧元宝である。

ビット16号 (第23図・第48図)

E-24区で検出された。銭貨が1点出土した。67は元豊通宝である。

ビット17号 (第11図・第49図)

D-23区で検出された。銭貨が1点出土した。68は天聖元宝である。

ビット18号 (第11図・第49図)

C・D-23区で検出された。銭貨が1点出土した。69は祥符元宝である。

ビット19号 (第12図・第49図)

C-21区で検出された。70は硬質の土師器杯で、内外面ともに横ナデ調整。底部は回転ヘラ切り後にナデ調整を施されている。

ビット20号 (第12図・第49図)

D-21区で検出された。71は、ほぼ完形の土師器杯で、内外面ともに横ナデ調整。底部は回転ヘラ切り後にナデ調整を施されている。

ビット21号 (第24図・第49図)

D-21区で検出された。72は、ほぼ完形の須恵器杯で、内外面ともに赤橙色を呈する。

ビット22号 (第24図・第49図)

E-21区で検出された。銭貨が1点出土した。73は嘉祐元宝である。

ビット23号 (第25図・第49図)

E-20区で検出された。74は、土師器杯もしくは腕で底部内面に、ヘラ書きされている。「作」の字に類似する。

ビット24号 (第25図・第49図)

D・E-20区で検出された。銭貨が1点出土した。75は太平通宝である。

ビット25号 (第25図・第49図)

E-19区で検出された。銭貨が1点出土した。76は景祐元宝である。

ビット26号 (第13図・第49図)

A-20区で検出された。77は、土師器杯もしくは腕で胴部外面に、三角状の記号が記された墨書土器である。

ビット27号 (第13図・第49図)

A-19区で検出された。78は、硬質の赤色土器Ⅱ類の杯もしくは腕で胴部外面に、文字が施されている。欠損のため文字の判別はできない。

ビット28号 (第14図・第49図)

D-17区で検出された。銭貨が1点出土した。79は太平通宝である。

ビット29号 (第14図・第49図)

E-16区で検出された。銭貨が1点出土した。80は景德元宝である。

ビット30号 (第14図・第49図)

D-16区で検出された。銭貨が1点出土した。81は太平通宝である。

ビット31号 (第18図・第49図)

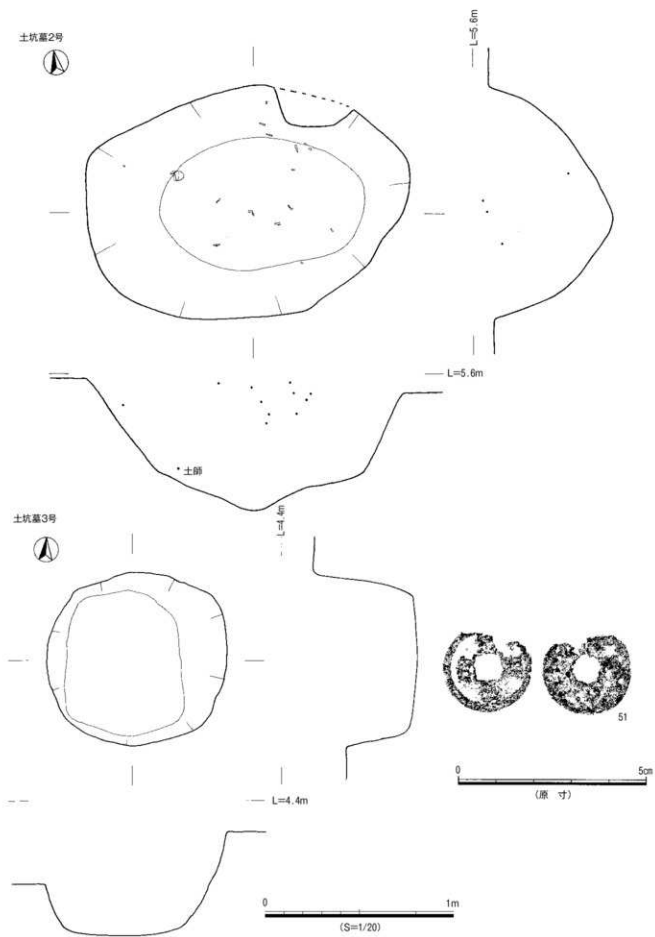
C-4区で検出された。銭貨が1点出土した。82はX線写真での確認の結果、開元通宝であると判明した。

ビット32号 (第18図)

C-4区で検出された。銭貨が1点出土したが、小片のため種別の確認は出来なかった。

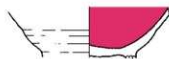
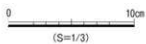
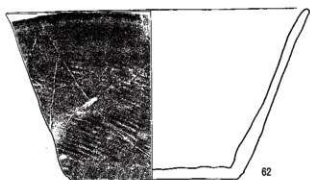
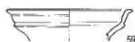
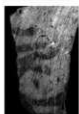
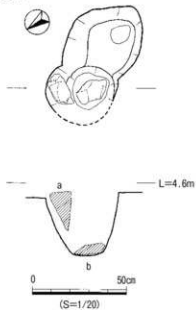
溝 (第50図～第71図)

溝は、調査区内から17条検出された。基盤となる層が

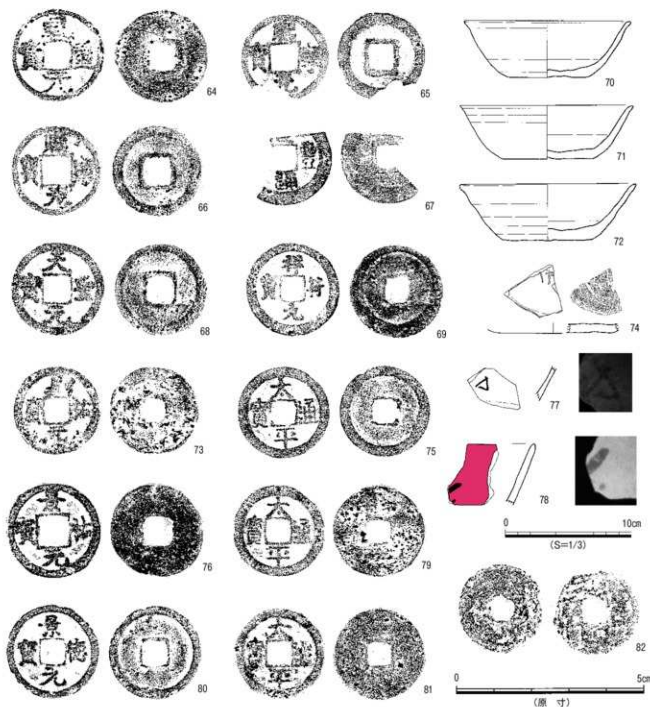


第47图 土坑墓2、3号·3号出土遗物

ピット1



第48図 ピット・ピット内出土遺物(1)



第49図 ビット内出土遺物(2)

砂質が強いため、掘り込みの形状を良好に留めているものは少ない。また、河川敷ということもあり遺構上面を流水作用で削平され、溝本来の深さを留めていないものがほとんどと思われる。B-D-31~34区、A-F-18~24区で検出された溝は、現河川方向にコの字状に開き、その内側と外側を区画しているようである。

溝1号(第7図・第50図)

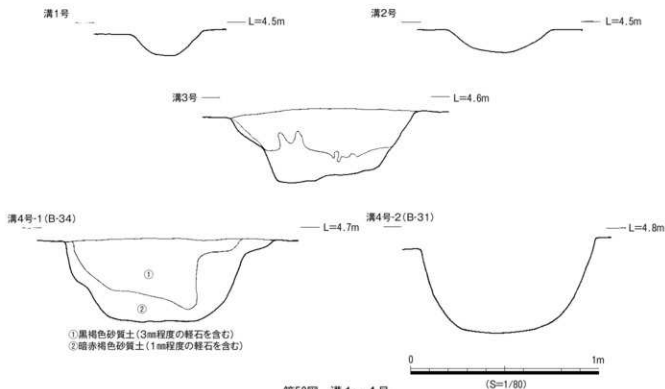
B-37区で検出された。南北方向に2m延びる。幅約40cm、検出面からの深さ約15cmで、断面は緩いU字状を呈する。溝2と同一直線上にあり、本来はつながっていた可能性も考えられる。

溝2号(第7図・第50図)

C-D-37区で検出された。南北方向に7m延びる。幅約1.1m、検出面からの深さ約20cm強で断面皿状を呈する。

溝3号(第8図・第50図)

C-D-34区で検出された。南北方向に約6m延びる。幅約1m、検出面からの深さ約35cmで断面形が箱型のしっかりした掘り込みをもつ。北側で検出された溝4号と同一直線上にあり、本来はつながっていた可能性も考えられる。



溝4号(第8図・第50図)

B・C-30～34区で検出された。B-34区で北方向に約9m延び、東方向へ90°折れ曲がりさらに直線的に約42mのびる。幅約1m、検出面からの深さ約45cmで断面は箱形を呈する。埋土内からは土師器杯、刻書のある土師器など数多くの遺物が出土した。

出土遺物(第51図)

土師器杯3点、土師器皿1点、須恵器椀1点、須恵器杯1点、須恵器蓋1点、須恵器大甕1点、土製品4点、ヘラ書き土器2点を掲載した。89は高台付皿である。口縁部から体部までを欠損している。内面は丁寧に磨かれていて、平坦である。95、96は土師器杯の底部内面にヘラ書きされている。

溝5号(第9図・第52図)

B～D-31区で検出された。南北方向に約23m延びる2条の溝が、B-31区で東西方向に約7m延びる溝につながり、ひとつながりの溝となる。幅約60cm、検出面からの深さ約25cmで緩いU字状の断面を呈する。B-31区で東西に延びる部分は、溝4と重なり、検出レベルから溝5が後出することが明らかである。

出土遺物(第52図)

97は土師器杯の底部外面に、98は土師器杯の底部内面に、ヘラ書きが施されている。欠損のため、文字は判別できない。

溝6号(第10図・第52図)

B・C-28・29区で検出された。東西方向に約12m延びる。幅約2.4m、検出面からの深さ約30cmで断面は皿状

を呈する。

出土遺物(第52図)

99は硬質の土師器杯もしくは椀で胴部内面に、正位でヘラ書きされている。「宅」の字の一部と考えられる。

溝7号(第11図・第52図)

D-25～27区で検出された。東西方向に約21m延びる溝で、D-25区で南北へ枝状に溝が伸びる。幅約60cm、検出面からの深さ約20cmで、断面は緩いU字状を呈する。

出土遺物(第52図)

100は赤色土器の椀で、内面にはミガキ調整が施されている。101は扁平で先端の失る鉄片で、やり鉋もしくは刀子の先端と思われる。

溝8号(第11図・第52図)

A～F-18～24区で検出された。F-18区から北方向に約40m延び、そこで西にほぼ直角に折れ、約55m程のところで、さらに南側にほぼ直角に折れ48m延びる、コの字状の溝である。幅約1.5m、検出面からの深さ約50cmで断面は箱型を呈する。溝埋土内からは、多口瓶のほか多数の遺物が出土した。

出土遺物(第53図～第70図)

(東側53・54図、北側55～60図、西側61～70図)

遺構が長大かつ遺物量が多いため、溝のつながりから3ヶ所に分けて掲載した。18区を中心にした東側で12点、A区を中心とした北側で65点、24区を中心にした西側で91点掲載した。以下、3ヶ所に分けて記述する。

東側の出土遺物の内訳は、土師器杯4点、土師器高杯1点、土師器高台皿2点、黒色土器1点、赤色土器3

点、須恵器1点である。

102～105は、土師器Ⅲ類である。胴部外面の立ち上りの器形は、102に稜が見られ103～105には丸みが見られる。102、103、105は完形品である。108は口径17.8cm底径10.6cmを測る高杯の完形品で、内面にスズ痕がみられる。106と107は高台付皿である。107は高台部を欠損している。109は黒色土器Ⅰ類の椀である。椀Ⅵ類で、口縁部を欠損している。110～112は、赤色土器Ⅰ類のほぼ完形品の椀である。110・111は椀Ⅰ類、112は椀Ⅱ類である。113は肩部に4つの口を持つ多口瓶である。D-18区で出土した。うち一つは欠損し、一部だけを残す。口径8.7cm、底径11.7cm、器高22.4cmを測る。最初に長胴壺を作り、後に肩部に4ヶ所孔を開け、ラッパ状の口縁部を接合している。孔は丸いものと四角いものがある。用途は不明であるが、古代インドにおける打楽器と相似形である。

北側の出土遺物の内訳は、土師器椀4点、土師器Ⅲ類3点、土師器ⅢⅠ点、土師器鉢5点、土師器壺5点、黒色土器2点、赤色土器7点、須恵器蓋4点、須恵器椀1点、須恵器Ⅲ類4点、須恵器鉢1点、須恵器壺3点、須恵器蓋3点、土製品1点、墨書土器7点、へら書き土器4点である。

114～117は土師器椀で、内外面の器面調整は丁寧な回転ナデを施され、口径は15～16cmを測る。114はⅡ類、115はⅣ類の完形品である。114・115・117は、体部が直線的に開く器形である。115・116は口縁部が外反する。116・117は高台部を欠損している。118～130は、土師器Ⅲ類ですべてⅢ類である。118～123、125～128、130は完形品である。内外面の器面調整は丁寧な回転ナデを施され、底部は回転へら切り後にナデ調整を施されている。118・121・123・124・126は、口縁部が外反する。116・125は口縁部の形状が玉縁状である。118・120・122・126・127は、胴部外面の立ち上りの器形に丸みが見られる。122・129・130は、体部が直線的に開く器形である。131は、口縁部が外反する器形の土師器Ⅲ類で、ほぼ完形品である。

132～136は、土師器鉢である。132は口縁部を欠損し、やや厚みのある胴部が直線的に立ち上がる器形である。133～136は、胴部が丸みを持ち口縁部が内湾する器形の土師器鉢Ⅲ類である。内外面の器面調整は丁寧な回転ナデを施され、硬質である。133の底部は、平坦であるのに対して、135の底部は、鉄鉢状に丸く尖り気味の器形である。133の口径は19cmを測る。134・135の口径は17.4～20cmを測る。133の底部は欠損している。137～141は口径23～27cmを測る土師器壺で、底部を欠損している。外面にハケ目調整、内面にケズリ調整を施されている。137～138は胴部が張る器形で、141は胴部が直線的で張り出さない。140は口縁部を欠損している。

142・143は黒色土器Ⅰ類の椀で、胴部はやや丸みをもつ器形である。142は胴部内面にミガキ調整がみられる。143は高台部を欠損している。144～148は、赤色土器Ⅰ類の椀で、口径14～16cmを測る。149は高台付皿で、口径13.2cmを測る。150は口径12cm、底径15cm、器高19.3cmを測る赤色土器Ⅱ類の壺である。外面に工具痕、爪痕、内外面に指頭圧痕を多く施されている。

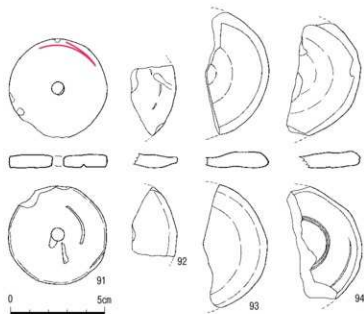
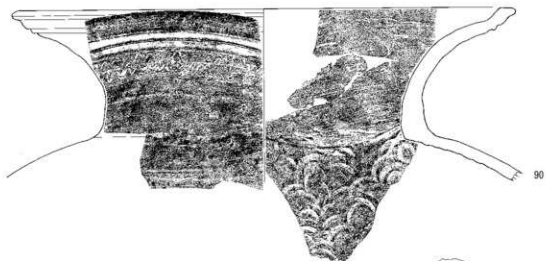
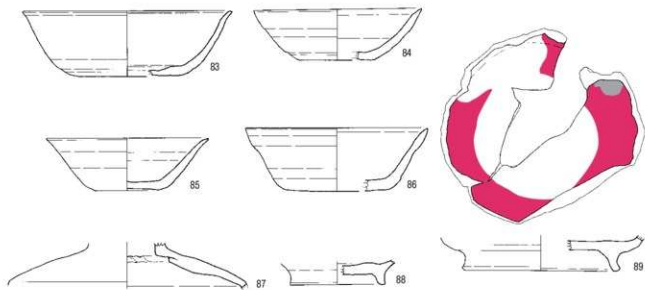
151～154は須恵器蓋である。151は、つまみの頂部が窪みⅣ類で、端部を欠損している。152～154は、底径14～19cmを測り、つまみ部を欠損している。155は須恵器椀のほぼ完形品である。156～159は須恵器Ⅲ類で、159は口径12.8cmを測りやや小型である。160は、バケツ型の器形の須恵器鉢Ⅰ類である。161～163は須恵器壺である。161は口縁部のみで、頸部が口縁部に屈曲し、二重口縁となるものである。162は、口縁部を欠損する。163は底部外面に同心円叩きによる調整が施されている。164～166は須恵器壺である。164は、胴部外面に横位の平行タタキによる調整、内面に当具痕を施されている。165は口縁部を接合痕から上位を欠損し、胴部外面に縦位の平行タタキによる調整を施されている。

167は、土師器Ⅲ類の胴部外面に墨書が施され、右向きの倒位で「宅」の字の変形に類似する。168は土師器Ⅲ類の胴部外面に墨書が施され、右向きの倒位で「口万」の字に類似する。169は完形の内赤土器椀の胴部外面に、墨書が施されている。やや斜位に配置された二つの縦長楕円の墨書の間に、「小」の字に似た墨書が同じく斜位に施されている。人面土器の可能性もある。174は須恵器鉢の底部内面に、「宅」の字がへら書きされている。

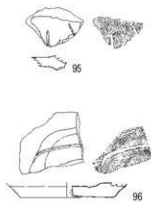
176は、土師器椀の底部内面に、「作」の字がへら書きされている。177は、須恵器小壺蓋の胴部外面に、記号がへら書きされている。内面には、黒い附着物がみられる。

西側の出土遺物の内訳は、土師器椀1点、土師器Ⅲ類21点、土師器高台付皿2点、土師器鉢2点、土師器壺3点、黒色土器6点、赤色土器20点、須恵器蓋2点、須恵器椀3点、須恵器Ⅲ類1点、須恵器壺12点、須恵器鉢1点、須恵器蓋4点、墨書土器11点、へら書き土器2点である。

179は、口径14cmを測る土師器Ⅲ類で直線的に開く器形である。180～195、197は、口径12～13.4cm、器高3.7～5.2cmを測る。189は、口径13cm、器高4.5cmとやや大型である。180・185・188・189・191・196・197は口縁部が外反する器形である。185・188～191・194は胴部の立ち上がりに丸みをもつ。198～200は、小型の土師器Ⅲ類Ⅰ類の一群で、口径7～10cmを測る。200は胴部から底部の外面にスズ痕がみられ、灯明皿の可能性もある。201・202は土師器高台付皿で、口径13cmを測る。203はバケツ状に開く器形の土師器鉢である。底部内面に指頭圧痕による調整が施されている。204は口縁部が内湾する器形の土師器鉢である。硬質に焼き締められている。

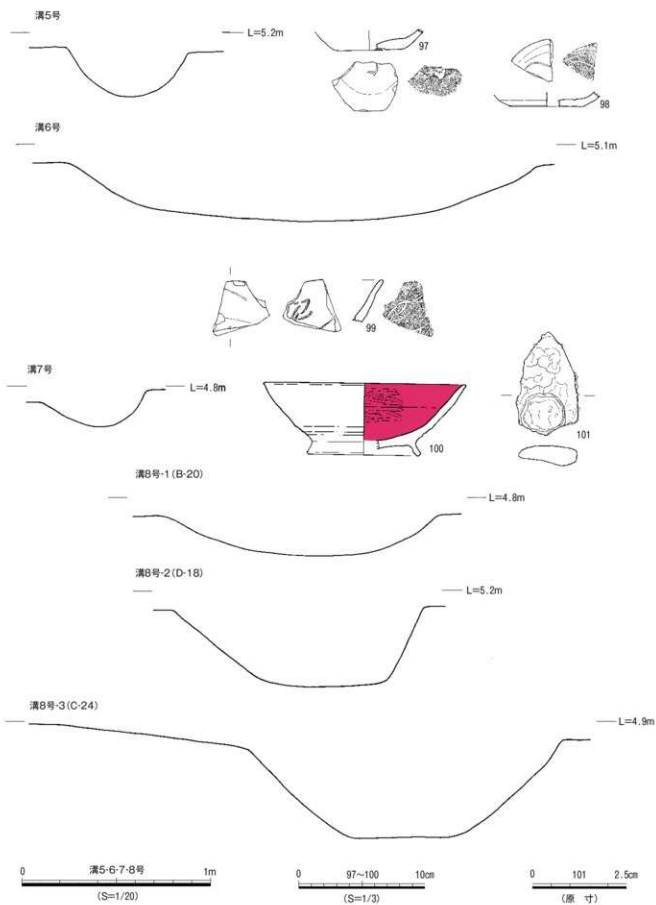


0 5cm
(S=1/2)



0 10cm
(S=1/3)

第51图 溝4号出土遺物



第52図 溝5~8号・溝5~7号出土遺物

205は、胴部がやや張り出す器形の土師器甕である。206・207は胴部が張り出さない器形である。

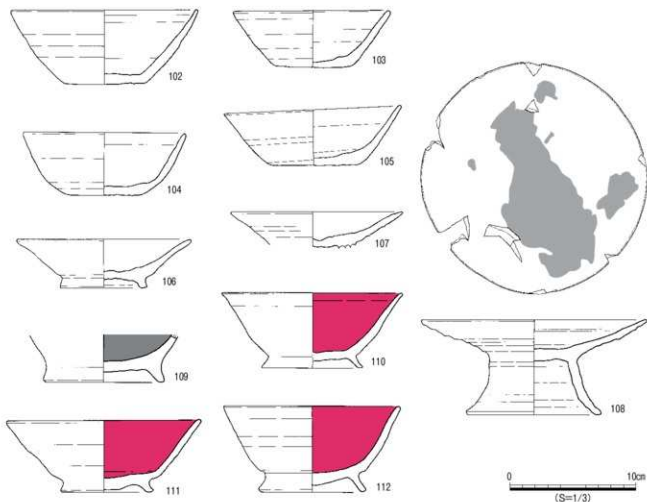
208～212は、黒色土器Ⅰ類の碗である。209・212は、器高4.3cmとやや低く、胴部内面にミガキ調整を施されている。213は黒色土器Ⅱ類の小皿で内外面ともミガキ調整を施されている。214～223は赤色土器Ⅰ類の碗である。内外面の器面調整は丁寧な回転ナデを施され、218・219の内面にはミガキ調整が施されている。224～227は赤色土器Ⅰ類の高台坏皿である。226の胴部外面から底部外面にかけて、赤色顔料着色時に付いたと思われる、赤色の指頭痕が施されている。227は完形品であるが、焼成前に高台の一部が潰れた様子がうかがえる。229は、赤色土器Ⅰ類の鉢で口径13.2cm、器高6.9cmを測る。230～233は赤色土器Ⅱ類である。230は、口縁部から胴部を欠損した碗である。231は直線的に開く器形の坏である。

234は須恵器甕で、高い山形の頂部をもつ擬宝珠状である。235は須恵器甕のつまみで、扁平なボタン状である。236は完形の須恵器碗で、口径15.2cmを測る。

240・242・243は須恵器甕の口縁部から胴部で、頸部がくの字に屈曲し、二重口縁となるものである。241・243

は、胴部外面に横位の平行タタキによる調整、内面に同心円タタキによる調整が施されている。246は須恵器大甕で口唇部と胴部下半部を欠損している。胴部最大径は71cmを測る。胴部外面に横位の平行タタキによる調整、内面上から同心円タタキによる調整が施され、縦位の平行タタキによる調整が続いている。247は須恵器大甕の胴部から底部である。法量・調整から246と同一個体の可能性がある。244は、須恵器大甕の完形品で、口径41cm、器高73cm、胴部最大径61cmを測る。胴部外面に格子タタキによる調整、内面上から同心円タタキによる調整が施され、縦位の平行タタキによる調整が続いている。底部には焼成前にできた凹みがあり、その補修をした痕跡もうかがえる。245は須恵器大甕で、口径32cm、器高59cm、胴部最大径57cmを測る。248は完形の須恵器甕で、口径13.1cm、器高23.4cm、胴部最大径24cmを測る。249は完形の須恵器甕で、外面は青灰色である。252は、バケツ型に開く器形の須恵器鉢である。253～256は須恵器長胴甕で、肩の張る器形である。253は胴部下半を欠損し、頸部がくの字に屈曲し、二重口縁となるものである。253・255は、耳状の把手が肩部直下につく。

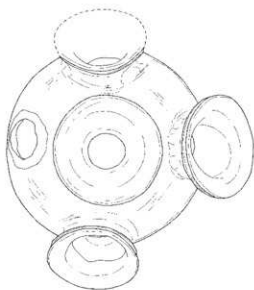
257は、赤色土器Ⅰ類の高台付皿の胴部外面に、3文字



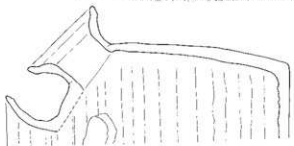
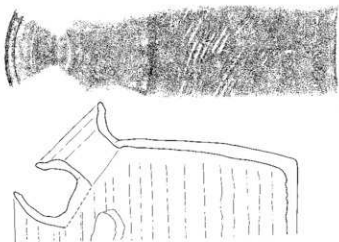
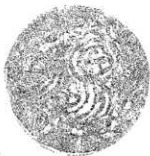
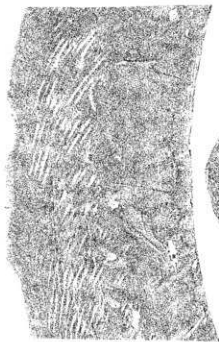
第53図 溝8号(東)出土遺物(1)



腹部内面



腹部内面

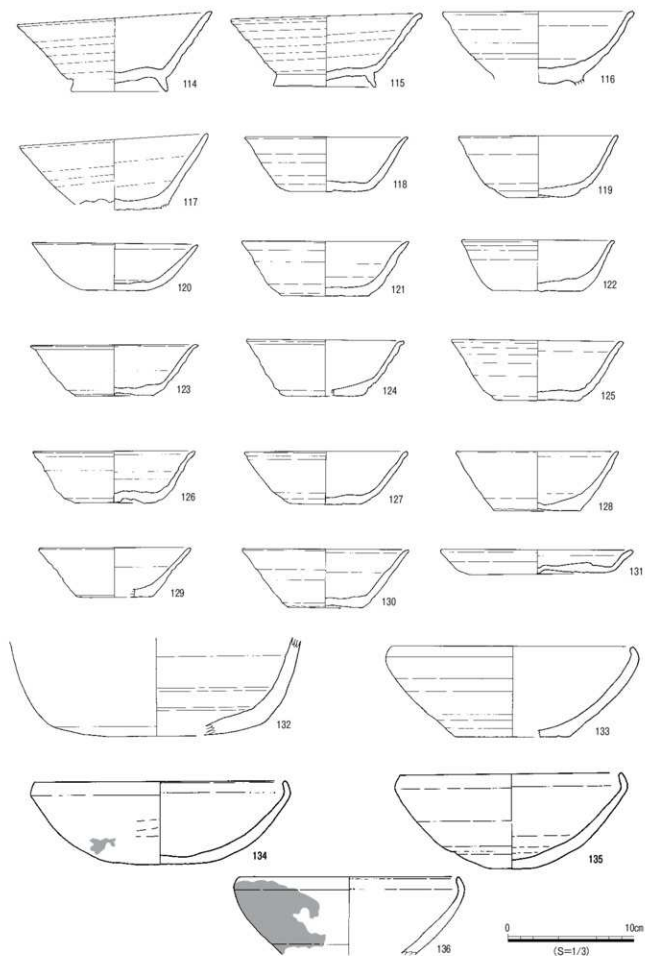


113

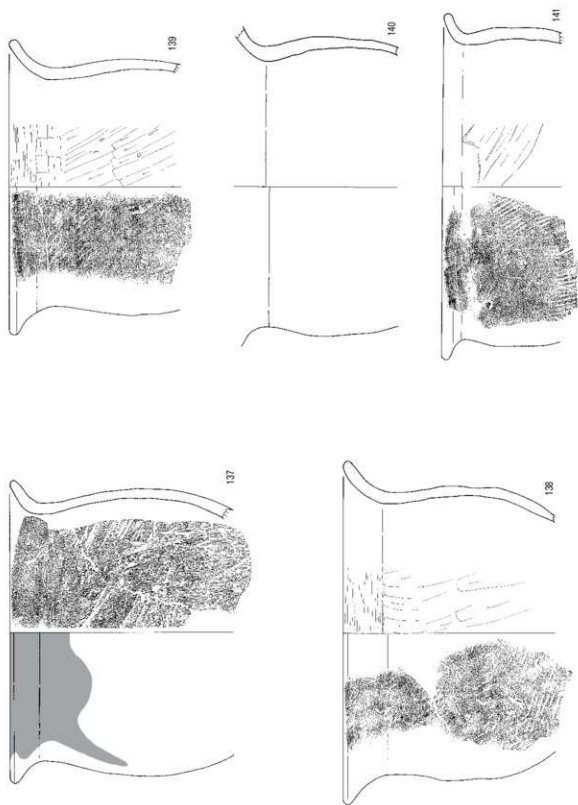
0 10cm

(S=1/3)

第54図 溝8号(東)出土遺物(2)



第55图 清8号(北)出土遗物(1)



第56図 溝8号(北)出土遺物(2)

の右側倒位の墨書が施されている。一文字目は不明瞭であるが、二文字目を「宅」、三文字目を「又」と読める。258は赤色土器Ⅰ類の高台付皿の底部外面に墨書が施されている。不明瞭であるが「宅」の変形文字に類似する。

259は須恵器環の胴部外面に、ヘラ書きされている。261は、赤色土器Ⅰ類の碗の胴部外面に、右側倒位の墨書が施されている。草書体で「宅」と記されている。262は、土師器環の胴部外面に、墨書が施されている。墨書の途中から欠損していて、文字は不明である。263・264・266は、胴部外面に正位で「中万」265は「十万」と、墨書されている。264は、赤色土器Ⅰ類の高台付皿、265は黒色土器Ⅰ類の碗である。269は、赤色土器Ⅰ類の口縁部外面に墨書されている。欠損のため文字は不明である。

溝9号(第12図・第71図)

A'-21区で検出された。南北方向に約4m延びる。幅約1.3m、検出面からの深さ約10cm強で断面は皿状を呈する。調査区外北側へ延びるものと思われる。

溝10号(第12図・第71図)

A'-21区で検出された。南北方向に約50cm延びる。幅約35cm、検出面からの深さ約6cmで、断面は皿状を呈する。調査区外北側へ延びるものと思われる。

溝11号(第12図・第71図)

A・A'-21区で検出された。南北方向に約10m延びる。幅約50cm、検出面からの深さ約5cmで断面は皿状を呈する。調査区外北側へ延びるものと思われる。

溝12号(第12図・第71図)

C-20・21区で検出された。東西方向に約7m延びる。幅約55cm、検出面からの深さ約25cmで、断面は箱型を呈する。

溝13号(第14図・第71図)

A-17区で検出された。南北方向に約4m延びる。幅約65cm、検出面からの深さ約10cm弱で、断面は皿状を呈する。調査区外北側へ延びるものと思われる。

溝14号(第14図・第71図)

A・B-17区で検出された。ほぼ南北方向に約12m延びる。幅約60cm、検出面からの深さ約15cmで、断面は皿状を呈する。南側末端でL字に折れる。

溝15号(第14図・第71図)

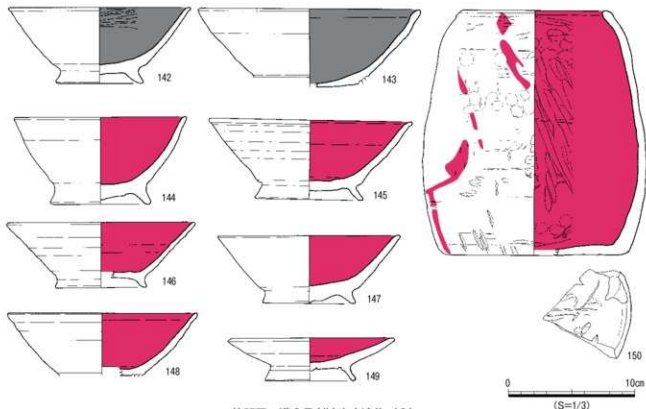
A~C-16-17区で検出された。南東方向に約23m延び、末端は溝16に沿うように南西に折れ曲がる。幅約2.5m、検出面からの深さ約30cmである。

溝16号(第14図・第71図)

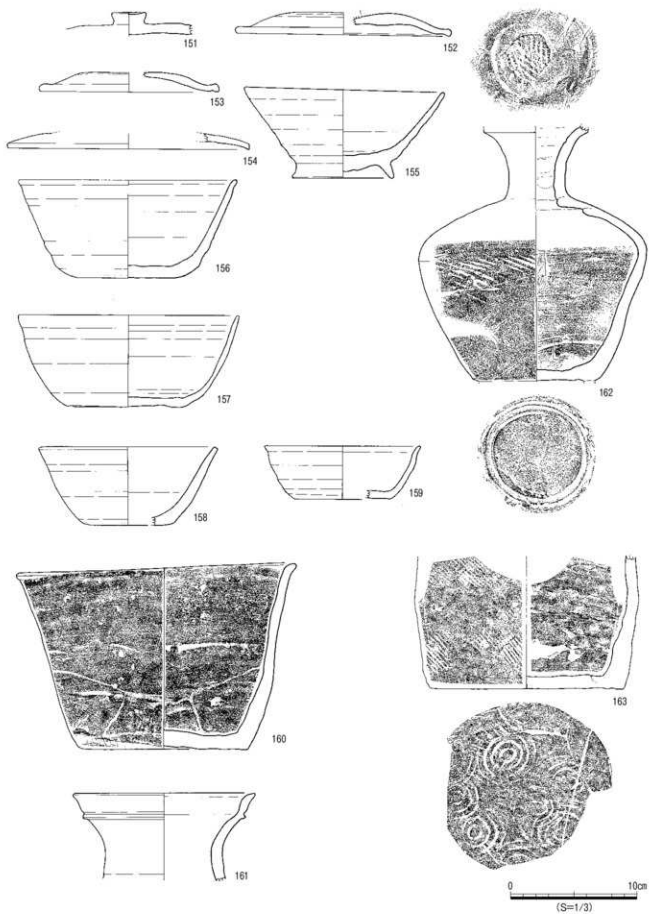
B・C-15・16区で検出された。南西方向に約22m延び、幅約80cm、検出面からの深さ約35cmで、断面は箱型状のしっかりした溝である。末端部では浅くなり自然と消滅してしまう。

溝17号(第28図・第71図)

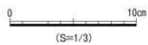
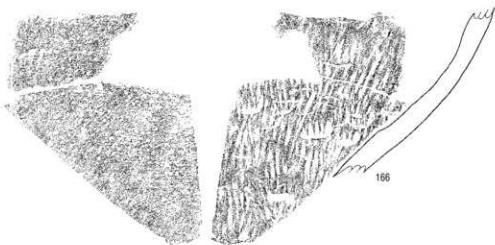
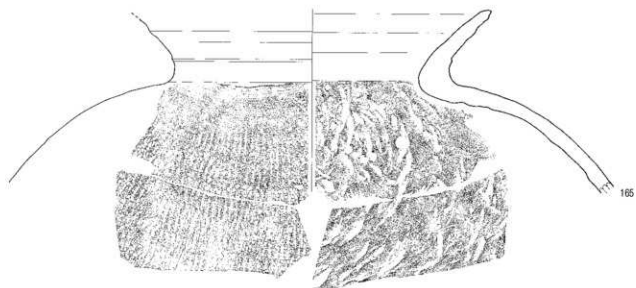
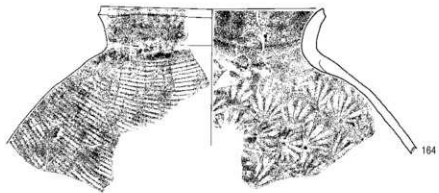
E-9・10区で検出された。東西方向に約18m延び、幅約7m、検出面からの深さ約1.4mで、断面は緩いU字状を呈する。



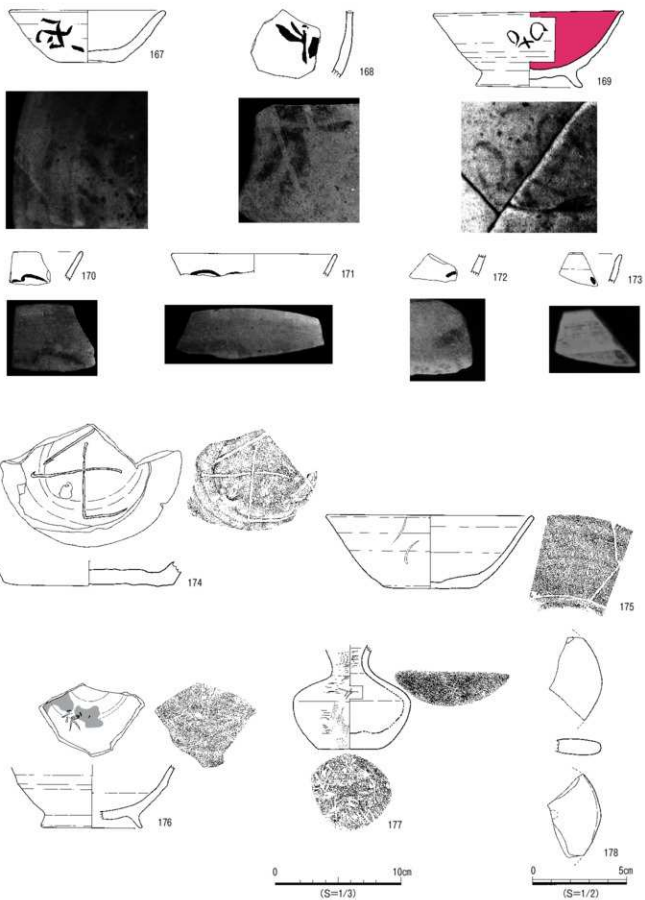
第57図 溝8号(北)出土遺物(3)



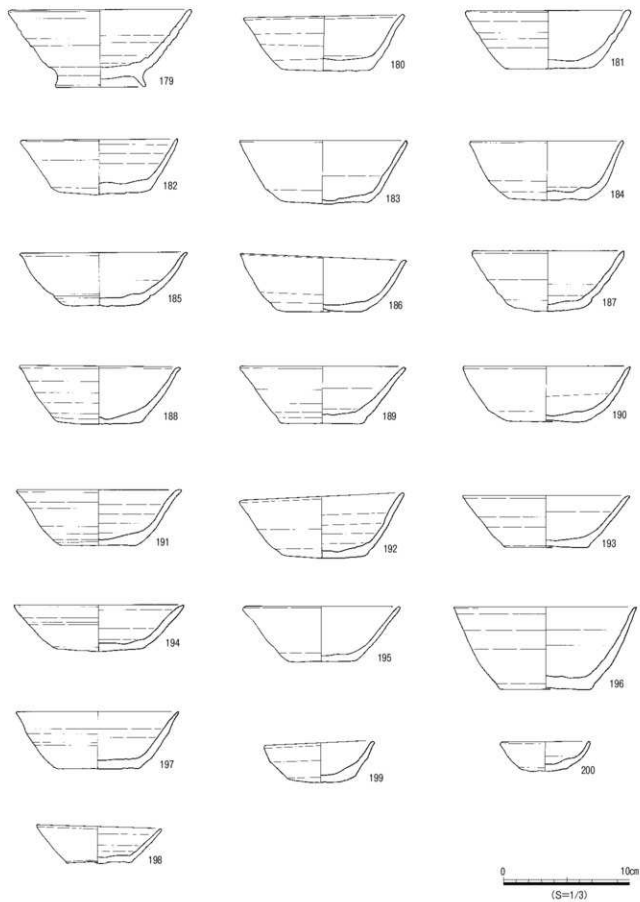
第58图 满8号(北)出土遗物(4)



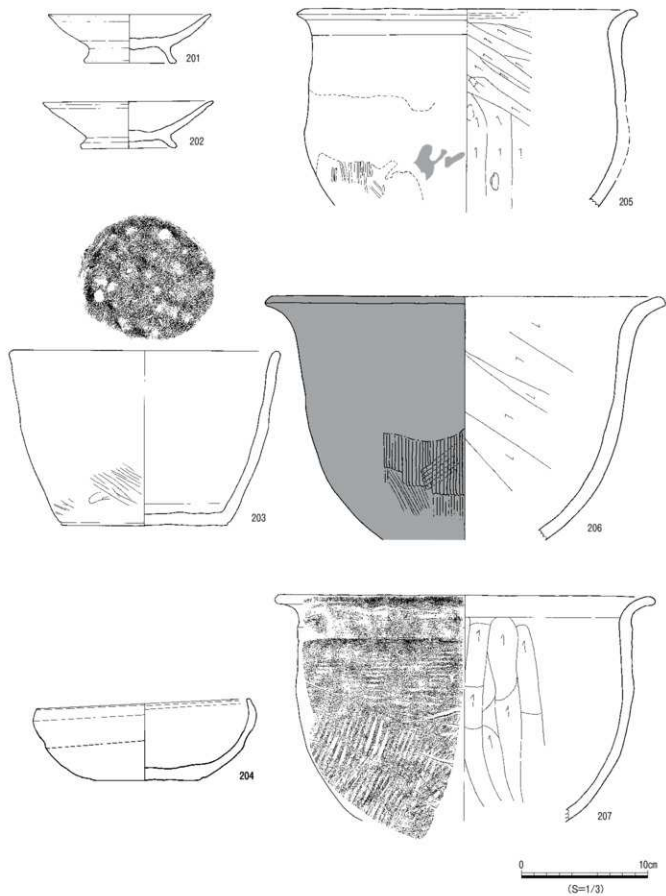
第59图 清8号(北)出土遗物(5)



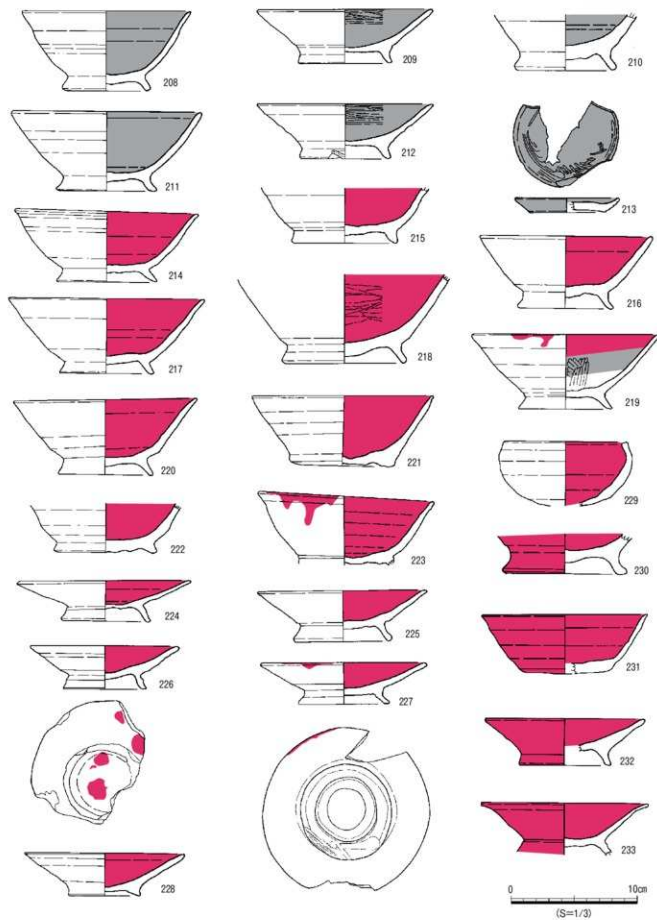
第60图 清8号(北)出土遗物(6)



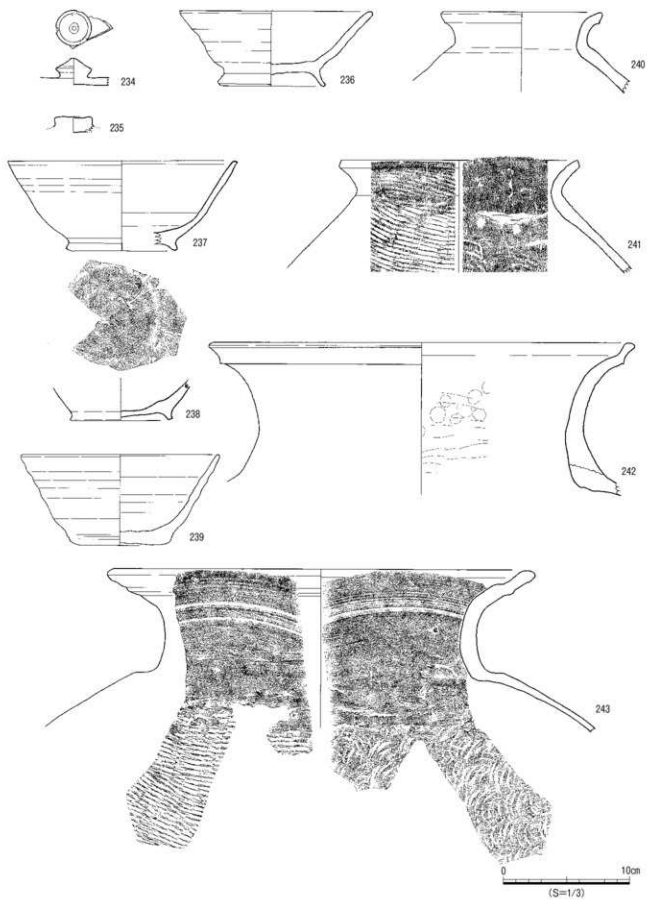
第61图 清8号(西)出土遗物(1)



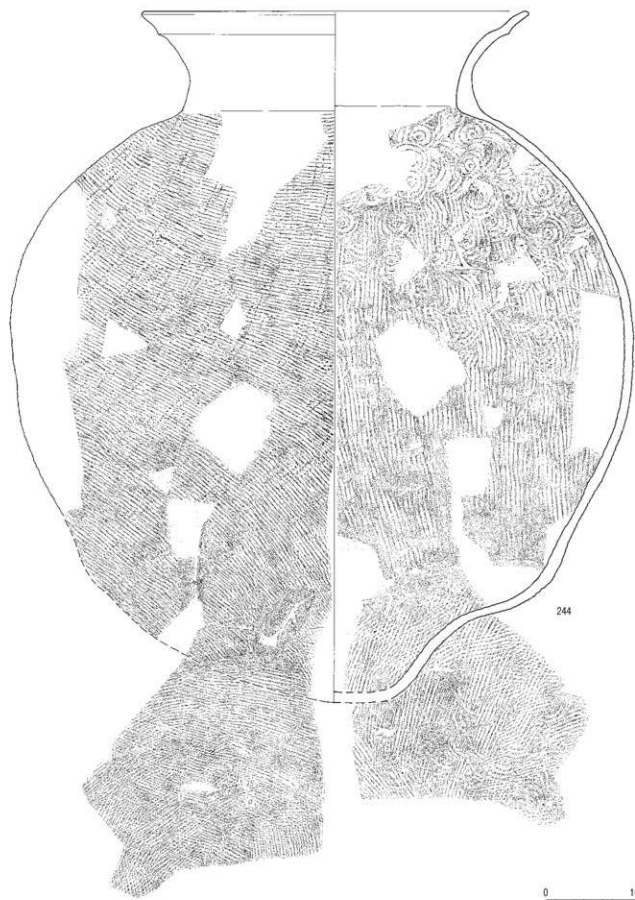
第62图 清8号(西)出土遗物(2)



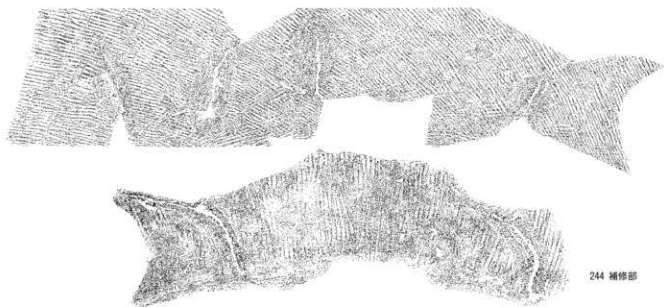
第63图 清8号(西)出土遗物(3)



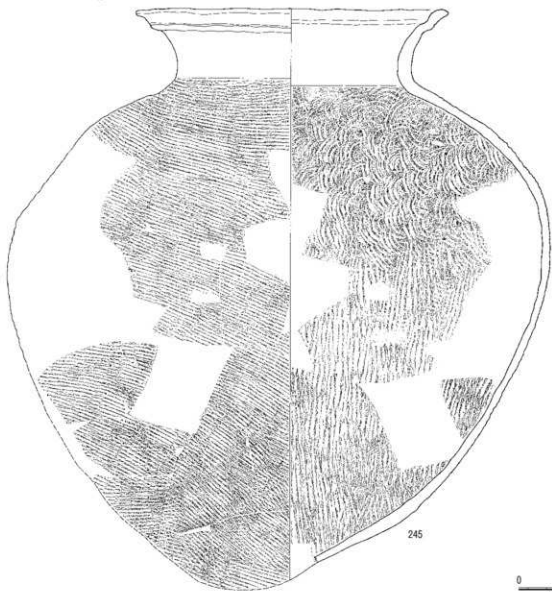
第64图 清8号(西)出土遗物(4)



第65图 清8号(西)出土遗物(5)



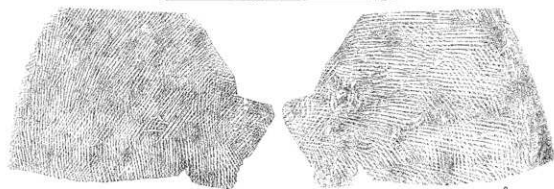
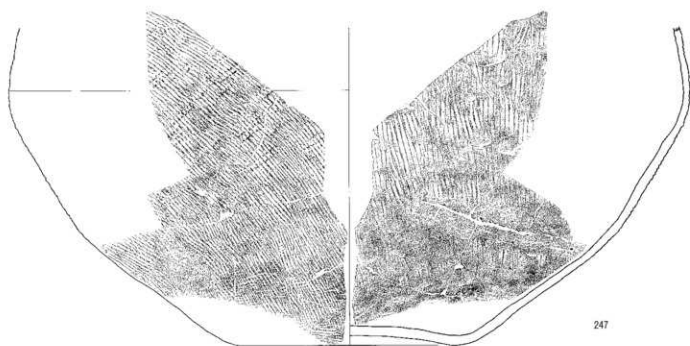
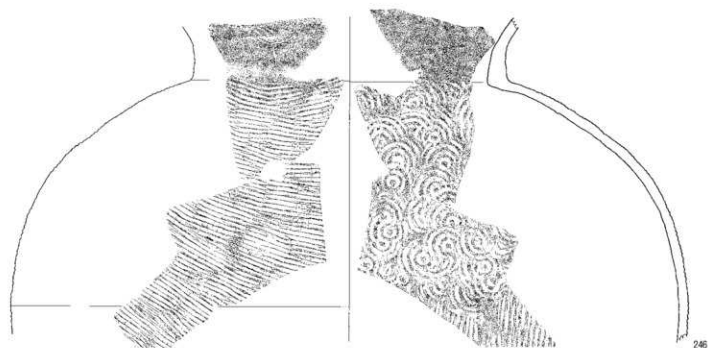
244 補修部



245

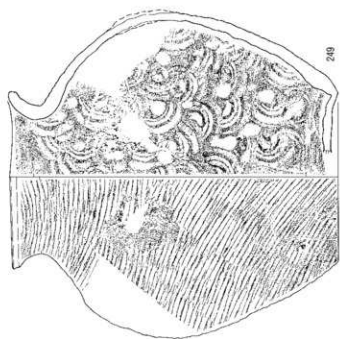
0 10cm
(S=1/4)

第66図 清8号(西)出土遺物(6)

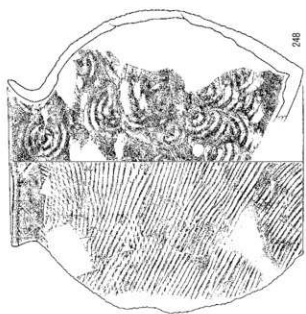


0 10cm
(S=1/4)

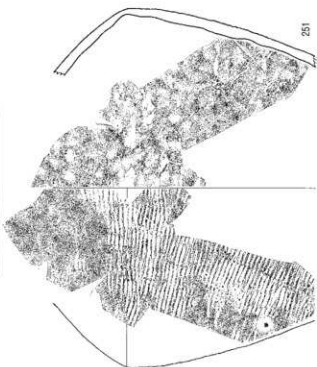
第67图 清8号(西)出土遗物(7)



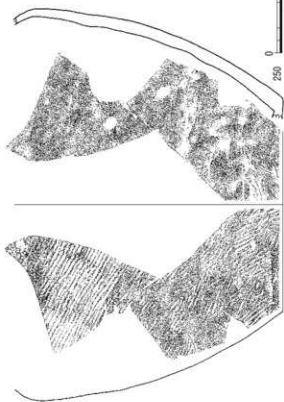
249



248



251

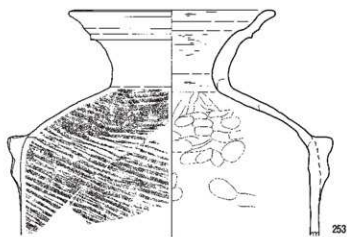


250

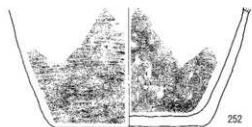


(S=1/3)

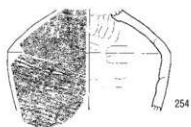
第68図 溝8号(西)出土遺物(8)



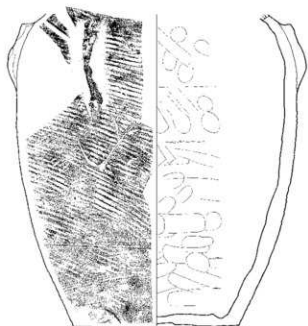
253



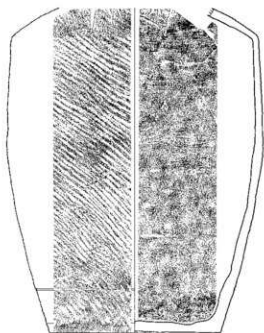
252



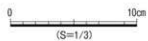
254



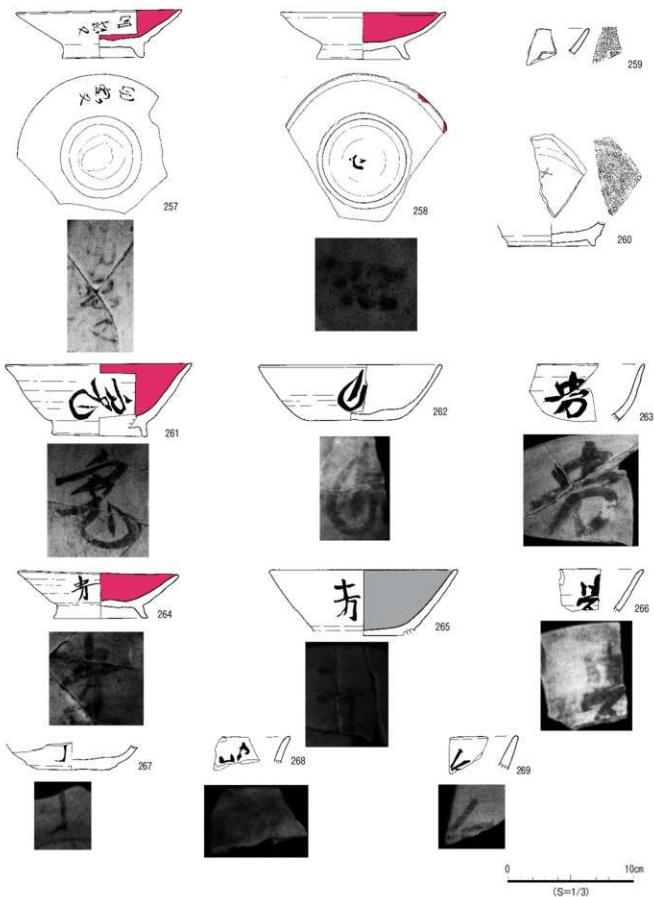
255



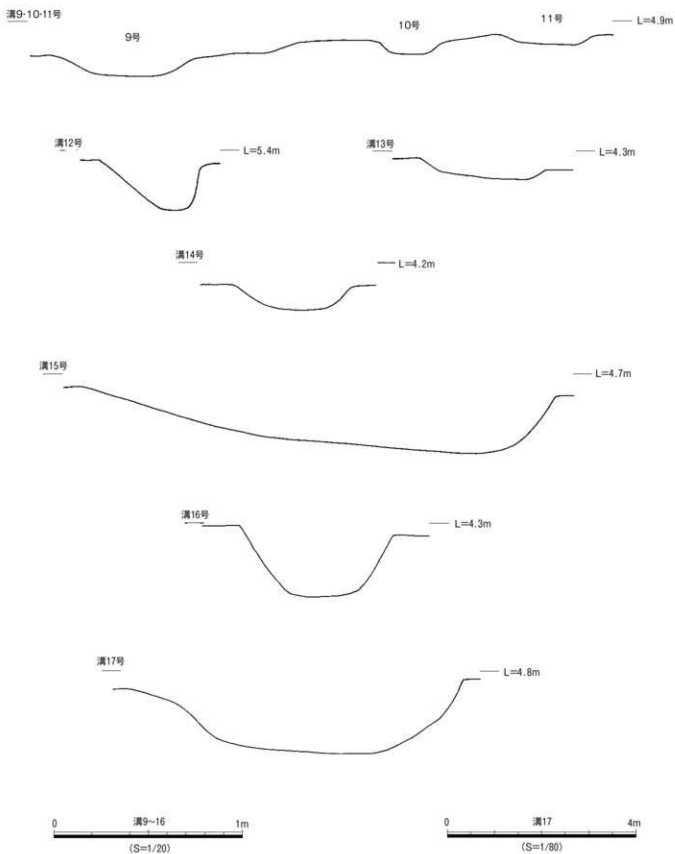
256



第69图 清8号(西)出土遗物(9)



第70图 清8号(西)出土遗物(10)



第71図 溝9～17号

古代遺物（遺構内）

探検 年度	遺構 番号	遺構名	出土区	遺構番号	種類	器種	部位	口径	高さ	重量	材質	状態	出土の色	備考	
15	130	130	A-21	130	土師器	鉢	口縁一部	17.4	7.0	7.3	織子ナ	織子ナ	黄褐色		
	131			土師器	鉢	口縁一部	17.4	7.0	織子ナ	織子ナ	黄褐色				
	132			土師器	鉢	口縁一部	17.4	7.0	織子ナ	織子ナ	黄褐色				
16	137	137	A-21	137	土師器	甕	口縁一部	23.0			ヘラケズリ	ナデ	(赤)に白い黄褐色	内側入土付	
	138			土師器	甕	口縁一部	23.0		ヘラケズリ	ナデ	(赤)に白い黄褐色				
	139			土師器	甕	口縁一部	23.0		ヘラケズリ	ナデ	(赤)に白い黄褐色				
17	140	140	A-21	140	土師器	甕	口縁一部	23.0			ヘラケズリ	ナデ	(赤)に白い黄褐色	内側入土付	
	141			土師器	甕	口縁一部	23.0		ヘラケズリ	ナデ	(赤)に白い黄褐色				
	142			土師器	甕	口縁一部	23.0		ヘラケズリ	ナデ	(赤)に白い黄褐色				
18	143	143	A-21	143	土師器	甕	口縁一部	27.4			織子ナ	織子ナ	黄褐色		
	144			赤色土器	1	輪郭	口縁一部	14.4	7.0	6.0	ミガキ	織子ナ	(赤)に白い黄褐色		
	145			赤色土器	1	輪	口縁一部	17.6			ミガキ	織子ナ	(赤)に白い黄褐色		
19	146	146	A-21	146	赤色土器	1	輪郭	口縁一部	16.0	6.0	6.9	織子ナ	織子ナ	(赤)に白い黄褐色	
	147			赤色土器	1	輪	口縁一部	14.9	7.2	5.2	ミガキ	織子ナ	(赤)に白い黄褐色		
	148			赤色土器	1	輪	口縁一部	14.6	7.2	5.4	織子ナ	織子ナ	(赤)に白い黄褐色	内側入土付	
20	149	149	A-21	149	赤色土器	1	輪	口縁一部	15.0			ミガキ	織子ナ	(赤)に白い黄褐色	
	150			赤色土器	1	高付部	口縁一部	13.2	7.0	3.4	ナデ	ナデ	(赤)に白い黄褐色		
	151			赤色土器	1	輪	口縁一部	12.0	15.0	10.2	ミガキ	ヘラケズリ	(赤)に白い黄褐色		
21	152	152	A-21	152	土師器	甕	つら	2.8			ナデ	ナデ	黄褐色	遺跡跡のみ	
	153			土師器	甕	底	17.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
	154			土師器	甕	底	16.7			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
22	155	155	A-21	155	土師器	甕	底	18.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色		
	156			土師器	甕	底	15.4	8.0	7.2	織子ナ	織子ナ	黄褐色			
	157			土師器	甕	底	15.4	8.0	7.2	織子ナ	織子ナ	黄褐色			
23	158	158	A-21	158	土師器	甕	底	17.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色		
	159			土師器	甕	底	17.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
	160			土師器	甕	底	17.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
24	161	161	A-21	161	土師器	甕	口縁一部	22.0			ナデ	ナデ	黄褐色		
	162			土師器	甕	口縁一部	18.0			ナデ	ナデ	黄褐色			
	163			土師器	甕	口縁一部	18.0			ナデ	ナデ	黄褐色			
25	164	164	A-21	164	土師器	甕	口縁一部	17.0			ナデ	ナデ	黄褐色		
	165			土師器	甕	口縁一部	17.0			ナデ	ナデ	黄褐色			
	166			土師器	甕	口縁一部	17.0			ナデ	ナデ	黄褐色			
26	167	167	A-21	167	土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色		
	168			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
	169			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
27	170	170	A-21	170	土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色		
	171			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
	172			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
28	173	173	A-21	173	土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色		
	174			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
	175			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
29	176	176	A-21	176	土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色		
	177			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
	178			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
30	179	179	A-21	179	土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色		
	180			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
	181			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
31	182	182	A-21	182	土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色		
	183			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
	184			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
32	185	185	A-21	185	土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色		
	186			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
	187			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
33	188	188	A-21	188	土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色		
	189			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
	190			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
34	191	191	A-21	191	土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色		
	192			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
	193			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
35	194	194	A-21	194	土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色		
	195			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
	196			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
36	197	197	A-21	197	土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色		
	198			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
	199			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
37	200	200	A-21	200	土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色		
	201			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
	202			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
38	203	203	A-21	203	土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色		
	204			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
	205			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
39	206	206	A-21	206	土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色		
	207			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
	208			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
40	209	209	A-21	209	土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色		
	210			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
	211			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
41	212	212	A-21	212	土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色		
	213			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
	214			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
42	215	215	A-21	215	土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色		
	216			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
	217			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
43	218	218	A-21	218	土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色		
	219			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
	220			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
44	221	221	A-21	221	土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色		
	222			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
	223			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
45	224	224	A-21	224	土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色		
	225			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
	226			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
46	227	227	A-21	227	土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色		
	228			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
	229			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
47	230	230	A-21	230	土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色		
	231			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
	232			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
48	233	233	A-21	233	土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色		
	234			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			
	235			土師器	甕	口縁一部	21.0			織子ナ	織子ナ	黄褐色			

古代遺物（遺構内）

探検 番号	探検 層号	遺構名	出土区 遺構番号	種別	器種	部位	寸法 (cm)		取組位置	出所	取土の色質	備考		
							口径	高さ						
64	233	遺構名	B-24 1301	遺構層	蓋付	つぎみ部	1.8		ナブ	ナブ	灰褐色	行跡不明		
	234		B-24 1301	遺構層	蓋付	口縁一部	15	5.0	6.1	焼物ナブ	焼物ナブ	にじみ状褐色		
	235		B-24 4009	遺構層	蓋付	口縁一部	11.5	3.8	1.1	焼物ナブ	ナブ	灰色		
	236		A-23 1301	遺構層	蓋付	蓋部				ナブ	ナブ	灰褐色		
	237		B-24 4009	遺構層	蓋付	口縁一部	12	5.0	7.2	焼物ナブ	焼物ナブ	灰色		
	240		B-24 4009	遺構層	蓋付	口縁部	12			ナブ	ナブ	灰色		
	241		B-24 1301	遺構層	蓋付	口縁部	13.0			灰褐色のナブ	灰褐色のナブ	灰褐色		
	242		A-23-24 1301	遺構層	蓋付	口縁部	22			灰褐色のナブ	ナブ	にじみ状褐色		
	243		A-23-24 1311	遺構層	蓋付	口縁一部	33.0			灰褐色のナブ	灰褐色のナブ	灰褐色		
	244		B-24 4009	遺構層	大皿	口縁一部	41.0	3.6	10.0	灰褐色のナブ	灰褐色のナブ	灰褐色	断面最大径11cm 断面最大径11cm	
	245		64	遺構層	大皿	口縁一部	32.0		60.0					
	67		246	遺構名 (器)	A-23 - 24 1301 - 1309	遺構層	大皿	底一部			同心円状ナブ	同心円状ナブ	にじみ状褐色	断面最大径11cm
			247		B-24 4009	遺構層	大皿	底一部	24.0		同心円状ナブ	同心円状ナブ	灰色	断面最大径11cm
			248		A-23 1301	遺構層	蓋付	口縁一部	16.1	14.4	21.4	灰褐色のナブ	灰褐色のナブ	灰色
249		A-23 1301	遺構層		蓋付	口縁一部	14.0	13.4	25.1	灰褐色のナブ	灰褐色のナブ	灰色		
250		B-24 - C-24 1301	遺構層		蓋付	口縁一部	17.0			ナブ	ナブ	灰褐色	断面最大径10.5cm 断面最大径10.5cm	
251		251	B-20 - 21 - 22 - 24 - 24-24 1301 - 1309		遺構層	蓋付	底一部			ナブ	ナブ	灰褐色		
252		252	B-24 4009		遺構層	蓋付	口縁一部	11.8		ナブ	灰褐色のナブ	灰褐色		
253		253	A-23 - 24 1301		遺構層	蓋付	口縁一部	16.6		焼物ナブ	灰褐色のナブ	灰色		
254		254	A-23 - 24 1301		遺構層	蓋付	口縁一部	13.0		ナブ	灰褐色のナブ	灰褐色		
255		255	B-24 コウカヘミソ		遺構層	蓋付	口縁一部	13.6		ナブ	灰褐色のナブ	灰褐色		

墨書土器（遺構内）

探検 番号	探検 層号	遺構名	調査区 遺構番号	種別	器種	取組部位	文字	寸法 (cm)		備考		
								口径	高さ			
43	35	土坑1号	A-24 1121	遺構層	土師器	底部内面						
	36		A-24 1121	遺構層	土師器	底部内面						
	37		A-24 1121	遺構層	土師器	底部内面	天書	12.4		底付		
	38		A-24 1121	遺構層	土師器	底部内面	底付			底付		
	39		A-24 1121	遺構層	土師器	底部内面						
	41		A-24 1126	遺構層	土師器	底部内面			11.4			
	44		土師器	F-27 4002	遺構層	土師器	底部内面	底	12.4	6.0	4.0	底付
	45		C-24 4	C-24 1308	遺構層	土師器	底部内面	底				
	46		C-24 4	C-24 1308	遺構層	土師器	底部内面	底				
	47		C-24 4	C-24 1308	遺構層	土師器	底部内面	底				
	48		C-24 4	C-24 1308	遺構層	土師器	底部内面	底				
	49		C-24 4	C-24 1308	遺構層	土師器	底部内面	底				
	50		C-24 4	C-24 1308	遺構層	土師器	底部内面	底				
	51		遺構名	A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底				
52	遺構名	A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底						
53	53	遺構名	A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	54		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	55		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	56		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	57		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	58		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	59		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	60		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	61		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	62		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	63		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	64		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	65		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	54		66	遺構名	A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底			
67		A-20 307	遺構層		土師器	底部内面	底					
68		A-20 307	遺構層		土師器	底部内面	底					
69		A-20 307	遺構層		土師器	底部内面	底					
70		A-20 307	遺構層		土師器	底部内面	底					
71		A-20 307	遺構層		土師器	底部内面	底					
72		A-20 307	遺構層		土師器	底部内面	底					
73		A-20 307	遺構層		土師器	底部内面	底					
74		A-20 307	遺構層		土師器	底部内面	底					
75		A-20 307	遺構層		土師器	底部内面	底					
76		A-20 307	遺構層		土師器	底部内面	底					
77		A-20 307	遺構層		土師器	底部内面	底					
78		A-20 307	遺構層		土師器	底部内面	底					
79		A-20 307	遺構層		土師器	底部内面	底					
55	80	遺構名	A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	81		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	82		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	83		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	84		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	85		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	86		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	87		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	88		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	89		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	90		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	91		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	92		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	93		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
56	94	遺構名	A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	95		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	96		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	97		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	98		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	99		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	100		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	101		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	102		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	103		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	104		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	105		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	106		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	107		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
57	108	遺構名	A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	109		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	110		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	111		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	112		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	113		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	114		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	115		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	116		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	117		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	118		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	119		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	120		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	121		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
58	122	遺構名	A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	123		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	124		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	125		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	126		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	127		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	128		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	129		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	130		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	131		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	132		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	133		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	134		A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底					
	59		135	遺構名	A-20 307	遺構層	土師器	底部内面	底			
136		A-20 307	遺構層		土師器	底部内面	底					
137		A-20 307	遺構層		土師器	底部内面	底					
138		A-20 307	遺構層		土師器	底部内面	底					
139		A-20 307	遺構層		土師器	底部内面	底					
140		A-20 307	遺構層		土師器	底部内面	底					
141		A-20 307	遺構層		土師器	底部内面	底					
142		A-20 307	遺構層		土師器	底部内面	底					
143		A-20 307	遺構層		土師器	底部内面	底					
144		A-20 307	遺構層		土師器	底部内面	底					
145		A-20 307	遺構層		土師器	底部内面	底					
146		A-20 307	遺構層		土師器	底部内面	底					
147		A-20 307	遺構層		土師器	底部内面	底					
148		A-20 307	遺構層		土師器	底部内面	底					

(4) 遺物

古代の遺物は、土師器・黒色土器・赤色土器・須恵器・土製品・黒書土器が出土している。中でも、椀では須恵器より土師器、椀より坏の出土数が大となる。また、黒書土器・ヘラ書き土器の出土数が多いことも特徴である。口縁部合計10,230点のうち、342点を図化した。

土師器

椀 (第72図270～272)

全体を復元できたものは少く、3点を図化した。270は胴部外面には回転ヘラケズリ調整が施されている。

272の口縁部は玉縁状を呈し、胴部に丸みをもつ器形である。270・271は完形の椀である。

坏 (第73図273～第74図316)

非常に多量に出土した土師器片のうち、完形品もしくは残存状況の良好な44点を図化した。

273は、側面観が箱形で、直線的に立ち上がる器形を呈する坏Ⅱ類に該当する。この器形は少なく、完形品の1点を図化した。

274～312は逆台形の器形のもので、Ⅲ類に該当する。この器形と思われる土師器片は非常に多い。口径13cm器高4cm程度のものが多く、底径はややばらつきがある。

274～293は、底部から直線的に開く器形の一群である。このうち274～288は口縁部が直直し、289～293は口縁部が外反する。294～312は、胴部に丸みをもつ器形の一群である。このうち294～298は口縁部が直直し、299～312は口縁部が外反する。274・276・279・284・285・287・289・291～295・299・300・303・304・309・312は、胴部外面下端に丁寧なナデ調整やケズリが施され丸みをもつ器形である。277・278・281～283・286・297・298・307・308・310・311は、回転台を使ったナデ調整時にできた段を胴部下端に観察できる。275・276・281・282・284・287・289・291・293・295・296・302・304・309は、底部外面に丁寧なナデ調整が施されている。279・280・282・288・290・296・301・310は硬質に焼き締められている。

313は充実高台を有するもので、硬質に焼き締められている。314は小坏で内面にスス痕がある。底部を内面から打ち欠いている。315・316は口径が広く器高の低い器形になる。

高台付皿 (第75図317～320)

317は、胴部と高台の間に斜めに突き出した短い袴状の

突帯が巡る形状を呈する。318・319の高台はハの字状に開き、端部は角張る。320の高台はハの字状に開き、端部は細くなる。

皿 (第75図321, 322)

321は直線的に開く器形である。322は胴部の立ち上がりから外反する器形である。

鉢 (第75図323～325)

323・324は、口縁部を外反する鉄鉢状の器形であり、硬質に焼き締められている。323は完形品で、底部内外面に指頭痕を残している。324は胴部下半が尖り気味の器形で、底部を欠損している。325は直線的に立ち上がり底部は丸みを帯びる器形の完形品である。内外面ともに丁寧なナデ調整が施されている。

壺 (第75図326)

胴部が丸く膨らむ小型の壺である。内外面ともに丁寧なナデ調整が施されている。

甕 (第75図327)

遺構内と比べ、包含層での器形を判断可能な土師器甕の出土数は少なかった。甕Ⅱ類に該当し、胴部にアーチ状の把手が貼り付けられている。外面にハケ目調整、内面にケズリ調整が施されている。胴部外面にはスス痕を観察できる。胴部の半分と底部を欠損する。

黒色土器

I類 (第75図328～331)

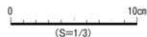
328～330は、胴部はやや丸みをもつ器形の椀である。高台は短く端部の細くなる形状で、断面は外側が直で内側が傾斜する形になる。内外面とも丁寧なミガキを施されている。330は口縁部が直に立ち上がる器形である。331は胴部の大部分と高台を欠損している。高台の基部の口径は5cmを測り、その外周には、底部から下方に向く形で、口径7cm厚さ4mm長さ5mmの突帯が巡る。二重に長短の高台が巡るような形状である。内面に放射状のミガキを観察できる。

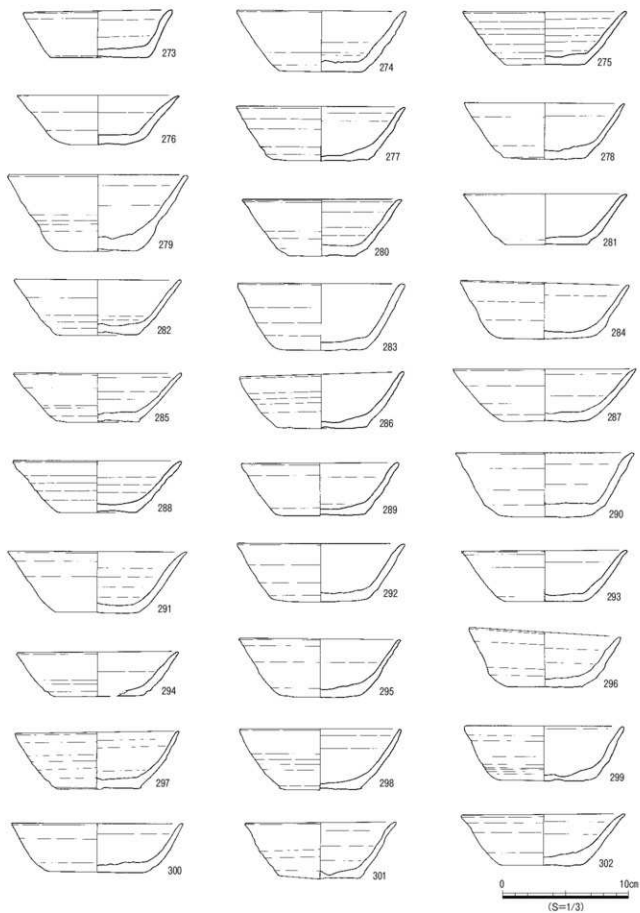
II類 (第75図332～335)

332～335は、丁寧なミガキを施された小皿である。底部内外面には、指頭痕が横に沿って巡るように施されている。



第72図 土師器 椀





第73图 土師器 坏 (1)

赤色土器

I類 (第76図336~349)

336~342は、椀Ⅱ類に該当する。339は底部を内側から打ち欠いた口径2cmの穿孔がある。343は、椀Ⅴ類に該当し、やや低い器高5.3cmを測る。344は高台を欠損している。338・339・342・343・344は硬質に焼き締められ、337・339は底部内面に、344は外面全体と胴部内面に渦巻き状のスズ痕がみられる。345・346は高坏で、口縁部を欠損している。347~349は高台付皿である。347・348の高台はハの字状に開き端部は丸く、349の高台は短く細い。

Ⅱ類 (第76図350~354)

352以外のものは硬質に焼き締められている。350は器高の小さな椀で、高台は太く短く端部は細く畳付は広い形状である。351~353は坏である。351は底部がやや上げ底で、内外面とも丁寧なミガキが施されている。大宰府出土の坏に類似し、土坑1号からも同様の坏が出土している。352はこれに器形は似ているが、焼成が悪くミガキも施されていない。353は内外面とも丁寧なミガキが施された坏Ⅱ類である。

須恵器

蓋 (第77図355~381)

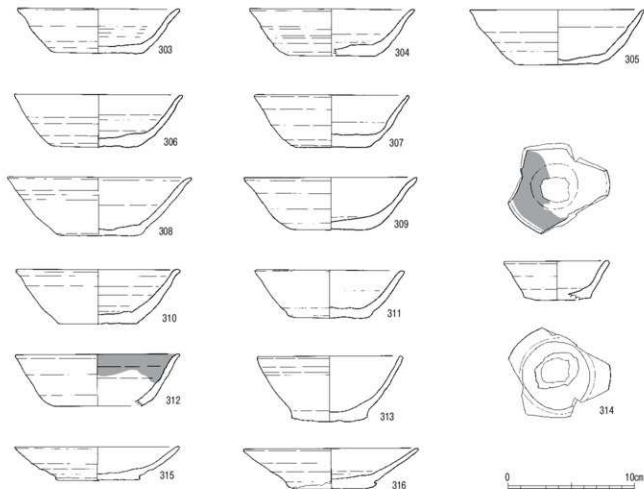
欠損しているものが多く、つまみ部もしくは端部を有する27点を図化した。355・359・361・365・366・368・369は蓋Ⅱ類に該当する。356・357・360は蓋Ⅲ類に該当する。358・362~364・367・370は蓋Ⅳ類に該当する。372~377、380は端部が断面三角形の肥厚部となる形状を呈する。371は端部に丸みをもつ形状で、欠損したつまみ部を扶む位置に一对の穿孔を確認できる。つまみ欠損後に紐を通して代用した可能性がある。381は小蓋の完形品である。

椀 (第78図382~388)

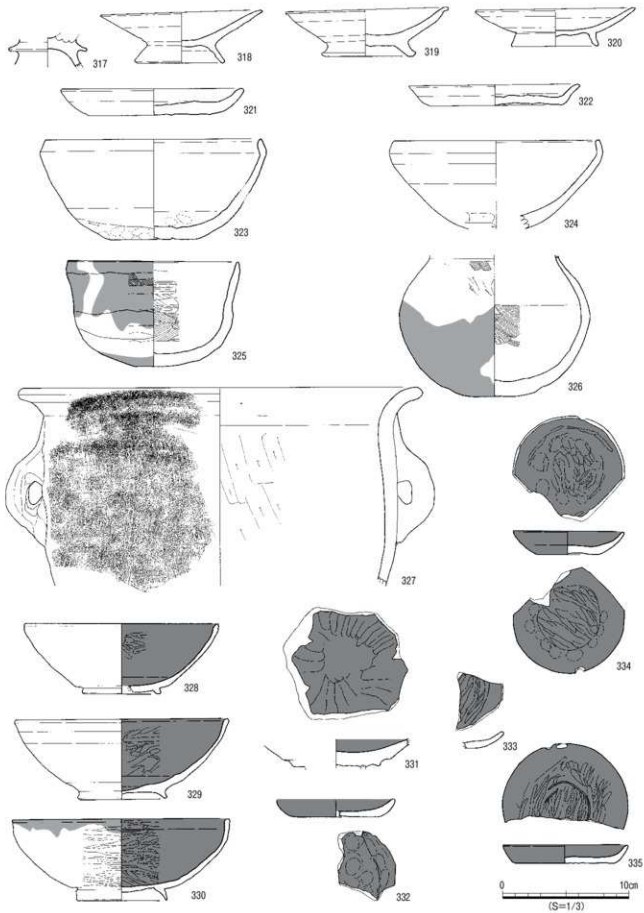
高台を有する7点を図化した。382は、底部から直線的に開いてのびる器形の椀Ⅰ類である。385・388は、布目圧痕を底部内・外面にそれぞれ施されている。383・386は、胴部に丸みをもつ器形のもので、口縁部を欠損している。384は丸く整形され、底部外面に磨減痕が観察される。

坏 (第78図389~395)

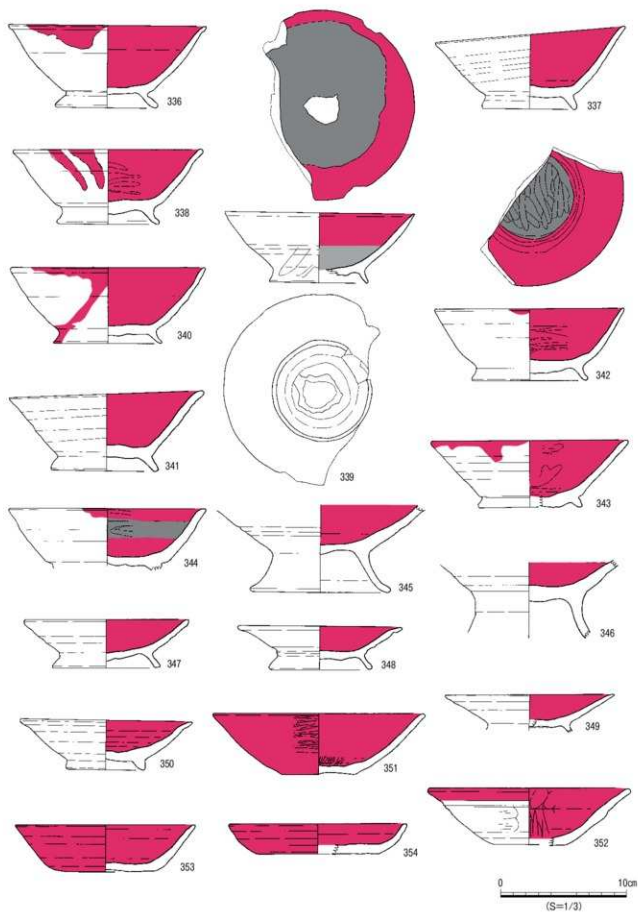
7点を図化した。389は坏Ⅱ類に該当する。390~394は坏Ⅲ類に該当する。385は小坏の坏Ⅴ類に該当する。



第74図 土師器 坏(2)



第75図 土師器 血ほか・黒色土器



第76図 赤色土器

390～392・394は、胸部の立ち上がりには稜をもつ。393の口縁部は玉縁状を呈する。

皿 (第78図396～399)

396・397は直線的な胴部で、398・399は外反する。

甕 (第79図400～第80図410)

11点を図化した。口縁部を残すものと胴部から底部を残すものを図化した。400～408は頸部が稀まり口縁部は短く外反している。外面は平行叩きが施され、404には格子状叩きが施されている。内面には同心円当てが見られる。409は頸部から上を欠損する。410は二重口縁で、頸部に櫛描波状文が施されている。

鉢 (第80図411～413)

3点を図化した。バケツ形に開く器形で鉢Ⅰ類に該当する。411は底部外面に同心円叩きが施されている。

壺 (第80図414～第81図425)

12点を図化した。414は完形品の小壺である。415～417は頸部がくの字に屈曲し二重口縁となるものである。420・424は肩部に耳状の把手をもつものである。

421・422は頸部と肩部の中間に突帯を巡らせている。

420・423・425の内面には指頭痕が施されている。

その他

脚付の土器 (第81図426～428)

3点を図化した。脚が底部外面に貼り付けられた器形

を呈する。火舎の可能性があり、脚を3本と想定して図化した。426は脚の根元部分だけを残す。

硯 (第81図429, 430)

429・430ともに内面に磨り減って光沢する部分を持つ。

430は風字硯の前半部右側であると考えられる。

穿孔のある土器 (第81図431)

底部内面から穿孔が施され、用途は不明である。

土製品

紡錘車 (第82図432～第83図450)

すべてが土師器あるいは黒色土器からの転用で、周縁部は平坦に調整し片面中央が窪む器形である。

円形土製品 (第83図451～461)

穿孔の痕跡は見られないが、紡錘車の可能性のあるものを11点図化した。

墨書土器

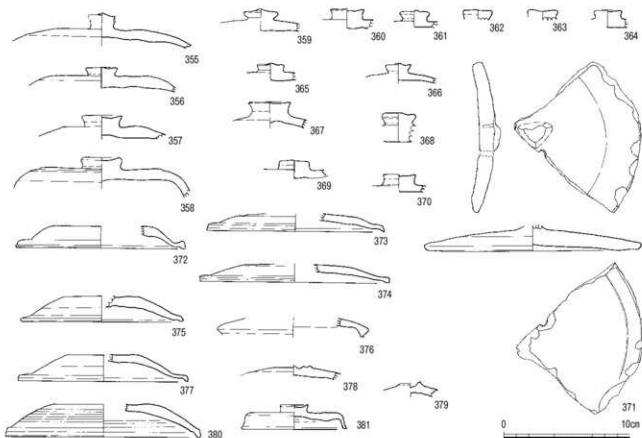
包含層からは178点出土している。文字の釈読について、永山修一氏(ラ・サル学図教論)の御教示をいただいた。34点出土した「宅」の字を4類に分類した。

宅Ⅰ類 ウ冠が通常のもの

宅Ⅱ類 ウ冠の「ワ」が「つ」にみえるもの

宅Ⅲ類 草書体のもの

宅Ⅳ類 「屯」の字形でウ冠と一体化したもの。



第77図 須恵器 蓋

墨書土器 (第84図462～第87図507)

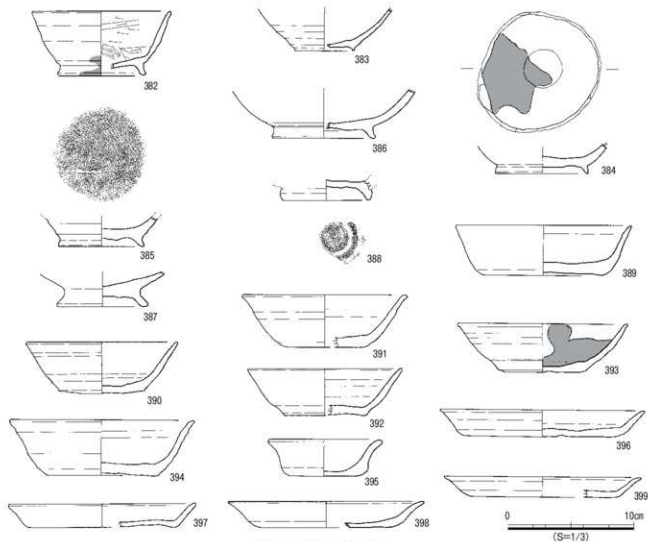
墨書の確認できた46点を図化した。462～471は「宅」と読めるもの、およびその一部と考えられるものである。宅Ⅰ類に466・469、宅Ⅱ類に462・465・470、宅Ⅲ類に463、宅Ⅳ類に464が分類される。468、471は一部のみ残存する。464は、内黒外赤の丁寧に磨かれた土師器椀に、「宅」の変形したと考えられる「屯」の墨書が施されている。字形の同じものは、土坑4号出土の朱書きの44がある。472～475は「福」と読めるもの、およびその一部と考えられるものである。472～474は、C-32区Ⅲ層から出土した黒色土器Ⅰ類の体部外面に、墨書を施されたという共通点がある。476・480・481は「作」と読めるもの、およびその一部と考えられるものである。480・481は傍の一部である。476は底部外面にヘラ記号も施されている。477～479は「万」と読めるものを含むもの、およびその一部と考えられるものである。477は「中万」と読める。482・483は記号と考えられるものである。

482は逆三角形の記号と思われる。ピット26出土の76にも同様の記号が施されている。483は2箇所に墨書を

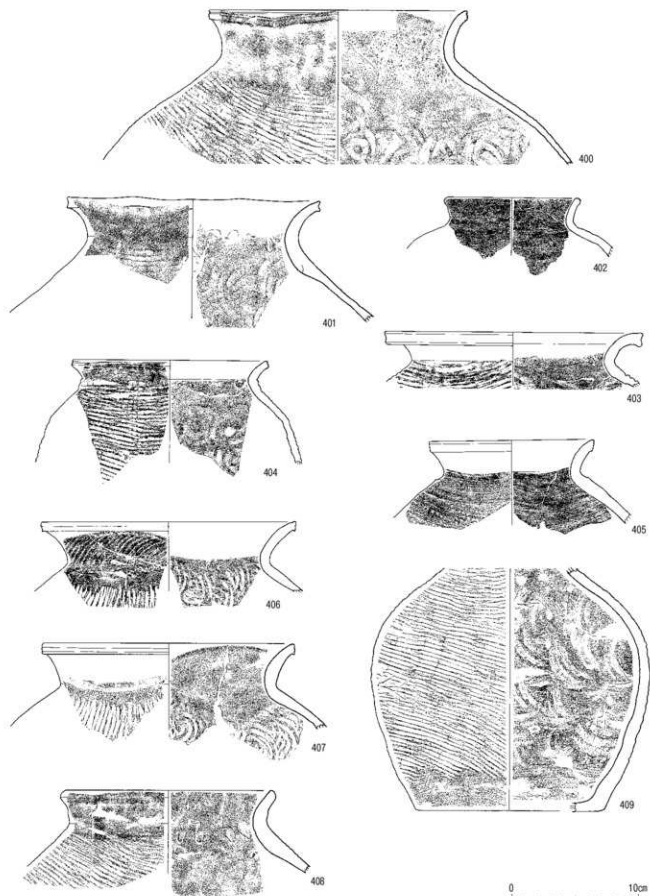
施されている。左側の記号は長方形の隅部に丸がついた形状の一筆書きである。484～507は墨書の一部のみ残存し判読ができないものである。484は「大」もしくは「六」に類似する。ピット3出土の53からも、同様の墨書を観察できる。505は溝15号から出土している。

ヘラ書き・刻書土器 (第88図508～第94図640)

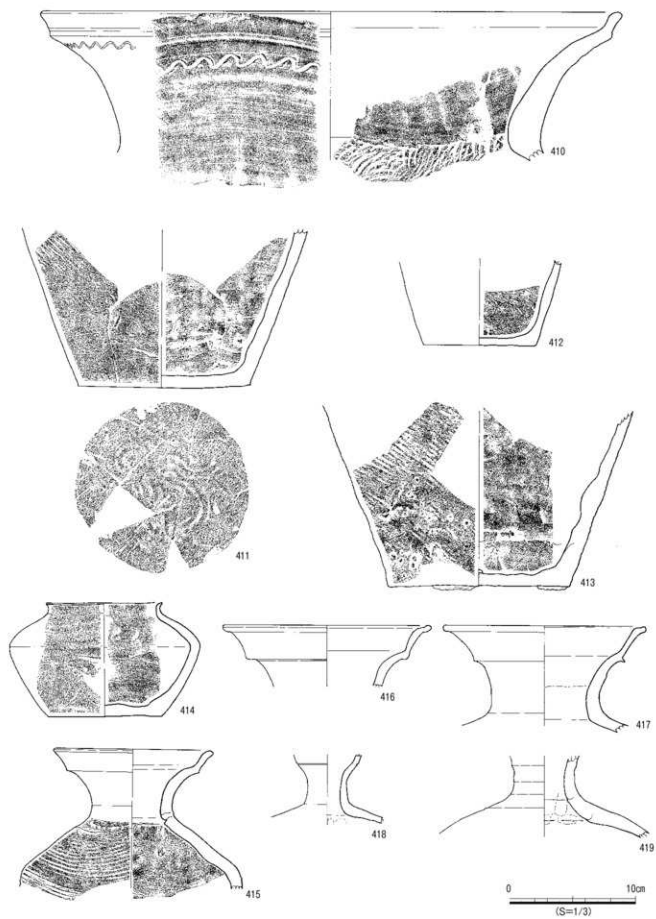
ヘラ書き・刻書の確認できた133点を図化した。土器の焼成前にヘラなどで文字や記号が施されたものをヘラ書き土器とし、焼成後に施されたものを刻書土器とした。ヘラ書き土器が大部分であり、529・547・549・578・580・594・615が刻書土器である。508～525は「宅」と読めるもの、およびその一部と考えられるものである。宅Ⅰ類に516・518・520、宅Ⅱ類に511・519、宅Ⅲ類に508・510・512、宅Ⅳ類に509・513・517・523～525が分類される。514・515・521・522は一部のみ残存する。508と同じ字形は溝8号出土の257・261や463などの墨書にも見られる。526は白色を呈するⅢの底部内面に「金財」と施されている。掘立柱建物を経てC-27区で出土した。527・528は「富」と読めるものの一部と考えられるものである。



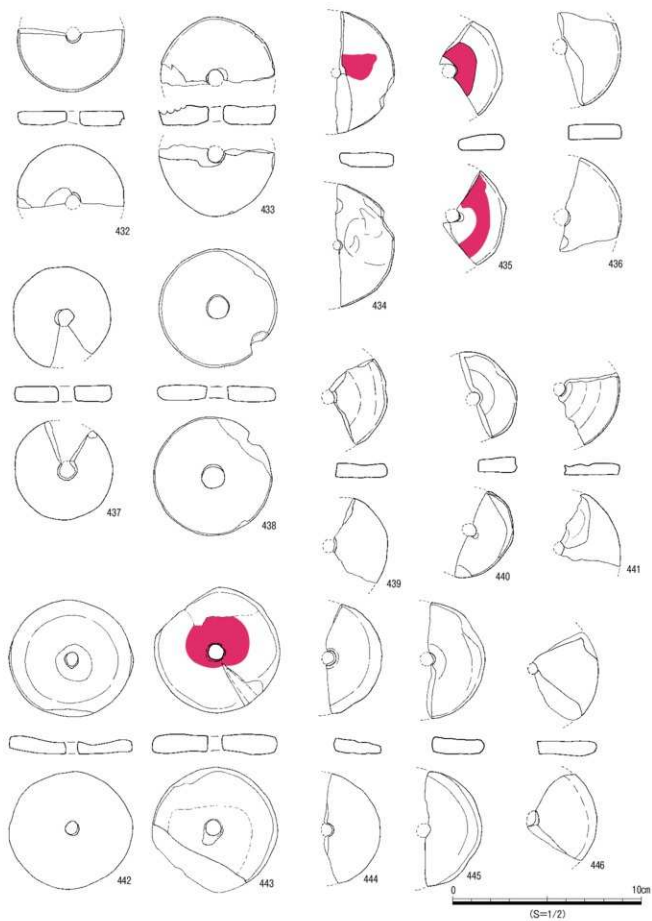
第87図 須恵器 椀・坏・皿



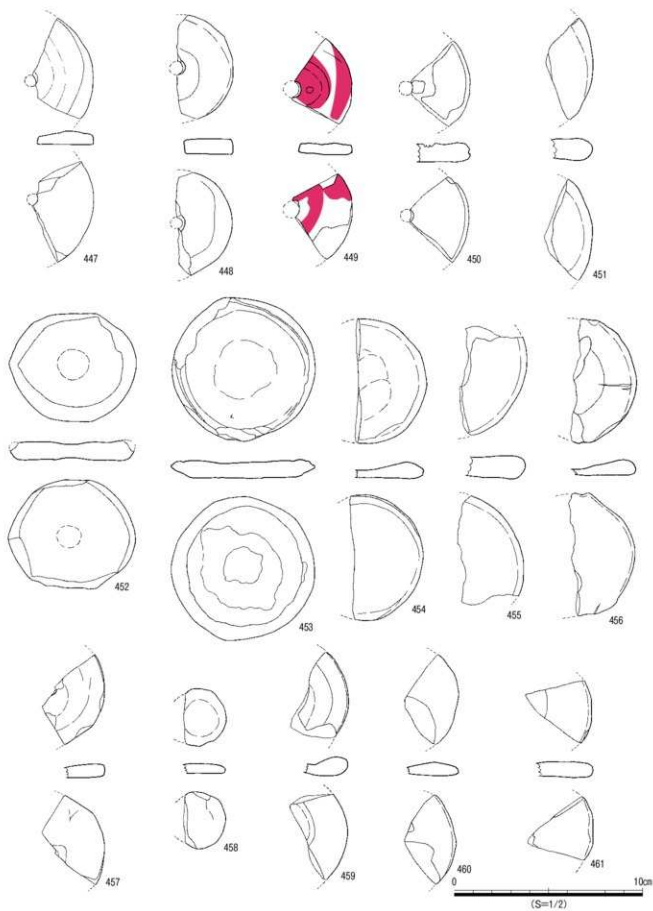
第79図 須恵器 壺



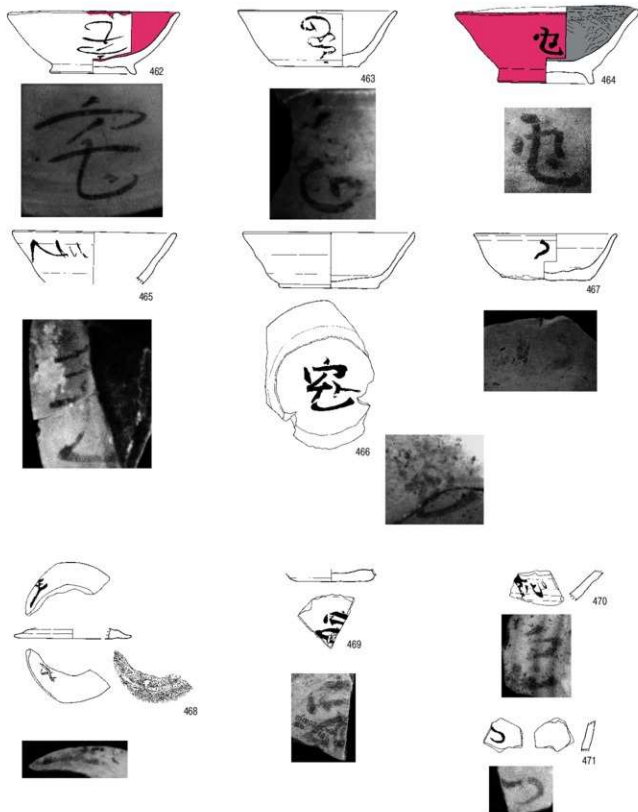
第80図 須恵器 壺・鉢・盃



第82図 土製品 1

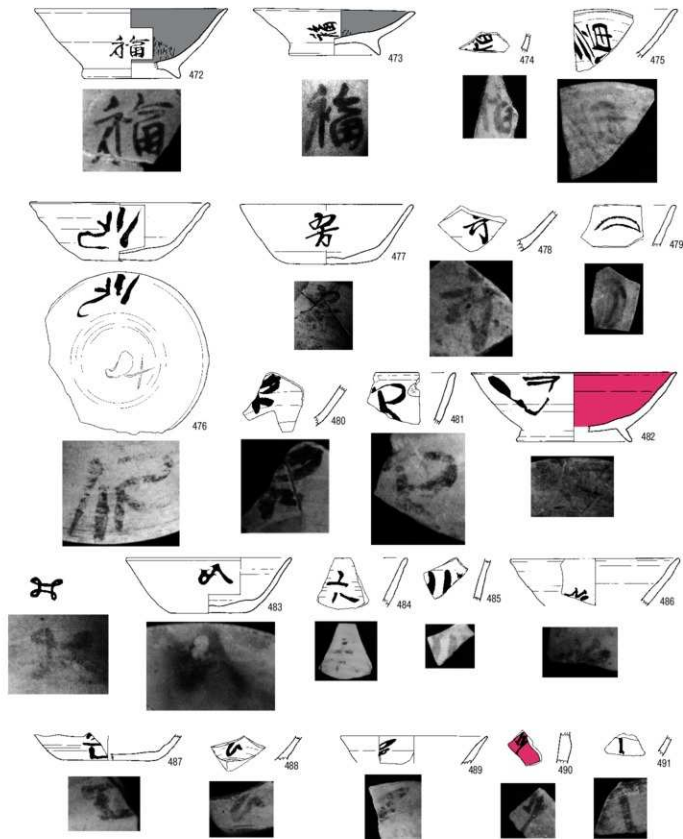


第83図 土製品2



0 10cm
(S=1/3)

第84図 墨書土器 1



0 10cm
(S=1/3)

第85图 墨书土器 2